

# 光悦作の茶碗が語る秘史

—— 本阿弥光悦の生誕四五四年史が語る今後 ——

## 序

まず本書が現行グレゴリオ暦で表記することの事由を述べておきたい。暦法は歴史的に重大な叡智を伴う文明の証だから、その経歴も怪しいグレゴリオ暦を使うのは不本意も甚だしい思いに駆られるが、本書は単なる歴史秘話と異なり、過去と未来の連続性に鑑みると、普遍的な世界的コンセンサスを提起することから、敢えて広く行き渡る暦法で通年数を示すほかないのだ。また本題は本阿弥光悦の通り名を借りているが、人物伝は参考程度にとどめており、登場人物は総て公的な扱いを多くし、私的な個人情報は特記のほか詳しく触れない。

本書は光悦作の楽焼茶碗を主人公とするが、光悦作の茶碗で知られるのは国宝「不二」で娘の嫁入り道具に焼かれたといわれる。本書の茶碗が焼かれたのは、徳川二代将軍の秀忠五女和子が後水尾天皇の中宮すなわち東福門院となり、その第二皇女として興子内親王が降誕され、さらに興子内親王七歳が明正天皇として、後水尾天皇から譲位される時代にあたる。今この茶碗は自ら治まるべき処に治まるかの岐路に立たされており、それが適うか否かは近未来の命運を透かすと断じて過言とはいえない。

主人公は徳川吉宗の命名で「紅葉乃錦」と愛でられることになるが、紅葉乃錦は靈元天皇から徳川八代将軍に恩賜されるところとなり、昭和五〇年代その歴史的命運に則るかのよう適正な管理下に護られている。つまり紅葉乃錦は後水尾天皇、明正天皇、後光明天皇、後西天皇、靈元

天皇に愛でられ、紀州將軍家所蔵の恩賜茶碗として大事に扱われて、大政奉還後の開国維新から昭和の大戦後をも静かに過ごし、かつて光悦が紅葉乃錦を焼いた義を保ちながら、確かなる時を証すと同時に日本の在るべき姿を示しているのだ。それはまた、光悦生誕四四四年を数えて知る秘史でもあるが、日本が世界へ向け発信すべきメッセージでもあるのだ。

日本列島は神格伝統のDNAが今に生き続けており、その神域に仏教が伝来すると、結果的に神仏混淆の思潮が本地垂迹説など生じているが、その間には、大化の改新あるいは壬申の乱など学校史観が必ず採り上げる条あるも、昭和の敗戦後は日本史が不様に千切り取られている。神格訓話を綴る公式文書は古事記三巻の成立に始まるが、編纂は在位六七三〜六八六年の天武天皇の宣命に始まり、持統天皇、文武天皇を経て、元明天皇の在位中七一二年に謹上され、成立までに三〇年を有に超える大作として仕上げられている。而して、輕佻浮薄の浅学は読解不能に陥るや偽書と扱うなど、自身の無知蒙昧を棚上げ、捨て台詞に終始する例が跡を絶たない。

古事記三巻の成立で口伝旧辞が見直されるとなれば、仏教にも新たな見直し気運が高まるのは必然これ水が流れるごとし、最澄（七六七〜八二二）空海（七七四〜八三五）円仁（七九四〜八六四）など、順に伝教・弘法・慈覚の大師号を時の天皇から諡されるが、むろん自ら入唐の修験道中に倒れても偉大なる無名僧は少なくなろうし、僧侶の多くが惟神の心得を十分に満たした有職故実の雄たるは疑いあるまい。人に文明の自覚が起る次第は何故に始まるか、その思潮を筆者はアニミズムの位相が世界に広まっていき、その位相を解くシャーマニズムの伝播が世界の主流となり、いつしか媒介としてのジャーナリズムも受け容れられるようになり、その三要素が組成する中に文明という信仰心が生まれたのだらうと思っっている。当然それは一神教も八百万と結ぶ神々も御仏も総てが包含される世界を指している。

さて紅葉乃錦であるが、その物性物質が醸し出す楽焼の風雅は妙味としても、その神性仏性を象る位相は天皇家と将軍家にしか目通りされていない。ところが、昭和の敗戦は進駐軍の暴走が繰り返されるうち、日本の文明文化に係る宝物は押収や接収あるいは破損や破壊など、価値観の心得もない勢力の弄ぶところとなり、紅葉乃錦も例外でなく、その危機に対応する安全策などは薄氷を踏むが如しだった。幸い秘匿中の秘は外つ国の乱暴狼藉を免れたが、戦後日本の文明的な価値観は外つ国の劣悪きわまるオーケシヨンの対象とされ、文化的宝物すべての評価が競売ビジネスに操られるが如き賤しい現実を招来してしまった。

つまり、日本政府は占領下の呪縛を脱せられないまま、土地本位制と貯蓄性向で成る日本人の復興活動に乗じるのみ、営利追求が目的の法人格に陥る公を見過ごし、政治家言こぞつて詐欺を奨励するかの如き私利私欲に塗れていった。最大の悲劇は日本人に成り済ました外つ国の勢力が政治家言へ巣くうようになり、もはや有力なポストは日本文明と無縁のコスモポリタンを主流に人事が決められ、是のただよへる祖國を修理り固め成すには、再び古事記三巻の成り立ちに宿る日本の文明文化を掘り興すほかない。すなわち、本義の日本人であれば、古来その使命感は克己自立が信条ゆえ、現代デフォルト系ガバナンスの如き邪神に操られるなんぞは、有り得ない話で家督に歴史的な誇りを取り戻せば済むわけである。

日本人の戸籍が外つ国に篡奪される仕掛けは本文で説くが、国際社会が究極の公証とするのは戸籍ゆえに、主権在民法を巧妙に操りつつ戸籍を掠め取れば国も奪えるのだ。紅葉乃錦の戸籍が問われるとすれば、その本籍が問われるとすれば、それを解き明かす資質も問われるし、単なる住民基本台帳を扱うレベルでは鑑識そのものが成り立たないし、まして鑑定ビジネスの如き市場経済に委ねるべき筋でもなし、戸籍は問われる歴史を解く公証そのものなのだ。

あめつちのはじめのとき、たかまのはらになりませるかみのみなは、あめのみなかぬしのかみ、つぎにたかみむすびのかみ、つぎにかみむすびのかみ。このみはしらのかみは、みなひとりかみなりまして、みみをかくしたまひき。

つぎにくにわかくうきあぶらのごとくして、くらげなすただよへるときに、あしかびのごともえあがるものによりて、なりませるかみのみなは、うましあしかびひこぢのかみ、つぎにあめのとこたちのかみ、このふたはしらのかみもひとりかみなりまして、みみをかくしたまひき。かみのくだりいつはしらのかみは、ことあまつかみ。

古事記上巻の書き出しである。アニミズム・シャーマニズム・ジャーナリズムに依る信仰心が文明だとすれば、神仏敬慕の出版物は文明力に言依さし賜ひきもので、発刊から現在まで増刷を重ねて続く出版物が、聖典また教典と呼ばれて尊ばれるのも宜なるかな。それら類に入る中で古事記は「天地の初発の時……と書き出し、他の出版物に比すると最も後発となるが、その意が及ぶところに達すると、実に雄大かつ精緻な史観が存する覚えを新たにす。それは過去と未来の連続性を喚発していきながら、今後に何が起りえようと、その今後を透かす潜在的な過去性と結びつつ、その位相に相応しい確信を得るための養分が漲っている。本書の紅葉乃錦に宿る命に筆者の意が及ぶところ、その信仰心は読者に届き得るものか、克己自立を以て奉公これ念じて謹上としたい。

壬辰の荒ら屋にて

天雷无芒こと栗原 茂 拜

## 本文 ● 本阿弥光悦その人物像

事典などに載る個人情報によると、本阿弥光悦（一五五八〜一六三七）は永禄一年（寛永一四年）の人すなわち安土桃山期〜江戸初期の芸術家で京都に生まれる。本阿弥家の系は代々が刀剣の鑑定・刀礪・淨拭の業界で知られ、光悦家は分流でも代々を継ぐと伝わる。光二（光悦の父）は徳川家康（一五四二〜一六一六）が竹千代と名乗るころ、今川義元（一五一九〜一六〇〇）が人質で竹千代を封じていたころ、義元の招きで駿府に赴き対面したのが始まりとされ、のち家康時代に小刀を研いだり、食事の相伴を務めた記録が残されている。妙秀（光悦の母）は熱心に法華経を信仰し、奢侈に酔う戒め厳しくし、生涯九〇年の長寿を貧者救済に尽くしたという。

当時の京都三長者に選ばれるのは、彫金とくに目貫の名匠を祖に大判座・分銅座の財務で代を継ぐ後藤四郎兵衛家、両替と糸割符の特権で朱印船交易を営み豪商となる茶屋四郎次郎家、朱印船交易に測量土木や河川開削を加えて富豪になる角倉家が知られる。これら長者に劣らないのが本阿弥家といわれ、光悦は家職のほかに、和の教養を身に帯びた独自の美術工芸で活路を啓くと絶賛され、実際その流儀を継ぐ芸道は現在も多分野に活かされている。たとえば、先史その芸道開闢は万葉歌あるいは考古発掘に窺い知れるが、大化以前と奈良そして京都へ遷る都の芸が術を究め道を啓くには、その節々における具材の発見発明と大きく関係するため、芸術と芸道は一体不可分でないと言なる時代の徒花として朽ちてしまうのだ。

光悦の芸道は書道、茶道、香道、絵画、陶芸ほか多岐に及ぶとされ、特に寛永三筆の一という書は松花堂昭乗、近衛信尹と並び称されており、自得斎、徳友斎、太虚庵を号し、根付や糸印の数も必然的に増えたとされる。角倉素庵（一五七一〜一六三二）と共著刊行の嵯峨本とか、俵屋宗達（生没不詳）の下絵に揮毫した歌巻や色紙、また蒔絵や茶碗など、光悦に依る作品は総てが

当代随一の花と讃えて過言でないと言われる。紅葉乃錦に依る茶道については後述するが、光悦を語るとき重大視されるのは、家康からの拝領と伝わる洛北鷹峯の地であり、その地に移住するや光悦は皆法華を第一義に題目三昧で過ごし、雅遊な創作で晩年を送ったと言われている。この地に没した光悦を惜しむ言葉として天下の重宝があり、この讃辞は今も語られ、現行インターネット社会では、鷹峯を巡る詮索も賑わいを増しているという。

鷹峯これ古くは栗栖野と呼ぶ遊獵地の一帯で中世に至ると、蓮台野と呼ぶ葬送地の背後にある辺鄙な野原だったと言われる。とはいえ、京都と丹波地方を結ぶ街道筋にあたり、いわゆる南北朝時代の長坂口などは関所が設けられており、軍事上の重要拠点として『太平記』にも欠かせない地とされている。家職を養子の光瑳に託した光悦が移住するのは、大坂夏の陣（一六一五）後と読む説が支持されており、東西三六〇メートル・南北八〇〇メートルの地に建てられた家屋敷は五〇軒に及ぶとの説が伝えられる。技芸卓越の名匠を含む村人は二百に及ぶといい、田畑山林も地産地消に役立てられ、この芸術村で光悦は没したとされ、太虚山光悦寺を建立そこに葬られた痕跡を刻むが、幕府へ在地返上したという事由は明らかにされていない。

さて、洛中全域を囲む壁のような土塁は秀吉の築造で「御土居」と呼ばれ、御土居の北西部の通用門に当たる地点が長坂口だから、その長坂口より北側の光悦村は治安が行き届かない洛外に位置するため、常識的には予期せぬ危険が伴う未開地を想わせる。軽佻浮薄なジャーナリズムが憶測と捏造に狂奔しても仕方あるまい。つまり、家康が光悦に与えたとする地は、光悦にとつて欲すべき地なのか、この場の歴史を改めて検証してみれば、家康と光悦は軌を一にする何事かを秘めていた可能性もあるし、それが親密もしくは敵対の関係であったのか、その解くに解けない歴史的ミステリーは昔も今も多くは仮説にさらされている。

## ● 日本文明のDNAとは

古事記は日本初の公式文書であるが、その成立以前の先史に触れておきたい。本年は皇紀二六七二年つまり西紀前六六〇年に即位の神武天皇一年に始まり、以後その皇統が絶えずに続く世界最古の万世一系で成る曆を以て数えた通算年である。語族分類説は鶺鴒吞みに出来ないが、大きく印欧（インド・ヨーロッパ）語族とウラル＝アルタイ語族に分けられ、日本語の如きは膠着語に属するという捉え方が有力視されている。膠着語とは、語の文法的機能を、語根と接辞との結合連続によって示す言語、その語尾変化は屈折語のように密接でなく語根内の変化を伴わない、と説かれる。この小賢しい辞典がいう言葉の味わいを生活様式に置き換えてみよう。

膠着＝在る状態が固定して動かないこと。

文法＝一言語の構成要素を形態と構文との見地から分析・記述する研究のこと。

機能＝相互に連関し合って全体を構成している各因子が有する固有な役割それを果たすこと。

語根＝単語の基体を成しつつ意味の上ではそれ以上は分析できない単位のこと。

接辞＝他の語に接合その語の意味または用法を加えたり変えたりするもの。

語尾＝単語の末尾でその活用などを以て変化する付属部分のこと。

屈折語＝膠着語の反対で語形の屈折（変化）で文中の諸関係を示す性質がある言語のこと。

辞典に記す語意は以上の通りで、これを日常会話のように説いてみると、膠着語とは「世の中に言語の種類は状々あるが、単語一つ一つの役割に固有の性質が与えられており、その単語自体が積極的に働くことはないけれど、単語と単語を接合させる語を用いれば、その接ぎ具合によって伝えたいことを伝え合う役目をもつ因子」といえるかも……。ただし本説は印欧語やセム語を仮に屈折語と定めた場合の一理ゆえ、この括りは日本語に不適と筆者は断じている。

日本語を文字に表わすことは、古事記の編纂前にも当然あつたろうが、それは正式に日本語と確定しないまま、現在は平仮名「あいうえお…」片仮名「アイウエオ…」ローマ字「Aa Ii Uu Ee Oo…」常用漢字「安以宇衣於…」などの文字が日常的に使われている。しかも国定教科書のように政権口約が変われば、その膏藥に沿った御用学の監修という押し付けがあり、公的メッセージを文字で伝えるような媒体になると、勝手な屁理屈で使用禁止用語を設けてみたり、文字に関する日本文明の善し悪しは尋常一様ではない歴史を刻み続けている。つまり、その自在に富んだ融通無碍が評価できる場合もあれば、その自由を損なう政治判断で歪曲される場合もあり、膠着語だ屈折語だという尺度で日本語を括るなど適さないのだ。

而して、外つ国の渡来が帰化して成る日本人にしてみれば、抑も日本語と呼べるものなど無い等しいとなるが、素もと競い争う事を嫌う縄文社会の先住にしてみれば、その生活主体を支える文明は音を用いたので文字は二の次だったのだ。日本列島の先住に限られないが、文明の先駆を光子と見立てれば、その陽と同じ分量の陰が実在しても何ら不思議はなし、その陽気と陰気との間を行き交うための位相を音階と仮定してみれば、音階を自在に飛び交い離合集散する粒子こそ音の正体と覚つても良いのではないか。文字は確かに人の叡智かも知れないが、所詮は記憶力が乏しい知の求めるところ、その成果も物証主義に利用されるだけ、生命の真価は第六感ともいう閃きにあり、その光と音で成るハーモニ一の交感こそが文明を啓くのではないか。

古事記の序で太安萬侶は稗田阿礼を「目に度れば口に誦み、耳に拂るれば心に勒す。」と聡明超級の評を与えつつも「帝皇の日継、及び先代の旧辞…未だ其の事を行はざりき。」と文書化の難儀を隠さず述べており、文末でも「然るに上古の時、言意並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於て即ち難し。」と、音こそが伝統的日本語の本領と明らかにする。



## ●古事記の神名は音字一卵性

人が群れ社会を形成し、そこに文明としての言葉が力を持ち始めると、知は仮名すなわち仮の呼び名を整えだし、その名詞が行きわたる社会を模索していった。明らかかな文字としての痕跡を刻む考古の資料に鑑みれば、早くに文字を利用した社会は、初め流通市場の広域化に伴う必然的公用語が必要となり、その文字は知力の案ずるところとなるが、文明は知と徳の合力で成る営みゆえに、何れが欠けても公用語は生まれようがない。そこで次に出現したのが、市場の原理原則という自由競争を奇貨として、公的な利権操作を司る勢力の分布が始まり、その勢力間から結果的に生じるのが戦略戦術の独占を狙う覇権の奪い合いである。つまり、已むに已まれぬ強制作用を司る機関としての政府樹立としても、問題は覇権主義を始祖とした点にあり、古事記では「然れどもくみどに興して、子水蛭子を生みたまひき。此の子は葦船に入れて流し去てつ。次に淡嶋を生みたまひき。是も子の例には入らず。」と神名でなく仮名に止めている。

水蛭子と同意の漢字は戎・夷・恵比須・恵比寿・蛭子・蝦夷などあるが、一般の訳は三歳まで足が立たない不具合とされ歪んだ形や不正常な状の形容に用いられ、福の神にあやかる願いから七福神の一とされ海洋・漁業・商業の守護神に祀られている。淡嶋は和歌山市加太神社の俗称と知られ少彦名神を祭り婦人病に靈驗あらたか冬に針供養が行なわれている。さて、文字を早くに利用した社会の呪縛は文字そのものに宿っており、それに気づく先史文明圏たとえばオリエント諸国では書記養成の機関創設を盛んとし、文明初期の文字を死語とする痕跡を刻みつつ、語音も交え文字の改革史をたどれば、覇権主義の正体が明らかになるのは疑いあるまい。それら宿痾の根源を古事記は「みとのまぐはひ」の段で解き明かすため、まず語音と文字が音字一卵性で成る証を神名にあるとし、天之御中主神を不可分一對「う」として始まるのである。

古事記上巻は書き出しで「**天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神、此の三柱の神は、並獨神成り坐して、身を隠したまひき」と**神名三柱を明らかにする。以下、**宇麻志阿斯訶備比古遲神、天之常立神、この二柱も獨神さら**に身を隠したまひき。そして前記三柱と後記二柱の合わせて五柱を別天神として記している。

古来、日本の先達は古事記解説の一つとして、現在の平仮名「あいうえお」五一音字に神名を照らし合わせる法を説いており、たとえば、音字五一番目の「ん」は他の音字が立体運動で成る周期律を持つものとし、地球儀の如き立体に見立てるなど応用法に限りはない。以下、平仮名の括弧を外すため、表記上の便宜でア行の如く片仮名に置き換えるが、別天神五柱を母音のア行に照らし合わせる場合などは、天之御中主をウ、高御産巢日をア、神産巢日をオ、宇麻志阿斯訶備比古遲をイ、天之常立をエ、に置き換えるなど種々な応用法が伝えられる。

別天神の次に成る神名は**國之常立神、次に豊雲野神**この二柱も獨神で隱身、各々が神世一代と数えられ、次に成る神名一〇柱は二柱一対の神名とされ、対で神世一代と数えるため、神世七代と記され、対で成る神名は次の通り記される。**宇比地邇神、妹須比智邇神、次に角杵神、妹活杵神、次に意富斗能地神、妹大斗乃辨神、次に淤母陀琉神、妹阿夜訶志古泥神、次に伊邪那岐神、妹伊邪那美神、の神名一〇柱が記されている。**

詳しくは別記するが、筆者の応用法としては、別天神五柱は獨神かつ隱身ゆえ、ア行とワ行の活用法に照らせば、アワと結ぶとき獨神二柱の音声はアワのまま、転じてワアと結ぶときワ音はア音の隱身で音はアのみ残される。ウ音はア行とワ行に共存する獨神かつ隱身これ五柱の安定を保つ天之御中主とし、ア音を高御産巢日また神産巢日をワ音とし、宇麻志阿斯訶備比古遲をア行オ音また天之常立をワ行ヲ音とし、國之常立をエ音また豊雲野をエ音と仮に定める。

## ●別天神と神世七代の息吹

前項ア行とワ行に筆者が定めた音字は、別天神五柱の神名をウ（共存）・ア・ワ・オ・ヲの各音階に配し、神世二代の神名をエ・エの音階に配している。つまり、別天神五柱の五音階中まだ残る音階はイとヰの段一位相だけとなるが、ア行とワ行の音字二柱中イ段の音階は、イ・カ行のキ・サ行のシ・タ行のチ・ナ行のニ・ハ行のヒ・マ行のミ・ヤ行のyi・ラ行のりそしてヰに及ぶ音字一〇位相があり、ア行とワ行との間で韻き合い飛び交い接ぎ合ったりし、その自在なる立体運動で無限の接辞を生みだしつつ、各音字に宿る周期律は決して失われることがない。

問題は前記イ段の音字を生む神名であるが、それは神名二柱一对で神世一代と数える一〇柱が対応しており、筆者は次の如く音字と神名の位相を照らし合わせている。古事記はウ・ア・ワに簡明な神名を記したあと「國稚く浮脂の如くして、くらげなすただよへる時に、葦牙の如萌え騰る物に因りて、成りませる神の名は……」と述べ、その神名を筆者はオとヲに定めている。つまり、別天神五柱中のオとヲは「天地の初発の時すなわち天地開闢を仮想する時、高天原たとえば宙を透かした時、陽光・月光・雷光で成る神名が解しても、その状は臙氣の如くして、闇下なすただよへる時にわかて天空ひらける如く明暗もたらし」成る神名と閃くほかないのである。次のエとエは別天神五柱のウ・ア・ワ・オ・ヲが出揃った後に出る神世一代の神名で獨神かつ隱身たるはア行とワ行の音階に定まる条件を満たしている。また、ア行とワ行に残る音階イとヰに相当する神名二柱一对で神世一代に定まる条件は次の如く記されている。

「是に天神もろもろの命もちて、伊邪那岐命・伊邪那美命、二柱の神に、此のただよへる國を修理り固め成せと詔りごちて、天沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。」つまり、伊邪那岐と伊邪那美の神名二柱がイとヰに定まること、その後の展開でも適性な条件は充分に満たされる。

現代科学の常識に少し触れておきたい。元素周期表の適否は別に記すが、表記中の基礎元素は水素・炭素・窒素・酸素といわれ、水素が陽光の主成分なら、炭素は有機化合物を生む主成分で広く自然界に存在し、窒素は大気圏の主成分、酸素は水の質量の九分の八また地殻の質量の大凡半分を占めて、森羅万象その恩恵あればこそ復元も認められる。つまり、別天神五柱と神世一代二柱で成る音階四位相に相当し、残る位相に相当するのがミネラルあるいはビタミンで、前者は鉱物無機物における基本元素以外の元素の総称とされ、後者は動物無機物における同総称と解され、文明の証とされる人の生命活動に不可欠の養分とされる。

「二柱の神（伊邪那岐・伊邪那美）天浮橋に立たして、其の沼矛を指し下して晝きたまへば、鹽こをろこをろに晝き鳴して、引き上げたまふ時に、其の矛の末より垂落る鹽、累積りて嶋と成る、是淤能碁呂嶋なり。」前記の通り、神世一代二柱一対で成る神名一〇柱は宇比地邇神に始まって伊邪那美神まで列記されるが、何ゆえ、神名九番目をイに、神名一〇番目を牟にしたのか、その定め方を導くのが右に示した条で古事記の本領ここに始まるともいえよう。

以下わが日本列島の呼気と吸気で成る音を筆者は靈言といい、古事記の神名で成る語根の因子五〇種を靈言五〇音字とし、その独自性は元素周期表の周期律を参考とし、靈言五〇音字が行き交う時空は特に太陽系天体を見立て説いている。現代国語の初級は平仮名あいうえお五〇音字に始まるが、靈言五〇音字は神名アオウエイをア行とし、靈言イ段の神名は前記の通りとし、イと牟の作法で成る「大八嶋成出の段」まで説けば本項の解釈も決着へ導かれる。さて高天原に成るウが陽性ア行と陰性ワ行に共存すると、葦牙の如萌え騰る物に因りてオとヲの神名が成り、この五柱を以て行五段という靈数も明らかにされ、次のエとエは四段目に、次に一対の神名一〇柱を五段目一〇行の因子に見立てれば、靈言「んうむ」の本義も明らかに定められる。

●靈言五〇音字十一の序章

項題「十一」とは靈言「ん」のことで事由は後述とする。さて、イと卍は天沼矛と言を賜ひて  
淤能碁呂嶋を生じるや「其の嶋に天降り坐して、天之御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。是  
に其の妹伊邪那美命に、汝が身は如何に成れると問曰ひたまへば、吾が身は成り成りて成り合は  
ざる處一處在りと答曰したまひき」と、初の問答「みとのまぐはひ」の段へ及んでいく。つまり  
ウから卍までの神名一七柱に諸々の命が定まることにより、イと卍の使命も定まり、淤能碁呂の  
嶋（意は締め括る）に天降り「別天神を見立て、神世七代の立体運動を見立てたまひき」ここに  
初めて命もついと卍の言あげと型示しが行なわれる。

次イが「我が身は、成り成りて成り餘れる處一處在り。故此の吾が身の成り餘れる處を、汝が  
身の成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土生み成さむと為ふは奈何とのりたまへば」卍は「然か善  
けむと答曰したまひき」この問答を如何に読解するか、稗田阿礼や太安萬侶の念い巡るところに  
達すれば、惟神が突如として人柄に劣化するなど有りえまい。即ち、初め成る獨神七柱いずれも  
身を隠したまひき、次の神一〇柱五対を含め、天神ももろの命もちてと踏まえれば、ここでは  
命の接合構造を陽と陰で成る磁性と念うのが順当ではないか。たとえば、磁場における陽と陰の  
働きは、幾ら離合集散を繰り返しても、総ての物性物質は自在に復元を可能とし、電場における  
陽と陰の働きは、中和力の存在をも知ることになった。他方、陽電子と陰電子の解明を諺つて  
核爆発に戦く現実には神ならぬ人が招来している。

再びイいわく「然らば、吾と汝と是の天之御柱を行き廻り逢ひてみとのまぐはひ為な」と詔り  
たまひき。如此云ひ期りて、「乃ち汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむ」と詔りたまひ、約  
り竟へて廻ります時に、卍が先づ「あなにやしえをとこを」と言りたまひ。後イが「あなにやし

えをとめを」と言りたまひき。各言りたまひ竟へて後に、其の妹に、女人を言先立ちて良はずと告白りたまひき。然れどもくみどに興して、子水蛭子を生みたまひき。此の子は葦船に入れて流し去てつ。次に淡嶋を生みたまひき。是も子の例には入らず。

天之御柱すなわち天神もろの命を見立て、八尋殿すなわち無限大の中に定まる型を見立てたまひき。成り合はざる陰、成り餘れる陽、陰陽その接合により、靈言を生み整えようと、イト中は「みとのまぐはひ」すなわち戸籍（基本台帳）を興すこと申し合わせる。次に「みきり」は陰で時計回り「ひたり」は陽で反時計回り、互いに廻ります時「あなにやしえをとめを」と右が先に言りたまひ、左が後に「あなにやしえをとめを」と言りたまふ、その際に女人が言先立ちて良はずと告白りたまひき。まさに太安萬侶の序「：言意並に朴にして：」と記すところ、部分を千切取る間違い厳に慎むべき心構えが示されている。

さて「是に二柱の神議云りたまひつらく、今吾が生めりし子良はず。猶天神の御所に白す宜しとのりたまひて、即ち共に参る上りて、天神の命を請ひたまひき。爾に天神の命もちて、ふとまにに卜相へて詔りたまひつらく、女を言先だちに因りて良はず。亦還り降りて改め言へとのりたまひき」即ち、神三柱が在るがまま、神二柱が成るがまま、神世七代が過ぎるまま、天神もろもろの命その意が赴くまま、対二柱に是のただよへる國を修理り固め成せという。その始まりは沼矛を使うがまま、鹽つもりて淤能基呂と言依さしたまひき、そこへ天降り初めて知力が主体の展開に具体的説明が加えられる。見立てること、互いの身なりを確かめること、互いに行なうを決したること、女人の言先立つこと良はず、然れどもくみどに興したこと、生みたまひき子ともに子の例には入らず、神議云り天神の御所に参る上りて、その命を請ひたまひき、ふとまにに卜相へて詔りたまひつらく、亦還り降りて改め言へとのりたまひき。

## ● 靈言と現代科学の位相

ここで少し筆者流の古事記応用法に触れておきたい。古事記が初めに書き出す神名を現行の平仮名あいうえお：五一音字へ置き換え、日本の「ことたま」と称えて解説に臨んだ先達は決して少なからず、その何れにも敬意の念はやまないが、敬意を表するが故に筆者の流儀を立てるのも禮の一つと心得ている。前記した通り、筆者は諸々の命もつ天神一七柱を太陽系天体説を借りて模し、その現代科学論には否諾の持論あるも、元素周期表の周期律に着目し、また宇宙の生みの親と信じる共振波論を裏付けに、靈言五一音字の本義に触れるべく精進を重ねている。

ウを太陽に見立てれば、アは太陽の黒点・ワはガス状の光線、またア行とワ行を惑星に見立て、地球型の水星・金星・火星をア行、木星型の土星・天王星・海王星をワ行へ置換したり、惑星と同じく太陽の周りを回る天体を靈言へ置き換える検証も繰り返している。準惑星五つは冥王星型四つとケレスを指し、小惑星・太陽系外縁天体・彗星は小惑星に属するとして、衛星もまた同じ天体の一つとされている。科学第一世代は、先史文明が観察した天体の伝承を参考とし、時代に見合う観察のレベルアップが成ると、天体の正体を突き止めたかの如き傲りから、「神は死んだ！ 神は棲む処もない」と云い、自ら言先立ちに因りて良はず天罰にくじけた。

観察科学で失権した勢力に代わり、覇権と握る科学第二世代は実験科学を盛んとし、洞察的な思潮を物証一辺倒に振りまげ、極大も極微も合致の場の統一を模索しはじめた。その過程で発見発明したのが放射性元素の利用であり、それは核兵器となり、平和利用と嘯く原発に使われたり、宇宙の探査エネルギーに化けたり、その正邪を問う議は神の領域に踏み込んでいた。すでに宇宙探査へ出向いた飛行物体はゴミの層をつくり、その間を摺り抜け飛び交う新発は今も増え続ける傾向にあり、言先立ちに因りて良はず人の欲求は止まるを知らない。

さて共振波論であるが、筆者は通説電磁波論に与する立場はとらない。むろんヘルツの実験は高く評価しており、その研究に同慶の念を深めるが、問題は靈言五〇音字と接触ないため、電磁力線と磁気力線で成る電磁波が剖判できず似非に毒されている。因みに、剖判とは剖れることが判ること、何事を解くにも不可欠な必須の心構えであり、古事記であれ、量子論であれ、剖判を弁えずに問答と向き合うなどは、良識を求められる立場に許されることではない。筆者が解する電磁波は電磁力線と磁気力線で成る二重螺旋構造を組成しており、機能は波が止まれば粒となり、粒が動けば波となり、その粒は立体運動で成る球体の核心へ集約されるが、その核心は電磁波が放出される場でもあるから、電磁波は永遠のリサイクル・システムを保ち続けている。

ヘルツは静電分極した陽と陰の静電気をぶつけ、その際に発生する電磁波を電子の移動と言先立ちてしまいが、電子 $\parallel$ 粒は波と共存しなくても正体は同じ、質量化 $\parallel$ 粒は「電気が流れた即ち電荷が移動した」と解すべきである。陽と陰の電子が衝突その際に発生する電磁波は光速二乗で絶え間なく押し寄せるが、例えば地球の磁気力線がNS極を直線で突き抜けず、また赤道線上を回ることもなく、N極とS極を結ぶ外周線上を通ると同様に、電子系の両力線は大多数が斜め軌道を描き通るために、波化と波長の一致も証し、陽電子と陰電子の違いはスピン軸が逆方向へ向き合うほか何も違いは生じていない。

つまり、前項イと卍の「みとのまぐはひ」を解するとき、神名二柱が見立てたもの、双方その身が如何に成れるか、成り合はざる處と成り餘れる處、卍が右・イが左、あなにやしえ：、妹が言先立ち良はず、然れどもくみどに興し、水蛭子を葦船に入れて流し去てつ、次に淡鳴を生みたまひき、子の例には入らず、以下、神議云りたまひつらく：などなど、その読み方は直訳の如き論外もあるが、その靈言の位相は「新旧共振波論」で解くほか意に通じない。



## ●太陽系天体と通説電磁波論

電波・赤外線・可視光・紫外線・エックス線・ガンマ線…、いずれも周波数の違いで呼び名が変わる電磁波の一種であるが、辞書には電場や磁場の周期的変化が互いに影響して空間を伝わる波動とも訳されている。この訳で電磁波の何が分かるというのだろうか。しかも、電場は電荷に力を及ぼし、磁場は磁石もしくは電流を自らの周りに巡らし、という矛盾を知るや知らずや教科宣揚の狂気が奔りまわる。電磁波の発見来一三〇年余が過ぎており、教えた科その重罪は見るも悲惨な現実を表面化させているが、その原因が言先立ちて良はずと気づく人はすくない。

いつのころか、文明は危険を取り除くため新たな危険を生みだし、それら不安を取り除くため新たな不安を生みだし、さらに新たな危険を覆い隠す安全神話を生みだし、そして新たな不安を覆い隠した安心神話を生みだし、いつのころか、それら文明の神話崩壊は悉く表面化を免れない現実を生みだし、それは現在も止むことなく起こるべくして起きている。こうした文明の新たな危険が猛威を振るうようになるのは、電磁波の発見に始まるが、その原因が言先立ちて良はずに在ると識らなければ、ただただ茫然自失に陥ること当然とされても仕方あるまい。

さて持論の詳細は後で明らかにするが、まず電磁波は電気力線と磁気力線との二重螺旋構造で成り、波が止まれば粒 $\parallel$ 電子 $\cdot$ 粒が動けば波となり、電気が流れた即ち電荷が移動した、これら性質を常識論はエネルギー化 $\parallel$ 電子の質量 $\times$ 光速二乗の公式で表わしている。つまりエネルギー化とは電磁波そのもの、光速二乗とは電気力線 $\times$ 磁気力線のこと、電子の質量とは異符号間に働く引力作用に生じる粒を示すものである。以下この公式が「みとのまぐはひ」すなわち何ゆえ成り合わざる $\pi$ が時計回りなのか、何ゆえ成り余れる $\gamma$ が反時計回りなのか、何ゆえ女 $\cdot$ 人が言先立ってはいけないのか…、本領きわまる古事記の真価に近づく方向へ歩を進めよう。

天の川と呼ぶ銀河系には約一千億の恒星があり、その中の一つ太陽系は銀河の中心から約二万八千光年も離れた円盤部の端のほうに位置するとされる。つまり、渦巻銀河の一つオリオン座の渦状腕に在る太陽系は、横から見ると円盤部の外縁、真上から見るととき反時計回りの渦状の中に位置する一つということになる。重力の働きで水素が集まったとされる恒星は、内部が高温かつ高圧に達したとき核融合反応を起こし、その反応に伴ってエネルギーが発生すると、光がややく電磁波を放射するとされる。太陽は強大な重力で系すべての天体を支配し、その質量に至っては系全体の九九パーセントを占めるとされ、その役割は大きく三つに分けられている。

一つは共通重心すなわち系全体の公転の中心役であり、太陽系では主に木星と土星が如何なる位置に在るかで決まり、その共通重心は太陽の表面を出たり入ったりする。つまり、質量が違う天体二種の中心点を共通重心といい、地球と月では地球の中心点から四分の三ほど月寄りを共通重心とし、二種の天体それぞれが回転しており、太陽系に属する天体か否かは、太陽の重力下に束縛されるか否かで決まるといわれる。

二つは熱エネルギー源としての役割である。核融合反応で生じるエネルギーは、太陽の表面に達するまで数十万年かかり、表面温度は約六〇〇〇℃程度とされ、その高温で光り輝く太陽との距離が系の天体それぞれの温度環境を決している。たとえば、太陽に最も近い水星の表面温度は約四〇〇℃といい、海王星付近ではマイナス二二〇℃程度といわれる。ただし、水星は自転軸が公転面に対して垂直なため、北極と南極の領域では永久に陽が差さないとあるが、そうした地形ではマイナス二〇〇℃以下の極低温を保つともされる。それは巨大氷型の天王星や海王星と同じく、氷すなわち生命環境を裏付ける水に通じた問題提起でもあり、太陽が系の天体に及ぼす温度環境は宇宙生命そのものに関わってくる。

三つはプラズマの発生源たる役割である。高温下では種々な物性物質が原子状態となり、引き剥がされた電子はイオン（筆者はイオンを神子の例には入れず）になるともいう。種々な原子とイオンは磁場を伴って太陽から流れ出ていくが、磁場の力が弱まり、ガスの密度も低い値を示す層に至ると、その流れは一段と加速を増すようになっていく。この流れは太陽風と呼ばれ、その現象オーロラは電磁的とされ、その勢力圏は恒星間空域の風すなわちプラズマ流が太陽系天体空域と鬩ぎ合う場でヘリオスフェアと呼んでいる。それはギリシア神話ヘリオス（太陽神）から引用しており、その境界は太陽活動の強弱で変動が生じるも、太陽から大凡九〇〜一五〇億キロメートル先にあるとされ、その太陽圏たる境界はヘリオスポーズとも呼ばれる。

太陽の自転は惑星の公転と同じ反時計回り、また惑星の自転も金星を除くと総てが公転と同じ反時計回りとされる。金星だけ時計回り、他は反時計回り、その事由に確たる説はなし、筆者の持論を後述する際に子細を加える。太陽については、観測と実験を頼る仮説しか方策もないため、仮定も大同小異ここでは特に必要なことだけ略記しておく。太陽は固定層がないため緯度の違分だけ回転差を生じるが、一般的には約二五・三八日で一回転とされ、その周期性も黒点観測に現われるデータに主導権が握られる。そして太陽の姿は次のように語られている。

ガスで成る太陽は光の波長で表面の高さが異なるため、可視光で見える表面は光球と呼び比較的静かな領域とするが、紫外線やエックス線では、光球を上回る高温・高度の彩層やコロナの領域も知り得るようになってきた。電波では、光球面付近の温度差またフレアなどに伴う特殊な現象の電波など、その観測はアンテナを組み合わせる干渉計で分解されている。エイチアルファ線では、水素原子が放つ光だけで撮影した太陽像として、光球の上層部すなわち厚さ約二千キロ

メートルの電気を帯びた水素ガスの層である彩層が見られ、その中の紅炎<sup>こうえん</sup>Ⅱプロミネンスなどの構造も知れてきた。紫外線では、彩層よりも上空に広がるコロナを見ており、波長が上手<sup>うま</sup>く合う際などは一〇〇万℃以上に及ぶコロナの相<sup>そう</sup>が見られ、エックス線では、紫外線で見るとより高いエネルギーを放つコロナの一部が見られ、黒い領域をコロナホールと呼び磁場の一端<sup>いったん</sup>が太陽内へ戻らずに、空間へ伸びる領域の中で電気を帯びたガスⅡプラズマを噴<sup>ふ</sup>き出<sup>だ</sup>している。

光球面あるいは上の彩層から突き出<sup>で</sup>るように現われる針状<sup>はりじょう</sup>の構造があり、その活動は大きめの粒状斑<sup>ぶち</sup>の縁<sup>ぼり</sup>から放出<sup>ほうしゅつ</sup>される高温ガスがジェットのように流れ出てくる、それは発生<sup>はっせい</sup>から消失<sup>しょうじつ</sup>まで五〜一〇分ほどの現象でスピキュールと呼ばれている。光球面や彩層さらにコロナの一部で急に輝き増すや数分で極大に達すると、以後ゆっくり輝きを失い元に戻る相をフレアというが、太陽磁場の活動に起きる一種<sup>いっしゆ</sup>の爆発<sup>ばくはつ</sup>現象といわれ、大黒点の近くで発生すれば太陽活動が盛んなどとき多く見られるという。黒点は一般的に不規則<sup>ふきそく</sup>な形とされ、中央の暗部<sup>あんぶ</sup>Ⅱ黒い部分を半暗部<sup>はんあんぶ</sup>Ⅱ淡い<sup>あわ</sup>黒の部分<sup>くろのぶぶん</sup>が取り囲<sup>かこ</sup>んでおり、強い磁場は数百〜数千ガウスの磁力をもつとされ、NとSの磁極<sup>じきよく</sup>を有する二つの黒点がペアで出現するのが普通<sup>ふつう</sup>とされる。

つまり、コロナは太陽大気<sup>たいき</sup>の最も外側に広がる高温で希薄<sup>きはく</sup>なガス、太陽活動の極大期<sup>きょくたいき</sup>には大凡<sup>えんげい</sup>円形<sup>えんけい</sup>で広がるが、極小期<sup>きょくせいき</sup>には赤道<sup>せきどう</sup>方向へ細長く伸びるといふ。プロミネンスはコロナの領域中の磁気力線に閉じ込められた水素の流れで、構造は太陽の縁に盛り上がる電気を帯びた水素ガスと見られている。粒状斑<sup>りゅうじょうはん</sup>は平均直径が約一千キロメートルとされ、数分程度の寿命<sup>じゆみやう</sup>も発生<sup>はっせい</sup>の事由<sup>じゆ</sup>が表面の激しい対流<sup>たいりゅう</sup>で生じるため、その寿命は再生<sup>さいせい</sup>リサイクルを繰り返すとされる。また時としてコロナには閉じたループ状の構造が見られる。これはNとSの磁極を結ぶ磁気力線あるところに、根元<sup>ねもと</sup>で熱せられたガスが閉じ込められた現象だともされる。

## ●太陽系原子の構造と周期律

地球のように岩石などの固定層がない太陽は、自転速度の差が極地帯と赤道地帯で最大になる違いを生じて、その差は外周から内周へと向かうほど捻れるため、磁場にも強弱が生まれ、太陽表面に強い磁場が浮き出て黒点と呼ばれている。その可視光で見える黒さとは、強い磁場の内部エネルギーの放出としても、熱の供給とは異なるため、周囲より一五〇〇℃ほど低くなって暗く映るからだという。これらの通説には釈然としない点も含まれるが、天体のイロハだから、取り敢えずは知っておく必要がある、その天体が周期律を整えていく元素についても、知らないでは済まされないため、基本的に問われる重要事項のみ書き加えておきたい。

万物は何ゆえ周期律に操られるのか。そこに露出が絞られると、神を葬ろうとして自ら滅びた科学第一世代に代わり、覇権と結んだ科学第二世代は元素周期表を組み上げている。元素は原子番号で規定され、原子番号は原子核に含まれる陽子の数で決められ、原子核は周囲が陽子と同じ数の電子で構成する雲に包まれて、陽子はプラスの電荷を、電子はマイナスの電荷を有し、その構造は球形立体の運動機能を有するとされる。ここで特に注意を要するのは、電子の雲の特異な位相であり、天体が描くような公転軌道とは異なり、電子は確率の雲と呼ばれるように、存在が認められる場所に確率の違いがあり、特定の時点や地点に存在しないばかりか、軌道を動き回る電子（粒）自体が公認された訳ではないとされる。

ではどうなっている。原子核の周囲すなわち確率の雲は三次元の形で表わされ、水素のように陽子も電子も一個しかない原子は、第一のタイプで完全に対称の球形1sと呼ぶ軌道に入り、どの方向にも同じ確率で存在するとされている。さて、以下この説明を詳述すると、本書が述べたい本領が間延びするため、詳しくは元素図鑑などの専門書に譲るとし、ここでは一般的に知られる

確率の雲の位相を説くに止めるとする。かつて確率の雲については、軌道がKからQまで七つで成るとされ、その各軌道は一つの殻で成るものから、最大は四つの殻で成るものまで、それぞれ電子二個が対称で成るs殻・同六個のp殻・同一〇個のd殻・同一四個のf殻に分類され、Kは1s、Lは2s・2p、Mは3s・3p・3d、Nは4s・4p・4d・4f、Oは5s・5p・5d・5f、Pは6s・6p・6d、Qは7sで成るとされたが、今はKとQの記号を消し1sと7pの総てを軌道としている。

つまり、最小s軌道のタイプは球形二個が完全対称で成り、次p軌道は空間的に互いが直交の三方向すなわちX軸・Y軸・Z軸に球形二個の接合体三種が完全対称で成るため電子数は六個が収容可能となり、同様にd軌道は接合体が五種で電子数一〇個の収容、同じくf軌道の接合体は七種で電子数一四個の収容が可能とされている。而して、各軌道それぞれは形もサイズも違った位相を示し、たとえば、s軌道は1sより2s・2sより3sのほうが大きくなり、それは他の軌道でも同位相を示すので、電子は軌道の大きさに見合うエネルギーを要して位置が定まり、同じ条件に置かれる電子は常に最小の軌道へ入るのが普通とされる。ところが、初期の量子力学では基本的発見として「二つの粒子が量子状態を同一に取るなど有り得ない」とするため、スピンすなわち内部構造はアップスピンとダウンスピンで成るとし、ひとつの電子軌道に電子が各一個ずつ場を占めることが出来ることじつけ、今でも重大な問題は解決されていない。

以上の仮定と仮説から、電子軌道は天体の公転と異なるとされ、確率の雲と呼ばれる所以にも通じる訳だろうが、電子エネルギーの強弱は原子核に近い軌道ほど低くなり、大きな軌道へ入る電子ほど高いエネルギーを有するとされる。このとき問われるのは、原子番号19カリウム以降の軌道であり、例えばカリウムは1s（二個）2s（二個）2p（六個）3s（二個）3p（六個）と電子が順に配置されるが、最後の一個は3dを飛ばして4sに配置されることである。

## ●原子量データと同位体の核分裂

前項の続きであるが、原子番号と混同されるのが原子量といわれる。原子一個は元素の典型的試料だから、その質量は平均値で示しており、統一原子質量単位 $u$ が公用とされ、 $u$ は原子番号6炭素の質量12( $^{12}\text{C}$ )の一二分の一と定義されている。ただし、この定義は義に外れた知の誤解により、原爆投下という現実をもたらし、その放射能被爆をみて診なかつたがため、原発に潜む危険を甘く見つもり、公金ほしさに原発稼働を請う勢力まで出現させた。本義を踏まえない因果は大雑把な捉え方に顕われている。つまり、原子核は陽子と中性子で成るため、原子量とは陽子と中性子の合計質量その平均値が $u$ ではないのか、という思い込みに相当するが、放射性元素の同位体が発見されると、その捉え方は大きな誤解にすぎないと修理される。

元素周期表へ組み込まれる原子には同位体が発見されており、原子量は整数と次の整数の間の値を示し、天然の同位体二種類以上が含まれる場合には、その同位体の平均を算定すると、小数点以下が大きくなり、大雑把な捉え方では済まなくなってくる。つまり、同位体とは、原子核に含まれる陽子の数も化学的性質も同じと見なされるが、中性子の数が違っており、その違いこそ現代ジャーナリズムの「言先立ち良はず」を生む元凶となりえる。現代ジャーナリズムすなわち政官業言が日常的に訴えるのは、放射壊変に毒された民主化の合唱であり、それは同位体の本性本質が分からないまま、言先立つ過ちに総ての凶相が顕われている。

原子番号91プロトアクチニウム(Pa)は、同85アスタチン、同87フランシウム、同89アクチニウムに次ぐ天然元素最後の発見とされ、先の三つと違うのは半減期が三万二七八八年と圧倒的な永さを保つとされる。一九一三年の発見とされる同位体 $^{234}\text{Pa}$ は半減期が超短命で一・一七分との記録があり、前記の半減期が永い同位体 $^{231}\text{Pa}$ は一九一八年にスコットランドとドイツの二カ国で

発見されたという。同位体 $^{234}\text{Pa}$ の原子核は陽子数九一個と中性子数一四三個の計二三四個で成り、同位体 $^{231}\text{Pa}$ の原子核は陽子数九一個と中性子数一四〇個の計二三一個で成るが、同位体の語源はスコットランドで発見したフレデリック・ソデイによつて成立その始まりとされる。

ソデイは同じ元素に質量が違ふ別々の原子が存在することを発見した人物ともされる。原子の化学的性質に実質的な影響は何も与えないとされる中性子だから、その数に増減があつても何ら問題は生じないと思われたが、適性な中性子の数を持たない原子核は不安定で、仕掛次第で自壊作用すなわち放射壊変に曝されることが判明したのだ。因みに陽子一個で中性子ゼロの原子核は水素のみとされる。核分裂の際に放出される莫大なエネルギーに気づいたソデイは、当初それが現代文明の未来を担うクリーン・エネルギーだと説いたが、第一次世界大戦で科学が何を行ない何をもたらしたかの現実を体験することにより、核の研究開発は結局「覇権に魅入られた狂気に利用される」と警鐘を鳴らし続けていた。

一九四五年八月六日ソデイの悪夢は現実となつた。原子番号92ウランの同位体 $^{235}\text{U}$ は、科学に後戻りを許さない覇権の手にわたり、その先導役にジャーナリズムが利用され、当時一個だけのウラン弾は日本の広島上空で炸裂させられた。天然ウランは九九・二七%が $^{238}\text{U}$ で $^{235}\text{U}$ は〇・七二%とされ、核爆弾になるのは $^{235}\text{U}$ だけ、爆弾用に三分の二を取り出すと、残りは劣化ウランで超高密度な弾丸として装甲を打ち抜くために使われている。広島に続き長崎を襲つた爆弾は原子番号94プルトニウム(Pu)型であるが、その製造法の複雑さはウランを遙かに上回り、ウランがテストもせずに投下されたのは、プルトニウムの実験成功で確信できたからだともされる。Puは核爆弾化に大掛かりな体制を要するが、Puは原子炉一基で十分な量が得られ、 $^{235}\text{U}$ は真逆だから原発推進と稀少資源の独占化は、覇権に狂う勢力なら死活に関わる問題となりえる。



## ●太陽系原子その他の基本データ

原子構造と原子量に係る重大点は前述の如しで、それは天之御柱を見立て・八尋殿を見立てる岐美二神の観察そして検証に通じるが、神ならぬ人は科学にはまり、広島と長崎で天之御柱とも見紛う火柱を見立てるや、その天空を舞う火の粉に気づかないかのように、次は八尋殿と見紛う原子炉を競うかのように築造し、どれだけ水蛭子と淡嶋を生み続けたら気が済むのか、今や国際社会は親原発派と反原発派が不毛の神学論争に燃えている。

次の基本データは元素の密度で、定義では、仮想的に考えるところの、まったく純粋な元素の完全な単結晶の理想的な単位といわれる。ところが、そんな結晶は現実には存在しないため、よく使う密度の求め方は、結晶内での原子の間隔をエックス線の結晶解析で求めた結果と原子量とを組み合わせる計算しており、単位はグラム／立方センチメートルで表わしている。

元素の密度は右の如く二つの要因で決めるため、原子の質量と、一個の原子の占有スペースが問題になってくる。各元素における原子半径の求め方は、原子核から最外周に配置の電子までの平均距離を計算しており、単位はピコメートル (Pm) Ⅱ 一兆分の一メートルで表わされる。とはいえ、電子は抑もが原子核の周囲を回る点ではないこと、前に述べた確率の雲だから原子の中で最大半径とされる原子番号55セシウム (Cs) を参考に算定した概略にすぎない。

原発事故で周知されたCsは、<sup>133</sup>Csの基底状態の二つの超微細準位の間の遷移に対応する放射の周期九一億九二六三万七七〇倍に等しい時間が一秒と公式定義される計時の基であり、それは国際協定を結んで成る世界標準時とされ、世界各地三〇〇ヶ所に配置された原子時計の同期で維持されている。現在セシウムフアウンテン原子時計が最高の精度を保つとされ、仮に七〇〇万年前の恐竜時代に存在したなら、その誤差は今も一秒未満と見積もられ、条件としては電場や

磁場さらに重力などの乱れを<sup>137</sup>Csが受けけない環境が必要とされる。<sup>133</sup>Csの発見は一八六〇年で人工放射性同位体の一つに<sup>137</sup>Csがあり、半減期は約二七年で人体に有害とされる。さて、重大なのは前記の原子時計に関する経歴で少し詳しく触れておきたい。

公式定義一秒の長さは：周期九一億九二六三万一七七〇倍に等しい時間、という規格を実際に実現した経歴をさかのぼると、大凡目安となる周波数の信号を<sup>133</sup>Csの集団へ放射し、吸収される信号の量を観察しつつ、周波数を調節して目標の数値へ近づけている。そして、その吸収された信号が最も多い時点を完璧な遷移エネルギーのレベルとし、それが周波数九・一九二六三一七七〇〇〇〇〇…ギガヘルツの値になったというわけだ。もう一つは原子時計の環境整備で前記の時計においては、レーザーを使い数百万個の孤立セシウム原子を真空チャンバー内に投げ上げて自由落下した原子で測定するため外界の影響は限りなくゼロに近くなるという。因みに、<sup>133</sup>Csは原子量一三二・九〇五四五一九u、密度一・八七九g/cm<sup>3</sup>、半径二九八Pm、電子軌道では1sから4dまでは総て充填され、次は4fを飛び越し、5sと5pに充填され、再び5dと5fを飛び越し、最外周6sへ最後の一つを充填した確率の雲を描いている。

再び基本データに戻ると、結晶は単位格子と呼ぶ基本構造の繰り返しで構成され、その元素が最も一般的な純粋結晶形態をとった際の単位格子の原子配列を示し、結晶構造図とするが、常温常圧で気体あるいは液体の元素は冷却凝固させた場合の結晶構造が描かれる。

次は発光スペクトルに触れておきたい。原子を極高温に熱すると、各元素は特有の波長を示す特有の色を発光し、異なる電子軌道間のエネルギーの差との関係を明らかにする。各軌道ごとにエネルギーは特有の差があり、その差に等しい発光エネルギーが放出され、不可視に近い赤から紫外線に近い紫までを輝線で表わし、発光スペクトル図と呼んでいる。

## ●元素周期表というカタログ

人が感得したり、知覚するなど、その根源とされる因子は元素周期表に載せられ、その基本的構造図は量子力学の普遍的法則に順い公式化されている。つまり、物証理論の雛型で覇権に狂う勢力も認めるところ、それは物証主義で成る法制度にも採り入れられるが、法理を司る肝心要の場に公が不在のため機能化にいたらない。その事由は劣化やまな学校教育にあり、高い学歴を積み積むほど脳機能を煩うがゆえ、人工放射性同位体と同じように、有害な放射線変で社会は認知症の溜まり場と化していくほかなくなる。何故こんな憎まれ事を並べるのかというと、知覚や検知を司るエネルギーが元素にあり、その周期律を表に編んだところで、物証に同調する心証が剖判できなければ、量子力学の普遍的法則違反が平然と罷り通り、私利私欲に病み公を食い物に生きる屍が増していくばかり、その閉塞を打破して正すために述べるのだ。

今や物証は天体と元素の周期律を第一義とするが、その疑義は常に付きまとい、心証の一致が成立しないと物証も物証でなくなる。つまり、物証と心証は不可分一对、その原動力を司るのは電磁波が担っており、それは引力・反引力・静電気の働きをコントロールしつつ、透過力を持つ新旧共振波の存在とも結びついている。心証という概念は前述古事記の段と序に述べられている「氣象未だ效れず、名も無く爲も無し、誰か其の形を知らむ。然して乾坤初めて分れて、參神造化の首を作し、陰陽斯に開けて、二靈群品の祖たり。」の位相にあり、物証と心証の共存性を剖判しようとするれば、もう少し元素の周期律に踏み込んでおかないと解せない。

次ページの元素周期表は基本的構造図で原子番号しか示さないが、各マスごと縦・横・斜めに括る仕切りは、基本データのカタログゆえに、現代ジャーナリズムに言依さす限り知らないでは済まされない情報として、何人たりとも確かめておく必要がある。

1																	2	
3	4											5	6	7	8	9	10	
11	12											13	14	15	16	17	18	
19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	
37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	
55	56			72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86
87	88			104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118

57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71
89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103

さて、元素の機能は二つ、一つは純粹な状態にあつて特有の性質を示すとき、もう一つは他の元素と結合その化合物として特有の性質を示すときである。例えば原子番号8酸素(O)は、無色透明の気体で人の体重の大凡五分の三を占めるとされ、そこに同6炭素(C)が適量合成すると、有機分子構造を組み上げる。また同14珪素(Si)に反応すると、地殻の構成主要成分である珪素塩鉱物を作り、同1水素(H)とで成る水は、未だ物証が確定しない科学の謎を解くキーワードとされる。

元素には固相・液相・気相と三つあり、固体が液体に変わる温度は融点といわれ、液体が気体になる温度は沸点といわれる。元素周期表は慣例的に上の図を基本的構造図とし、原子番号1(気体)は例外的とされ、別格独立のカテゴリとして扱われる場合もある。タテ3く87の列にある元素はアルカリ金属とされ、軟らかく水に反応すると、引火性が高い水素ガスを発生する。タテ4く88の列はアルカリ土類金属とされ、左一列目と類似するが、反応が遅いため前者の如き自然発火は起こらない。青い線で枠組みした21く30・39く48・72く80・104く112は遷移金属とされ、その素材史は産業史そのものといえる。

量子力学上の遷移金属とは、単体が総て金属で成るとされ、原子の電子位置で分類され、その分類系の粒子が一つの定常状態から他の定常状態へ飛び移ることをいい、有色化合物が多いなど共通した性質をもつ元素の括りとされるが、その仕切りは時代によつて変わつてゐる。全体的に固形構造で組成され、原子番号80水銀(Hg)だけ異なるも、冷却凝固の状態では水銀も同50スズ(Sn)に似た固体で性質も同じ様相を示している。また同43テクネチウム(Tc)は本ブロック中唯一の放射性元素とされる。空气中で比較的に安定を保つても同26鉄(Fe)は、酸化して錆が出る象徴的な元素であり、対照的に耐腐食性を誇るのが、同78白金(Pt)や同79金(Au)などの元素で高価なことも含め広く知られてゐる。さて、左側タテ下段二マス空白のところがあるが、そこには同57ランタノイド系ランタン(La)のヨコ列と、同89アクチノイド系アクチニウム(Ac)のヨコ列が挿入され、同72ハフニウム(Hf)と、同104ラザホージウム(Rf)とへ続くことになる。以下ランタノイド系とアクチノイド系については後述とする。

次に桃色マス同5ホウ素(B)と、同84ポロニウム(Po)の元素七種は、半金属Ⅱメタロイドと呼ばれ、金属に似て非なるところあり、たとえば、電氣を通すも伝導率が低いため、現代社会の半導体ブームを支えた材料に使われたりする。この桃色マス上段の同6炭素(C)と、同34セレン(Se)の元素六種は、非金属とされ、電氣絶縁体として知られる。また下段の同13アルミニウム(Al)と、同116ウンウンヘキシウム(Uuh)の元素一〇種は、遷移金属と少し異なる性質の区別から普通の金属と呼ばれてゐる。以上ナメ列に仕切られる元素は、タテ列に性質の共通項を配する周期表という一般則に反しており、金属と非金属などの境界線など含めると、元素分類の決定に要因複数が競合するため、そのバランスは表の下段へいくにつれ右方向へずれてゐる。

次の同9フッ素(F)タテ列六種は、ハロゲンと呼ばれ、どの元素も純粋状態では扱いにくい

特異性を有しており、反応性が高いこと、悪臭が強いいため、純粹フツ素は總体的な無差別攻撃の伝説があり、同17塩素(Cl)は第一次世界大戦の毒ガスとして知られる。ところが、他の元素と化合その有効性が認められる場合などは、日常的に多くの生活へ溶け込み親しまれている。

次に右端タテ列七種の元素は、希ガスまたは貴ガスと呼ばれ、同2ヘリウム(He)はじめ同10ネオン(Ne)などすべて、およそ他の元素との化合は有りえずともいう。つまり不活性な性質は反応性が高い元素を閉じ込めるシールドに使われており、たとえば、引火性が高く反応しやすい同11ナトリウム(Na)は、同18アルゴン(Ar)が満ちる密閉容器に保管されている。

最後は別枠の上段ランタノイド系と、下段アクチノイド系の元素で、上下段共に希土類と呼び方があり、上段は本当に別々の元素なのかという議論が続けられており、下段は全部が全部放射性元素といわれ、その所以は人工化学元素を生むシーボーグにあるとされる。アクチノイド系については前記しており、ランタノイド系について少し触れておきたい。同57ランタンの発見当初ひとつの元素と思われた鉱物が、実は複数の元素を含む混合物と分かるまで、長年を費やし数々の議論が交わされ、その伝説的エピソードは今も確定とは言い切れない。系中の主な違いは磁気があり、同60ネオジム(Nd)のように最強の磁石を生んだり、同65テルビウム(Tb)の如く大小ことなる磁場ごとに変形した合金を生んだり、希土類の希というイメージは一般的な認識と異なり、地殻中にランタンは同82鉛(Pb)の三倍もあるとされ、同58セリウム(Ce)は同系ランタンの倍近くあると見積もられ、同系の酸化物は耐熱性の高さで知られる。

天体と元素その極大と極微に触れるとき、双方その共通性は親子関係にも等しいが、鶏が先か卵が先かのように、その論争やまな人の歴史は安心いまだ定まらないまま、親は子を子は親を求めて彷徨い続けるが如き旅に勤しんでいる。もはや論争は無用なのに：

## ●電子を私生児にした科の学

電磁波の発見者ヘルツ（一八五七〜九四）は、陽と陰に静電分極した静電気をつなぎ、そこに発生した現象を電子の移動と見なした。一八九一年エレクトロン $\parallel$ 電子の呼称は、自然界に在る電荷の量は、電気素量よりも小さく分解できないとされ、電気素量に与えられており、陰極線へ名義変更されるのは六年後のこと、すでにヘルツは他界したあとだった。

他方一九世紀後半、真空放電に際し、電場や磁場の作用で曲がる性質を示しつつ、陰極を出て陽極へ向かう流れが発見された。それは負の電荷を持つ陰極線と呼ばれたが、陰極を作る物質や放電管内に在る気体の種類とも関係しないまま、単独で同じ性質を保つことも確認された。一八九七年、陰極線は量子力学的粒子性も見せる全原子共有の成分と決せられ、電子二個以上は同じ量子力学的な状態を得ることが出来ないことと定義されるや、エレクトロンの呼称は、電気素量から陰極線へ転化され、その後も今も電子は私生児の如き戸籍に操られている。

一九二三年エレクトロンの本質は波動という仮説が提唱され、一九二七年になり、原子番号28ニッケル（Ni）の結晶面で電子線の回析現象が観測され、それが実証と認められている。そして電子波については、波長（ $\lambda$ ）ラムダ $\parallel$ プランク定数（ $h$ ） $\times$ 電子の運動量（ $p$ ）という式を公認し、波を粒として数える量子性も認め、それは質量や電荷の意味を持つとされた。ところが単独で安定ゆえ崩壊しないはずの電子の消滅については、反粒子である陽電子が衝突して数個の光子へ転化するという説を信仰している。これを電子対消滅というが、電子対発生はガンマ線や強いエネルギーを持つ荷電粒子が原子核の周辺で急に曲げられ、物質への転化が進んでいく次元段階で陰電子と陽電子が作られるとする。この説は宇宙線の霧箱写真を裏付けとし、実証一例は一九三二年に公表された空孔理論が知られており、 $\beta$   $\parallel$  ベータ崩壊と呼ばれる諸粒子の崩壊に

際しても、再び電子の生成や放出があるとされる。のち電子線はβ線とも呼ばれ、時代の変革に著しい跳躍を遂げながら、その扱いは本籍不明の私生児と変わらない。因みに、エレクトロンは電子、プロトンは陽子、ニュートロンは中性子、ポジトロンは陽電子と訳しているが、陰電子をネガトロンと呼ぶ語は似合わない、ここに靈言を知らない科学の悲哀があらわに示される。

核子は陽子と中性子の総称で原子核を構成その全角運動量を核スピンという

原子核は核スピんで生じる核磁気モーメントを持つため磁性を生じる

原子核に他の粒子が衝突して起こる現象を総称して核反応という

軽い原子核が融合して新たな原子核を生む反応は核融合という

重い原子核が励起で発生し易い反応は核分裂と呼ばれている

電子は負の電荷を持ち質量は陽子や中性子の約一八〇〇分の一で二分の一スピンする

陽電子は反粒子で正の電荷を持つため負の電荷を持つ電子は陰電子ともいう

陽（正）と陰（負）は引き合う力を持っている

陽と陽・陰と陰は反発し合う力を持っている

時間的に変化しない電荷の分布すなわち静電気は陽と陰に分極し

陽と陰の静電気を繋いで電子の移動という説が生まれる

エネルギー化 $\parallel$ 電子の質量 $\times$ 光速二乗 $(E \parallel mc^2)$ の公式が生まれる

以上は通説電磁波論の理解に不可欠の条理であり、何れも粒子 $\parallel$ 物証論にすぎないが、詮議は控えないと誤解を生じるため、次の共振についても先ずは通説に触れておきたい。



## ●共振を勘違いする科の学

まず筆者が使う新旧共振波の意味を述べておきたい。筆者は銀河系の恒星も元素の成り立ちも電磁波を以て生まれ、そのエネルギーの質量化は共振を以て行きわたり、新はジャーナリズムを信仰する共振が文明を賑わし、旧はアニメイズムやシャーマニズムを信仰する共振が天下を賑わし、新は媒質や弾性体の挙動を核とし、旧は横波や縦波の挙動を核とし、その需給バランスは物質の恒久化を担う共振波に左右されると案じている。(詳細は後述で明らかにする)

さて科学が説く共振とは、例えば振子の如き振動する物体に対し、周期的な力を外から加える場合その振動数が振子の固有振動数に近いほど、外の仕事量は振子の側へ有効に吸収され、より安定度を増す振子の振動を指したりする。共鳴も同義で以下その例証を示すと、人工回路を以て生み出す共振には、コイルとコンデンサーと抵抗を繋ぐ装置があり、コイルを流れる電荷の速度変化により、コイルに生じた起電力を割る値すなわちコイル・インダクタンスのほかに、コンデンサーの容量や抵抗の値で決まる周波数の交流電圧を加えるなど、強い振動電流を放つ仕掛けを持つ共振装置が存在している。ラジオが使う同調回路も同様の性質を有し、周波数が違う電波の中から選ぶ一つを受信に利用して一般生活に融け込んでいる。

弦楽器の場合は胴と弦の共振から、良好な響きを得たとき共振と呼んでいる。さらに振動数が往復や回転で成る機械部分と取付架台の関係においては、機械の固有振動数は動力伝達装置との関係で定まるが、その固有振動数は取付架台の振動系と近似値を得たときに、それは純粹共振に近い現象が起こったと捉えられている。つまり、振動数が予め計算可能な機械の場合、その取付架台の質量を設計段階で大きくしておけば、機械の固有振動数は低くなり、機械と架台における共振を考えずに、機械全体の設置面積を大きくしたり、機械全体を地面に固定したときは、固有

振動数が高くなるというわけだ。また一八八五年ナイアガラ鉄道橋の竣工に際しては、鉄道橋の崩落防止に共振対策が施されたと伝わる。つまり、橋は二階建とされたが、歩行者専用の一階は隊列を組み歩調を合わせる歩き方に厳しい法規制が講じられ、歩行団の共振で橋が崩落する問題提起は設計段階に盛り込まれていたというのだ。

自然界には、周期不明とも周期不安定ともされる振動があり、たとえば、地震の際に緩やかな地盤は比較的長い周期の揺れが卓越したり、カルマンの渦と呼ばれる周期的剥離も振動に強く関与するため、共振は危機管理に不可欠の政策課題とされ、その対策に追われる国際政治も今や喫緊の措置に慌てふためいている。ところが、媒質や弾性体で成るジャーナリズムは、共振波の本質たる横波や縦波すなわちアニズムやシャーマニズムに疎いたため、共振そのものが何たるか第一関門の入口すら見いだせないでいる。その例証こそ歴史認識の違いに顕われており、およそ古事記に縁遠い知性が陥るところ、大半が政治的教育の生贄とされ、誰もが有する固有振動数に気づかないまま、不安定きわまる振動に揺り動かされている。

科学は地震時のS波を横波・P波を縦波とし、横波は波の振動方向と進行方向を垂直に描いて図に示し、縦波は弾性体内を占める体積の弾性が波の振動方向・進行方向ともに合致した場合に適合するという。たとえば、水面の波については、水は媒質であつて、波の進行方向を含む鉛直面内での円運動が実態ゆえに横波でなく、この場合の横波は弦やズレの剪断応力を示す弾性体の中に生ずるとされる。また縦波は物質中の水や空気が液体や気体の場合ズレる応力が示されない事由により、P波さらに音波も縦波とされている。この小賢しい理屈で何が解せるのか、いまだ朝令暮改が続く天気予報はじめ、地震も津波も予知できない科学が公金に群がり、共振また打ち消し合う電磁のエネルギーを貪る姿だけが目にあまる。

## ●水素とヘリウムを弄ぶ物証論

太陽の中心部では、陽子一個・中性子ゼロ・電子一個で成る水素の核子が、秒速数万キロにも及ぶ動きで衝突その反応を核融合といい、水素四個の原子核からヘリウム一個の原子核が生まれ、毎秒六億トンの水素がヘリウムに変換されているという。その原子量を計算すると、水素四個に對し、ヘリウム一個は約〇・七パーセントすなわち約四二〇万トン少ない勘定になるが、余った約四二〇万トンの水素質量がエネルギーとなり、太陽系の生命活動に摂取され、太陽系の営みを支える原動力になっているという。水素は単独一個では存在しないとされ、最小の単位は二個で成る水素ガスとされるが、陽子二個と電子二個はヘリウムと同数で、違いは分子と原子も一つ重大かつ重要な点は中性子そのものだろう。

太陽の中心部で水素は何を原動力に動くのか、量子力学に順えば、中性子数が適正を欠く原子構造は不安定とするため、不安定すなわち振動こそ総ての始まりとなりえる。また元素は高熱に達したとき、元素ごとに発光は特有の波長色を示し、異なる電子軌道間に働くエネルギー差と關係を持つとされる。つまり、発光スペクトルの定理として、各軌道は特有のエネルギーを有し、そのエネルギー差は放出される光が輝線となり、最外周は限りなく淡い赤で、最内周は限りなく濃い紫で、その輝度が色によつて示される。左右方向に延びる横ラインの赤道は出力が低い長波発生の場合とされ、逆に出力が高い短波は縦ラインで赤道と垂直に交叉し、球体を四つに分割して完全に對称の住み分けが成立している。

太陽神ヘリオス（ギリシャ神話）が由来というヘリウムは、属性が希ガスゆえ、他の元素との化学結合に不活性かつ相互作用もないため、化学反応に用いる伝統的な分析法では検出できずに、未知の元素として長期間その説明が出来なかつたという。生成に関しては、ウランやトリウムが

アルファ粒子を放出すなわち放射壊変の際に生じたともいうが、アルファ粒子はヘリウムを説明不能という物理学が名付け親のため、その正体など分かるはずなどあるまい。

以上を踏まえたとき、陽子と電子が一個で中性子ゼロの水素と、陽子も中性子も電子も二個で成るヘリウムは、その関係を含め元素周期表の括り方さえ怪しくなってくる。それは酸素一個と水素二個で成るといふ水が未だ解明されない現実と同じように、木を見て森を見ず・森を見ても木が見えない文明の狂気に等しく、物証主義に埋没した近現代の愚かさが浮かびあがる。古事記上巻の論すところは、その愚昧を見透かし、物証論が見過ごす迂闊に対して、観察と洞察さらに検証を通じて、読者それぞれが自問自答することに真価が潜んでいる。

太陽が陽と陰の磁場で成る黒点をペアで浮き出すように、惑星の陽と陰の磁極を結ぶ環状線が外周を巡るように、圏外の刺激と関連しつつ、適正な許容範囲内で安定を保つための振動が生命活動の源になっている。そして振動を許容範囲内に収めるのは、外周の最長距離を横断している赤道に委ねられ、赤道上は異常多発地帯とも見られるが、実質的な本領は陽と陰の乱れを一定の範囲内に封じる役割を担っている。また太陽がプラズマの発生源であるように、極大と極微には限らない共通性があるため、総ての合点を結ぶ線の一本化も不可能とは言い切れない。

太陽がコロナを形成するように、電子が軌道を飛び越え確率の雲を広げるように、電磁力圏も最大許容量と最小許容量の範囲内で圏外の進入波に應じる最外層があり、電磁力圏内の放出波が外へ向かって中心部に戻ってくるシステムを解き明かせば、現代科学の矛盾はもとより、単なる愚痴を並べ何も決着し得ない現代ジャーナリズムを正すこともできる。以下これらの指摘が大言壮語に陥らないよう、十分に留意のうえ、新旧共振波の神髄に触れたいと念ずるが、異論あれば歓迎その切磋琢磨が未来の糧になることも念じている。

## ●新旧共振波論その入門編

磁場は陽と陰の磁極を有して電流を巡らし、電場は電流すなわち電荷の移動を促し、静電気は陽と陰に分極し、その静電気を繋ぐと電荷の移動が確認された、以後それは電磁波すなわち陽と陰で成る電気力線と磁気力線の波と呼ばれるようになる。古事記の序「陰陽ここに開けて、二霊群品の祖たり」に相当するとし、電磁波に普通波と共振波があるとし、普通波と普通波は交叉の際に互いの電気力線と磁気力線が衝突し合い静電気を発生し、普通波と共振波は引き合うことで引力を生みだし、共振波と共振波は反発し合って反引力を生みだし、それらの働きから生まれた現実が太陽系の営みで生命活動だと案じるのが筆者の持論とするところである。以下その案じる核心すなわち電磁波の剖判から始めていきたい。

電磁波はDNAのような二重螺旋構造を電気力線と磁気力線で組成している

電気力線は縦波の挙動・磁気力線は横波の挙動で×状に交叉している

両力線は×状に交叉するため二分の一サイクルのズレ（スピン）を生じる

電磁波には普通波のほか中和される中性の共振波（後述）が存在している

引力と反引力と静電気を生じる電磁波は原子の確率の雲と同様の電磁力圏を形成する

電磁力圏の中心部は原子核と同じ質量化の場で放出波と進入波の溜り場になっている

二重螺旋で成る放出波は左カーブ卍型を描きつつ電磁力圏の最外周へ向かう

最外周に達した放出波は圏外の進入波も従え逆卍型を描きつつ中心部へ戻ってくる

電磁力圏は各種原子の波長および波形と同じ分量の種類と数が生まれる

即ち原子の構造もメカニズムも電磁波そのものが生み出しているのだ

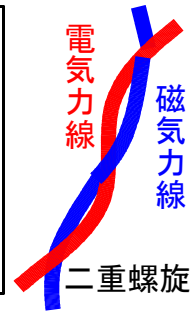


図1 電磁の普通波

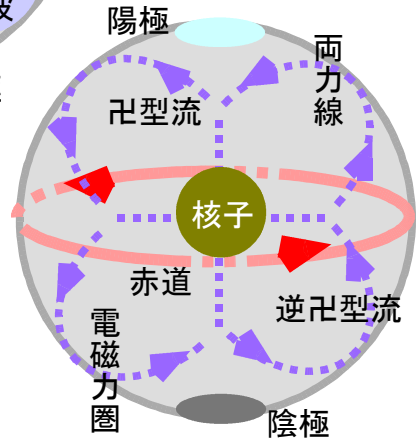


図2 普通波と共振波で作る電磁力圏

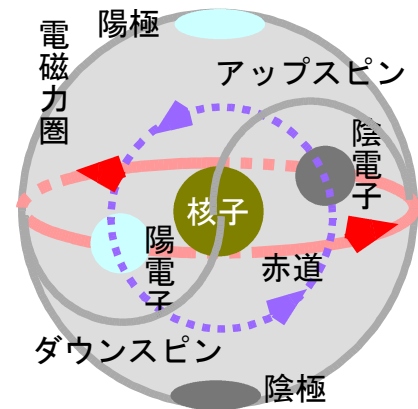


図3 両力線のスピンの及び赤道上の陽電子と陰電子

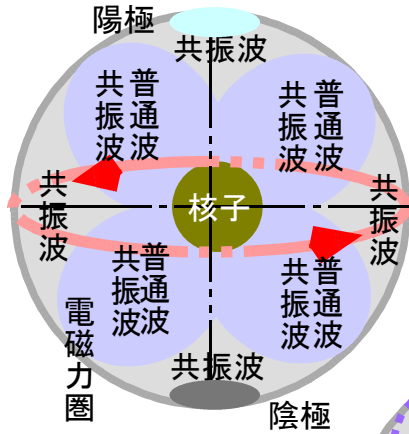


図4 普通波と共振波の分布

共振波について

陽子と中性子が主成分という原子核は、確率の雲と呼ばれる電子の最外周軌道をつくり、原子の波長と波形を定めて、その大きさを形成するが、電磁力圏も大きさは同じこと、共振波は普通波が充填できない空間を満たし、その電磁力圏が仮に変形変動しても、その体積を変えない役割を果たしている。

真空放電に際し、電場や磁場の作用で曲がる性質を示しつつ、陰極を出て陽極へ向かう流れは陰極線と名付けたが、のち電気素量の家督エレクトロンを継ぎ本籍とする。また電子対発生の際には、ガンマ線や強いエネルギーを持つ荷電粒子が原子核の周辺で急に曲げられ、物質転化が進む過程で陰電子と陽電子が作られるという。つまり、卍型と逆卍型の流れと同じである。

確率の雲を描く両力線は斜め軌道のため極の通過や赤道の周回はありえない  
波化と波長の一致を証す両力線が違うのはスピンの方向が逆になるだけ  
大きな頭が小さな尾を追い回すことを自転の角運動量といいスピンともいう  
回転に働く引力は大きな頭の中心に電荷を集め質量化して陽電子と陰電子を生じる  
縦波の電気力線は陽電子系が陰電子系方面へ・陰電子系が陽電子系方面へ向かう  
横波の磁気力線は正反対の挙動で時間的に変化しない電荷の分布も生じている  
静電気で生じる普通波は共振波と同流の反時計回りゆえ出現と同時に両力線が分離する  
分離した両力線は交叉角九〇度で発生し続ける同流の集結で完全対称の四分割を形成しつつ  
同類の電気力線は陽電子系も陰電子系も互いに反発し合い・同類の磁気力線も同じことゆえ  
両力線は先端部で分離して対角線上の電気力線と磁気力線が対で対称を成し  
分離の拡散による螺旋二組九〇度のズレだけで成る両力線は同回転かつ並行だから  
中心さえズレれば回転に伴う分離が続くため直径も波長も変わらない  
陽電子系磁気力線が陰電子系電気力線と出会う際に軌道が実質的ゼロ状態となるのは  
両力線が赤道と同じ反時計回りで磁気を浴びる粒が波となるため存在を見失うが  
エネルギー保存の法則からも消失ではなく共振中和による中性への変換であり  
中性エネルギーすなわち共振波が電磁力圏を満たすために体積は消えていない

発光スペクトルは、淡い赤から濃い紫まで色合いが多数に及ぶため、電磁力圏全体の色は白く  
暈ける、その事由としては、異流は反発・同流は同和の原理原則があげられる。そこで共振波の  
性質に照らし、発光スペクトルの原理原則に目をやれば、元素周期表の最大の謎すなわち水素と

ヘリウムいそらうの位相いそらうが明らかになり、その位相が明らかになれば、政治家ジヤーナリズムの物証論が実にインチキ極まるかも明らかになり、そこで改められる位相は本義の共振をよみがえらせる。

分子構造ぶんしこうぞうの最小単位さいししょうたんいは水素ガス、原子量げんしりょうはヘリウムの二分の一強ゆえ最も軽い気体とされるが、単独たんどくでは存在しない水素二個の接合場所せつごうばしよに確証かくしやうは得られていない。同じ気体でも、物理学は水素ガスを溺愛できあいするが、ヘリウムに関しては解明不能かいめいふのうと逃げの一手いつてを打つだけ、それを引き継ぐ化学分野は水素ガスとヘリウムの違いにつき、水素ガスは中性子ゼロ・ヘリウムは中性子二個、またヘリウムは化学結合かがくけつごうに不活性・他の元素との相互作用そうごさようはないというだけ、以下この珍妙ちんみょうな無責任むせきにん体質たいしつを打破だはしなければ、何のために本稿ほんこうを起こしているのか義を失ってしまう。

確率の雲ふせつに敷設ふせつの最小1s軌道は、収容可能な電子数を完全対称の二個だけとし、その適合性てきごうせいを有する原子は水素とヘリウムのみとされる。電子一個の水素が二個で水素ガスになり、1s軌道いそどうに収おさまれば、中性子二個で安定したヘリウムとは異なるが、図3に示すように、その接合は赤道せきどうのライン上で行なわれることになる。水素ガスは中性子を持たないがため、共振を得て強化きやうかされた固有振動こゆうしんどうに特性とくせいを有し、発光スペクトルの原理原則しんりしんげつに順したがえば、他の電磁波と接触せつしよくするとき異流は打ち消し合うが、同流は同和して、各種相当かくしゆそうとうのスペクトルを発するようになる。例えば、水素と水素の接合点に他の電磁波との同和が生じるとき、あるいは同和が接合点でない場に生じるとき、前者ぜんしやは高出力の短波たんぱを発するため、光線は紫で紫外線しがいせんにも匹敵ひつてきしようし、後者は低出力の長波ちやうぱを発するため、光線は赤で赤外線せきがいせんにも匹敵することになる。

むろん多種多様たしゆたような周波数しゆはすう（スペクトル）は短波（紫外線）から長波（赤外線）までの間かんだけに限られないが、太陽と水素の関係は、太陽系の天体を生みだし、元素周期表の原子を生み出した点と線で成るため、水素を解明かいめいし得ない現状げんじやうでは真贋しんかんこれ何も定まらない。



●前説「古事記の段」簡約に際して

序は「オミ安萬呂まをす。統の初め素々が混ざりしモノやコト既に凝るも、気かたどる位相は想定すらもなし、呼び名も無ければ、その必要も無かりしたため、誰も其の形を語らない。然して極大はじめに分かれしとき、神が参りて森羅万象・生滅変転の首を作し、陰陽ここに開けて二霊群品の祖たり。…」を始まりとする。(※筆者の解釈で簡約している)

本文は「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、」に始まるが、前説の段まで簡約を行ない取り敢えずは区切りとしたい。内容の読解は古事記編纂の時空に照らしながら、伝統的な口伝を職掌とする稗田阿礼(シャーマン)に通じたり、撰録に尽くした太安萬侶に通じなければ、簡約おそれ多いことゆえ、こんな大それたことは思いもしなかったが、今こそ「やれ！」という暗示に諍うことも出来ず起稿へ臨む仕儀とはなった。(拝)

銀河系に天の川と名付ける恒星群あり、渦巻銀河の一つオリオン座の渦状腕に在る恒星それは太陽と呼ばれ、後に太陽系と呼ばれる多数の天体を生み出すことになる。太陽は前述したとおり、大別三つの役割を果たすため、大量の水素を重力で集めたとされ、水素の核融合により、初めにヘリウムを生みだすと、あとは極大と極微に係る元素を次々に生みだし、最後は最も新種で最も多細胞な複合生命体の出現で今にいたる。人は天体ショーに特段の意趣を示し、その観察を以て生きる道しるべとし、その観察力を洞察力に発展させると、次に検証力が必要となり、伝承的な自覚が高まっていくにつれ、初めて人は畏怖を受け容れ知覚を磨くようになった。それは生命の本能的主体性だから、人命に限ればアニミズムの発心でもあり、その信仰はシャーマンの働きを以て広まるが、信仰は天体ショーに始まるため、アニミズムもシャーマニズムも天体を観察する場が違うだけのこと、神々それぞれの見立ては違っても神の御所に違いはない。

高天原それは太陽を指し、あめのみなかぬし獨神なりまして身を隠したまひき、獨神その相は水素に相当し、靈言ではア行とワ行のウに当たり、実体を見せないため身が隠るとなる。たかみむすびは黒点の陽に相当し、靈言ア行のアに、かみむすびは黒点の陰に相当し、靈言ワ行のワに当たり、序も「參神造化の首を作し、陰陽ここに開けて、二靈群品の祖たり」という。ここに成りませる參神並獨神・身を隠したまひき、次「國わかく浮脂の如くして、闇下なすただよへる時に、葦牙のごと萌え騰る物に因りて、成りませる神の名は、うましあしかびひごちとあめのとたち此の二柱も獨神にて身を隠したまひき」とあり、訳は「漆黒を彷彿うが時に、噴き出す炎の如くして、陽光もえ盛るのごと美姿日子の神はヘリウムに相当し、靈言ア行のオに当たり、天之常立は残余水素に相当し、靈言ワ行のヨに当たる。(別天神はみな太陽の主成分)

次にくにのとこたち・とよくもぬ此の二柱も獨神で身を隠したまひき、そして二神それぞれの世を一代とかぞえ靈数ここに初めて著わされる。國之常立は天之常立に應じて水素ガスに相当し、靈言ア行のエに、豊雲野は炭素・窒素・酸素の基本元素に相当し、靈言ワ行のエに当たり、以下その靈数は一〇神五対を出現させアナログとデジタルの使い分けを明らかにする。一〇神五対は各々一対を一代とかぞえ、神名うひぢにから妹いざなみまで列挙し、前記の二代と合わせて神世七代と記すだけ、次の段まで詳しい記述は何も著わされない。安萬呂の序に目を転じれば、詳述無用は歴然それがシャーマニズムの共振で當時は普通だったのではないか。古事記は自問自答に味わいが増し、その本領は克己自立への道を啓く中に顕われるため、政治家に惑わされ愚味も極まる生贄に供されるなど有りえない。靈数七代の単位は超光年だろうが、以上一七神名は総て天神、また一〇神五対は太陽系公転軌道に定まる惑星に相当し、靈言ではア行イとワ行オの段を組成しており、天神すべての事業は岐美二神に託される。(因みに一〇は一回転のこと)

## ●一〇神五対と天体の軌道

列挙される一〇神五対の神名は「うひぢに・妹すひぢに」「つぬぐひ・妹いくぐひ」「おほと  
のぢ・妹おほとへのべ」「おもだる・妹あやかしこね」「いざなぎ・妹いざなみ」とあり、それを  
順に水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星の八つに置き換えれば、岐美二神に  
託された天神の総意が単なる國の手入れでないことは明らかとなる。以下その趣意に順い八神  
四対の神名を惑星に当てはめ、同時に靈言イ段に相当の音それぞれを定めるが、惑星それぞれが  
定まる公転軌道と天体の軌道について、まずは周知される仮説を確かめておくとする。

天体をイメージするとき、天球の見かけ図を仮想し、その天球上を太陽が一年かけて一周する  
軌道を黄道といい、黄道面を斜め上から見たり、北側∥真上から垂直に見下ろしては、太陽系の  
天体軌道を図に示す方法が使われている。それによると、惑星軌道は円と近似の楕円形で描かれ、  
相互に交差なく黄道面に沿った軌道を有しており、また冥王星型など歪んだ楕円軌道を描く外縁  
天体から、衛星・小惑星・彗星・惑星間塵などの軌道は何れも重大とされる。

多数の天体は互いに引力を及ぼし合うため、現実の軌道は、必ずしも理想的な楕円や放物線で  
成るとは限らない。たとえば、木星と小惑星トロヤ群、海王星と冥王星の関係のように、天体の  
運動が惑星によって強く制限される場合などある。その究極形が衛星とされ、衛星は惑星の重力  
作用に支配され、惑星の周囲を公転し、その軌跡は実際に惑星の形状や太陽のほか他の天体にも  
影響され、多種多様に变化するデータ量は計りきれない。例えば月の軌道では、円に近い軌道が  
太陽の影響で徐々に変化しており、その事由は引力にあるが、そもそも回転の原理原則は引力に  
始まるため、太陽が地球と月を一緒に引く張つると、地球と月とが引く張り合うのを比べれば  
力は後者が勝るものの、太陽の影響も決して小さくない証になりえる。

衛星が一個（月）の惑星（地球）と異なり、複数の衛星が存在する場合、一般的には、惑星の近くを周回する衛星は、惑星の重力に強く縛られ、惑星の赤道面に近い円軌道上を惑星の自転と同じ向きで回り、密集した衛星どうし衝突がないように、一定の関係を保って公転しているのが普通と考えられている。一方、惑星からの距離が遠くなる衛星は、月のように太陽の影響を強く受けており、惑星の赤道面から大きく外れて楕円軌道を描くものもある。衛星数六二個とされる木星・同六一個とされる土星には、軌道リングの安定に貢献する衛星も存在すれば、四年ごとに軌道の交換を行なう土星系エピメテウスやヤヌスなどの変わり種もあるという。因みにトロヤ群は長編英雄叙事詩『イーリアス』の引用でトロイのこと木星の項で取り上げるつもり。

而して、軌道図は瞬間的に捉えた描き方しか示せないし、その表現を立体的に組み上げる創意工夫を凝らしても、軌道の周回が時計回り・反時計回りかを決するのは、その瞬間に限定された事象で決めるだけのことだ。それは電磁波論でも同じこと、古事記が一〇神五対を列挙したあと、八神四対の使命を示唆しないまま、突然の如く岐美二神に総てを託すこと、その後も難問難解の句を連発するのは何ゆえか、稗田阿礼が委細を省いたのか、太安萬侶が省いたかは、どうであれ、古事記の読解にシャーマニズムは不可欠となる。岐美二神は八神四対の神名に相当の全惑星が公転軌道に定まると、天神の総意で地球の修理を託される段へ進むことになるが、それは後述に送るとして、以下は古事記に載らない八神四対の動向を仮に惑星へ当てはめ、その特異的な資料抜粋に気を配りつつ、自転と公転の周期性は特に注目の対象として扱うことにする。

惑星は大きく地球型と木星型に分けられるが、水星・金星・地球・火星は岩石層を有し、巨大ガスで成る木星と土星に対し、同じ木星型の天王星と海王星は巨大な氷玉とされる。それはまた今昔かわらないまま、太陽系の生命とは何かを問う連続性に生かされる。

## ● 水星うひぎに靈言夕行のち

太陽系の第一惑星とされる水星は、全惑星中の最小で半径は地球の半分以下、重量も二〇分の一程度、大気は無に等しく、表面が無数のクレーターに覆われている。太陽との距離は、太陽と地球をひとしたとき、水星は三分の一強、自転軸は傾きゼロの反時計回り、自転と公転の周期は自転三に公転二の比率とされ、良好な調和を保つ裏付けともされる。太陽に最も近く大気が無に等しいため、まず第一の特性は温度格差にあり、陽光照射面では四〇〇℃以上に達し、その反対側の面はマイナス二〇〇℃程度に冷え込むともされる。第二は公転が高速その影響は水星全体へ及んでおり、太陽の影響力が如何に大きいかを改めて思い知らせよう。

公転周期八八日は、平均値で毎秒四七キロメートル程度に当たるとされ、それは太陽の引力に逆らう遠心力を生み出さないと、太陽に引き込まれてしまうため、太陽の引力に見合う遠心力を高速で賄うのだとされる。公転周期と大差のない自転周期五八・七日が示しており、完全同期の月と違い三対二の比率ではあるが、その特性は月と似ており、詳述は地球の段で明らかにするが潮汐力に関係してくる。水星の公転軌道は歪んだ楕円とされ、歪み具合は全惑星中で最大それは太陽と地球の距離をひと定める天文単位にすると、最短〇・三一〜最長〇・四七で確かに常軌を逸している。つまり、月は公転も自転も周期二七・三二日で円軌道を描いており、水星の自転も少し遅かったら円軌道になっていた。それは太陽の重力に関係するとされ、月は水星よりも強い影響を受けており、水星は月ほど影響されていないという。因みに、月や水星と同じく簡単かつ整数の周期比率に対しては、尽数関係もしくは共鳴と呼ぶ慣わしがあるとされる。

密度が大きいことも水星の特徴とされ、一立法センチメートル当たり、五・四グラムを越える重さは、地球の五・五グラムと変わらないため、高い比重の金属が詰まるとされ、核心の直径は

約一八〇〇キロメートルに及ぶとされる。それは地球の一〇分の一程度の固有磁場を持つことと、無関係ではないとされ、地球のようなダイナモ磁場とは異なり、冷却凝結した核に固定化された磁場という見方が有力とされる。その裏付けは地表のシワでリンクルリッジと呼ばれ、全体的に冷え込んで収縮する際にできた段差だとされる。(リッジは崖と訳される)

公転面に垂直の自転軸は、北極と南極その地形によつて、永久に陽が当たらない場が生じると考えられるし、大気も無に等しく極低温ゆえに、氷の存在を確認したくもなる。実際に探査機を飛ばし、氷の所在を探求しており、地表では発見に至らなかったが、地球からのレーダー観測で氷の反射と似たシグナルを捉えたという。長波のレーダーで地下の物質をキャッチし、そのシグナルを分析すると、その場所が極地方のクレーターに合致しており、陽光が届かないクレーター地下には氷が存在している可能性を潜ませている。小天体の衝突がクレーターをつくり、それが水を十分に蓄えた彗星であれば、氷の起源や地球の起源を知る手立てになりえる。

少し視点を変えよう。黄道すなわち天球上を一年かけ一周する太陽を水星の立場で追っていく見方であるが、水星が一回転したとき、太陽は三六〇度の三分の二二四〇度に居り、一周には天球上の残り一二〇度を動かさなければならぬ。つまり、水星は公転周期が八八日で自転周期が五八・七日だから、公転は自転の一・五倍それは太陽が水星の東に昇り、西へ沈むまでの日数に当たるため、水星は一昼夜が八八日×二二一七六日となる。これだけ一昼夜が長くなれば温度の格差も著しくなり、氷が出来たとしても驚くほどの不思議とはなるまい。

さて霊言タ行の手であるが、うはア行とワ行のウそのもの、ひはハ行のイ段、ぢ(じ)はタ行のイ段とサ行のイ段の合成音字であり、にはナ行のイ段、各行それぞれの成り立ちは岐美二神の操作ゆえ、霊言五〇音字および適合の原子番号については後述で明らかにする。

## ●金星すひぢに靈言ヤ行のyi(い)

宵の明星また明けの明星と称られ、地球に近い内側を回り、公転周期は約二二四・七日、自転周期は約二四三日で唯一つの時計回りとされる。小ぶりでも地球に近い大きさ、質量比は地球の八二パーセントぐらい、厚い大気は二酸化炭素も含んでおり、表面気圧は九〇に達し、探査機が着陸後に測った地表温度は四七〇℃を記録している。

夜空の金星はマイナス四・七等の輝度を刻む明るさで、暗さの中に影が出来るほど、美の女神ビーナスにも例えられ、明るさについては三つの理由が挙げられる。第一は地球と近距離ゆえの明るさ、約六千万キロメートル時が最も輝くとされ、最接近四千万キロメートル台の際は太陽と地球の間に割り込む内合のため、陽光で金星の輝きが見えなくなるという。第二は大きさが地球規模だから、接近距離は火星と大きく違わなくても、面積三倍で陽光を反射するため火星よりも遙かに明るくなるという。第三は大気の厚さで陽光の反射率七八パーセントは、その輝きにスペクトルの美しさが加わると見られている。つまり、地球の内側で太陽に近い水星や金星は、外を回る惑星と異なり、夕焼け宙と夜明け宙に輝くことから、刻々と変わる茜色のグラデーションに映えるため、その輝きに美しさが加わるのは当たり前なのであろう。ただし、水星を見る機会が少ない理由としては、金星の最大離角四七度に比し、水星は二八度に止まるために、夕日が沈む前に地平線の彼方に消えてしまう。因みに、最大離角とは、見かけ上の太陽から最も離れた時の角度を指し、水星は時期も含め日の出前か日没後の三時間ほどしか見られない。

金星の自転のみ右〓時計回り、他は公転も自転も総て左〓反時計回り、それは北〓上から見た時の捉え方であり、自転軸の傾きについては、黄道面に対しての角度で表わされ、水星〇、金星一七七度、地球二三度、火星二五度、木星三度、土星二七度、天王星九八度、海王星二八度との

定めがある。而して、横向き天王星は東へ右から見ての捉え方となる。さて、金星の赤道半径六〇五二kmは地球の九五%、質量も同八二%、密度も同九〇%台、太陽との距離は地球一に対し〇・七二AU（天文単位）の近似値に対して、公転周期は地球より約一四〇日も速く回るが、自転周期は地球の約一日に対し、約二四三日その遅さは公転周期と変わらない。

金星の公転と自転を周期で計ると、太陽が西から昇り、東へ沈むまで約五八・四日、一昼夜は約一一六・八日、地球と金星が接近する会合周期は約五八四日、つまり内合は昼の一〇倍だから地球へ向ける面は常に同じとなるが、金星は厚い大気に包まれるため、その地表を見ることなど出来ないし、抑も内合時は金星そのものが見えなくなる。しかし、これは月が地球の影響を受け公転と自転が同期に定まったのと同じことで、金星の自転だけ他と逆なのは、球体内部の構造や特殊な大気の相とともに、地球からの影響も考慮に加えないと解に達しようがない。

金星一周を約四日で回る大気は、高速帯状流となるが、その激烈な気象データとして、自転が秒速一・六メートル程度とされるのに、大気は高度五〇kmあたりで五〇メートル超、雲が集まる場では一〇〇メートルに達し、平均的速度差が約六〇倍という違いをみせる。この大気の流れはスーパーローテーションと呼ばれ、自転の時計回りを解明し得る関門の一つとされる。また雷の電気的事象については、木星の雷を調べるための探査機が金星の雷に遭遇し、雷に伴い発生した放電を起源とする電波を捕らえたという。一方、化学分野においては、同じ雲でも地球とは全く異なり、雲の主成分が濃硫酸しかも黄色味がかかるため、微量の硫酸を含むと考えられ、その雲を呑み込む大気は金星にしか見られないという。この硫酸雲は金星の地表を見えなくしたり、高温高圧の中で硫酸が蒸発するなど、地球が水のリサイクル・システムで成るのに比し、その異質な仕組みを知れば識るほど、求められるのは水が存在したか否かにしぼられる。



金星の地表は浸食されたり、液体が流れた痕跡など見当たらないため、硫酸雲は地表を見通す妨げになるものの、高度三〇〇七〇キロメートル範囲で気相と液相を繰り返し、液化した硫酸は高度三〇キロメートル近辺で降下を始めるが、急速に蒸発し、地表へ到達するに至らないのだと想定されている。その最大事由は表面温度四七〇℃の灼熱にあり、地球と近似しても全く異なる性質の同居で特有の温室化を維持しており、それは地球温暖化の研究にも採り入れられ、大いに参考とすべきは少なからず、そのヒントは次のような議にも活かされている。

抑も惑星の温度は、太陽エネルギーの摂取量に対し、そのエネルギーを赤外線以外へ放出する量とのバランスで決まっている。赤外線を通さない二酸化炭素は、温室効果の主役であり、最も太陽に近い水星は大気が無に等しいため、温度は金星よりも低くなり、金星は厚い大気に覆われ、反射率が高い雲を有し、太陽熱を取り込む効率は低いのに、赤外線を逃がさないから水星よりも熱くなる。もし金星や地球に大気がなかったら、二酸化炭素が全くないとしたら、金星の温度はマイナス四六℃、地球はマイナス一七℃という試算も出されている。陽光は地表の上層高度四五〇七〇キロメートル付近の厚い雲を暖め、その雲は上にも下にも赤外線を放射するが、成層圏も二酸化炭素を有するがため、密閉度が高い温室としての効果で熱を逃がさない。

金星の地形は六〇%を平原とし、二四%を複雑な起源をもつ高地とし、残りは火山と山脈から成るとし、その規模の大きさから地球の如きプレート運動は起こらないとされる。日本型火山はプレート運動で成る境界に出来るが、金星の火山はマントルに深く根を張るホットスポット型と考えられており、地球上ではハワイの火山に相当するともいわれる。而して、平原はなめらかな溶岩流に覆われつつも、際立つのがコロナと呼ばれる環状の構造にあり、それは半径が数百キロメートルに達するもので、同心円上に切り立つ崖や溝に取り囲まれながら、凹型のくぼみが

広がる雄大かつ険峻な地形の出現で知られる。その生成事由としては、マントルの対流で生じた大規模な上昇流により、盛り上がった地表の造形という考え方が支持されている。

金星はクレーターが少ないのも特徴の一つとされる。地球の場合はプレート運動で常に地表が更新されるため、通常クレーターの数で計る地形生成の年代が判明し得なくなり、金星の場合は高気圧と硫酸雲が衝突してくる天体を砕き散らし、地表到達までにクレーターを作る衝突減数の事由があつたり、大規模な火山活動で地表が埋め尽くされるなど、その仮説に信憑性はあつても真偽のほどは定まっていない。ただし、火山活動については、硫酸雲を観測し続けた紫外線分光データがあり、二酸化硫黄と硫酸微粒子が五年間で九〇%減少しており、その変化が火山活動の有無に答を出す証拠だとされている。つまり、水素と硫黄と酸素で成る濃硫酸は、白色系で強い脱水性と強酸性を有し、硫酸雲は黄色味がかかるため硫黄が多いとされ、その硫黄はカルシウムを含む金星の岩石に絶え間なく吸収されるはずゆえ、火山活動による供給がないと硫酸雲は終いに枯渇してしまうことになる。而して火山活動は起きているというわけだ。

金星の水に関しては、重水素が地球より一五〇倍ほど多くあるとされている。もし本当ならば金星にも海があり、その水は花崗岩の存在に通じるため、プレート運動があつた裏付けにもなり、花崗岩探索の国家プロジェクトが組まれるのも必然となりえる。つまり、水を含む玄武岩はマントルの地熱で溶かされ、再び固まると花崗岩になる、地球以外の火成岩は玄武岩しかない現状に鑑みれば、花崗岩発見は地球資源に代わる宝を見つけたのと同じことになる。

さて霊言ヤ行のyi(い)であるが、すはサ行のウ段でうの隠り音、ひはハ行のイ段、ぢ(じ)はタ行のイ段とサ行のイ段とで成り、にはナ行のイ段、ヤ行のyi(い)とye(え)は隠り音字でヤ行は特異性で成るため、霊言五〇音字と原子番号を説くとき一緒に明らかにする。

## ●地球つめぐび霊言力行のキ

地球上を太陽が一年かけ刻む道筋を黄道というが、それは地球からの見かけで地球の公転面は黄道面と呼んでいる。地球軸は黄道面に対し約二三度の傾きあるため、公転に連れ合うかの如く太陽の高度にも変化が生じて、それが気候によって違う季節を生む原因になっている。楕円形で成る地球の軌道は少し歪んでおり、太陽からの距離が遠いときと近いときで、約五〇〇万kmほど距離に違いが生じてくる。太陽に最も近づく一月四日ごろに対し、最も遠のくのは七月六日ごろに当たり、その違いは太陽の大きさと摂取の熱エネルギーで三%ほど差を生じるが、実際は自転軸の傾きで変わる季節の効果で軌道の歪みは軽視されている。

自転周期の約二三時間五六分の間、地球は約一度ほど公転するがため、太陽への相対的な周期分に約四分ばかり、合わせて約二四時間を一日とし、総ての暦法の単位としている。さらに約三六五・二四日の公転周期に関しては、一年三六五日と四年ごと三六六日の閏年を設ける暦法操作をしているが、それでも四〇〇年ごと三回は閏年を抜く必要に迫られるため、四〇〇で割られる四ケタ年を閏年とし、また一〇〇で割り切れる四ケタ年は閏年としない定めとし、西紀二〇〇〇年の閏年は無理を承知の例外とした。自転軸の傾き方向も少しずつ変化し、その影響力は月や太陽からもたらされ、回転中のコマ軸が傾きブレるような相を歳差運動と呼んでおり、その周期は約二万六〇〇〇年とされている。つまり見かけの天の北極は動き続けている。

地球の構造は、大気圏・水圏・岩石圏・マントル・コアⅡ核、に分類される。大気圏の厚さは一一〇〇kmを超えるが、質量の大半は地表に近い対流圏に集中するため、高度一〇〇kmを超える層になると、ロケットの軌道面に影響を及ぼすほどの質量は存在しないとされる。水圏とは海洋以外の湖沼や河川や地下水など含めて定義され、深海距離の平均値は、標高距離の平均値よりも

五倍以上とされ、海洋の質量は地球の全質量の約四四〇〇分の一とされている。岩石圏は地殻と上部マントルの二層で構成され、プレートは一〇以上に分割され、地殻は地表と海底を形成する岩石層で成るが、その厚みは大陸で平均三五km・大洋で平均五〜一〇kmとされている。上部マントル付近の地殻にモホロビッチ不連続面（モホ面）が散在し、その溶岩湖への侵入水が膨張の限界値を越えるとき、地震の誘発はプレート運動や火山活動にも影響を及ぼすとされる。大半が化合物で成り、総てが結晶を有するため、岩石圏の成分は広く鉱物と呼ばれるが、主成分の七〇％は酸素と珪素が占めており、上部マントルは全マントル層の約二四％の厚みとされ、それより深い部分は塑性下部マントルと呼ばれている。

下部マントルは、アセノスフェアⅡ岩流圏と呼ぶ部分融解層があり、厚み一〇〇kmほどの層は部分的に溶けているため、流体的な運動を引き起こし、そのプレート運動が大陸の移動を起こす原因とされる。コアは二層に分けられ、外核は液相の鉄を主成分として、内核は固相の鉄で成る高温高压で温度が六六五〇℃・平均密度が一立方センチメートルで一三グラムと推定され、地球質量の大半はマントルと核が占めるため重く高密度だとされる。

太陽からの距離一億五千万km・赤道半径六三八km・質量五九七四×一〇の二四乗kg・密度一立方センチメートル当たり五・五グラムの地球は、対流圏・成層圏・中間圏・熱圏・外気圏から成る大気に包まれ、成層圏にオゾン層が広がり、中間圏の外側は大気が非常に薄くなり、熱圏と外気圏は電離層で成るとされる。大気の主成分は窒素七八％・酸素二一％で成り、酸素は地球の生命活動で生じた特異な起源をもつとされる。一方、地球の内部熱は重力エネルギー説と異なる熱エネルギー説が有力とされ、その熱源は放射性元素の崩壊にあり、マントル対流が生みだされ、対流は岩石圏のプレートを動かし、プレートテクトニクスと呼ばれている。

地球の大きな特徴の一つは、巨大な衛星の月とペアを組むことにある。地球の四分の一が月の半径とされ、重力は六分の一とされ、大気は無に等しいが、地球と月の比率は太陽系全惑星と全衛星の中で最大とされる。また衛星は本体へ余り影響を与えないのが普通とされるが、月は全く異なり、地球の自転が総てに適合したり、自転軸が長期安定して傾いているのも、月の重力また潮汐力が大いなる影響を与え続けるからだという。

月は公転も自転も周期二七・三二日これを同期と呼んでおり、太陽と地球との位置関係の変化具合により、月に対する陽光の当たり方も変わり、月の形も満ち欠けの変化を起こすが、地球も月も同期間に太陽の周囲を約三〇度ほど公転しているため、月は朔さく朔しんげつ新月から朔まで・あるいは望ぼう望まんげつ満月から望まで、その周期は平均二九・五三〇五八九日となりえる。さらに地球からの平均距離三十八万kmぐらいとされる月の公転軌道は歪んでおり、距離では約一〇%近く変化するため太陽を月が掩蔽したかのような錯覚を地球へもたらすことになる。つまり、距離が遠い際に見る現象に金環日食・近い際に皆既日食の称号を贈るジャーナリズムの粗忽を指すが、その不適合な言先立ちこそが水蛭子や淡嶋すなわち放射壊変に悩まされる現実を生む原因になっている。その子細も重大ではあるが、ここでは地球と月の関係を優先しておきたい。

さて地球と月の共通重心は地球の中心から半径四分の三ほど月寄りにあり、月の重心も中心と異なる地球寄りにあり、共に共通重心を基点に太陽を公転するが、同期の月が地球に見せるのは常に重心側の面（仮に表面とする）だけとなる。これまで謎とされた裏面は探査機の撮影資料で具体化しつつあり、表と全く異なった性質は表裏の二分性と呼び多くの仮説を生んでいる。まず第一は地形が全く異なり、密度が濃い表面へ重心がズレるのは当然とされ、それは月が生まれる前までさかのぼり、重力および潮汐力を裏付けに次のような仮説が支持されている。

主唱はジャイアント・インパクト説と呼ばれている。それは原始地球が熱球だったころ、火星サイズの天体が斜め方向から衝突し、双方の外側マントル部分が砕け散り、その飛び散った物性物質それぞれは重力により、地球を取り巻く環を形成しつつ、放射性元素は蒸発し、比重が重い金属系は地球へ落下していったが、離合集散が続く中から月の種が生まれ、以後も繰り返される衝突と合体の中で月は現在のようになり成長したという。状況証拠は月で採取した岩石にあり、その試料分析によると、揮発性元素のナトリウムやカリウムの類が乏しいこと、密度は地球の六〇％程度そのため核は比重の大きい物量が少ないこと、それがジャイアント・インパクト説で総ては斜め衝突を幸運とし、巨大衛星に共通する起源ではないかと考えられている。

月の表面は明暗がはつきりし、海と呼ばれる暗い部分は低地でクレーターが少ないため、月の形成後一〇億年ぐらい盛んだった内部活動が溶岩噴出を起こし、以前には存在したクレータを埋め尽くしたのだろうと考えられている。一方、明るい領域は山岳地帯のように突き出た高地に限定され、海よりも古い時代の痕跡を多く刻んでおり、その大半は内部で亀裂破壊された岩石が由来を伝えるといい、それは地球のダイナミックな活動と無関係な伝承とされる。他方、裏面は海が存在せず、溶岩噴出の痕跡もなし、ただ山岳を連ねることから、密度が緩く厚い地殻が覆う二分性に関心が集まり、詳しいことは何も判明しないのが実際といわれる。

さて靈言力行のキであるが、つは夕行のウ段、ぬは十行のウ段、ぐは力行のウ段クの濁り音で詳しくは後述とし、ひは八行のイ段、つまり神名つぬぐひ音字が靈言力行のキに適合する事由も含め後述で明らかにする。また現代あいうえお各段を設ける各行については、ア行くワ行の間にカサタナハマヤラの順で行を設定しているが、これも靈言五〇音字と原子番号との関係に検証的洞察力を加えると、全く新たな発見があるため後述で明らかにしたい。

## ●火星いくぐび靈言マ行のミ

公転周期六八七日、自転周期一・〇二六日、赤道半径三三九六km、質量は地球の一〇分の一で、大気は透けるほど薄い。二酸化炭素は含んでおり、表面気圧は地球比〇・八%で変動あり、平均マイナス四〇℃が地表の温度で昼夜の差は六〇℃が記録されている。いずれも概数にすぎないが、地球人にとつての火星は昔も今も思い入れが特別とされ、そのエピソードはバカを承知の豊さと疎さが入り交じり、何かにつけ、赤さび色の岩石に覆われた星の色を気にかける。

地球は太陽に近づく近日点と遠ざかる遠日点の差が三%ほど、その差が火星では二〇・六%の大差で約四三〇〇kmの距離に値するとされる。地球と火星が接近する時期は、約五〇ヶ月ごとに訪れるが、大接近は火星の近日点方向で距離五六〇〇km程度だから、遠日点付近での接近距離は倍くらいの勘定となる。太陽に近い惑星順で火星は地球の外側に当たるため、接近時の火星を見る地球時間は深夜その輝きマイナス三等に達するとされる。火星の赤は褐鉄鉱や赤鉄鉱という鉱物に原因があり、鉄系酸化物や粘土鉱物が風化して出来た色と分かっている。望遠鏡では濃い緑色の地域を発見しており、その色は薄まったり、極端な場合は濃い部分が変形したり、様々な憶測も出回ったが、それは大規模な砂嵐に伴い現われるものと判明している。

砂嵐は赤い砂塵をまき散らし、新鮮な玄武岩台地を露出させると、この緑色の正体は玄武岩と判明することになるが、その原因は偏に望遠鏡の性能向上にあずかっている。また火星の地表に着陸した探査機の情報によると、月の如き二分性が見られ、北半球は標高が低くクレーター数も少ないが、南半球は標高が高くクレーターも多くあり、その対照的な違いは、北半球と南半球の相対的な地形について、北は新しく南は古いと仕分けできるが、二分性の原因を確定することは出来ないとし、火星探検に投入される出所不明の資金に限界は見られない。

火星の火山活動は際立っており、赤道付近には大きな溶岩台地があり、その中央には巨大なる峡谷も存在し、その東端や北側に見られる窪地一帯を探索すると、洪水で形成された地形が北方平原（北半球の低地）まで続いており、峡谷が生まれる次元に立ってみると、地質活動で地殻が引つ張られた地溝帯すなわち火山活動が偲ばれる。赤道付近の山地には、三つの火山が等間隔に並んでおり、その北西には、山頂に明瞭なカルデラを抱え、巨大な裾野を広げ、その高さたるや太陽系最大なんと二五kmを超えるケタ違いの火山が出現している、この大火山にはオリンポスの名が付され、高解像度の画面で溶岩流の地形を見ると、等間隔三つの火山が並ぶ台地には点々と在るクレターが少なく、全般的に滑らかな地形が続く地域とされている。

而して溶岩台地そのものは、大凡三五億年以上も前に形成されたが、オリンポスは僅か数千万年以前の新しい地形ではないかと思われている。水星の次に小さい火星は、地球より早く内部の冷却が始まったと考えられ、重力も小さくプレート運動がないため、内部マントル対流の上昇が起こる部分では、継続的に火山活動が繰り返され、標高の高い溶岩台地が広範囲に及んだという考え方が一般的とされている。もう一つ大きな特徴とされるのは、バレー・ネットワークおよびアウト・フローチャネルと呼ばれる地形の存在とされる。南半球の古い地域に広く分布している前者は水が細かく枝分かれして流れたような谷を指しており、火星全体が温暖な環境だった大凡四〇億年ほど前に生じたものと考えられている。また個々の谷に関しては、地下水の流出が川を作りだし、地球でも見られるように、川底が移動した痕跡や段丘地形が認められている。後者は大量の水が一挙に流れたような洪水型を指しており、大規模な地形を有し、その幅は数十から百キロメートルもあり、長さは数千キロメートルに及ぶとされる。それは溶岩台地から北半球へと続いており、水の供給源を調べると、火山活動で溶けた氷の湧出と考えられている。



新二一世紀の前後、火星に着陸した探査機の性能は一段と高まり、洪水型の地形付近で上流の岩石が流され摩耗した史料を掻き集めてみたり、直径一〇〇kmに及ぶクレーターの地に着陸した探査機は、流れ込む川の水が湖を作った物証を堆積物に見出している。また赤道地帯でも平坦な高地に降り立った探査機は、酸化鉄の一種ながら、地球では湖や温泉など液体の水がないかぎり、産出されない特異な鉱物を発見したという。さらに直径二〇メートル程度の小さなクレーターに落下した探査機に関しては、怪我の功名ともいふべき幸運が伝えられている。つまり、狭い孔を掻き分けるうち、表層を覆っていた厚い砂を払いのけ、その地下に永眠していた露岩を掘り興す大手柄を立てたのである。露岩は形も色も大きさも種々あり、水の存在を裏付ける堆積岩のほか、細長い亀裂のような無数の穴も発見しており、直径数ミリメートルの球状の石ころなど、何れも海中で結晶化して成長した傍証と捉えられるものだった。

堆積岩の中には海中の苦塩に等しい硫酸塩鉱物も混じっており、その代表的な鉱物とされる鉄ミョウバン石などは、地球だと強酸性の水中や鉄泉のような熱水環境で生成されている。こんな重大事が明らかにされているのに、現代ジャーナリズムのバカさかげんは、誰が何して何とやら何も覚らないノー天気ぶり、正常も異常も見分けられないまま、不都合な天気にも悩まされる畜生市場に振り回され、どこに消えよう流れ星の如く不様な運命に曝されている。そんな政治家や記者に荷担するより、学校教育の生贄にされるより、古事記を参考とし、自らのDNAを信じる、その道が克己自立へ続くと思えば、自分自身に備わる潜在力は自ずと湧きあがる。件の苦言は横道へ逸れた感をおぼせるが、火星すなわち生杵神Ⅱ霊言マ行のミに惹かれた古代の言い伝えを現代に置き換えれば、世界貿易センタービルが火柱と化するのも、キリスト教とイスラム教の戦が袋小路へ追いやられるのも、金融万能が放射壊変するのも総てが必然なのである。

西紀二〇〇八年の探索情報によると、地下の水を掘り起こし、それを溶かすなど、成分の解明分析を行ない、まず氷が水の固相であること、次に弱アルカリ性の土壌そして塩分の凝集さらに過塩素酸塩を含む土壌や、炭酸カルシウムの含有が判明すると、それが生物生存に関わる条件と成り得るか否かにつき現在も究明は続行中とされている。またガリーと呼ぶ新しい溝の発見から浮上したのは、地下の水が溶けて流出した地形もしくは地下ガスの放出で生じる崩落と読む問題提起で広範に伝えられた。溝は峡谷の壁面やクレーター内壁の斜面に刻まれていた。水の流出がガリーの成因ということになれば、現時点も火星は流水による地形造成中と考えられるし、その思いが的中すれば、公金へ群がる政治家は完全支配下へ追いやられるだろう。

而して異は直ちに唱えられた。火星は離心率の大きな軌道に加えて、自転軸の傾きも周期的な変化をもたらし、その影響は温度の高低差に現われ、地球の氷河期と比べようがないほど冷える想定に間違いはないという。重力が弱い火星は、大気中の二酸化炭素も地表の水も圏外へ飛散し、二酸化炭素九五%と水蒸気〇・一%以下という大気に砂嵐が加われば、舞い上がる塵は太陽熱を吸収し、上昇気流の加速とともに、その塵は黄雲を呼び起こし、全火星を覆い尽くすため、水の流出で地形の変化が起こるなど有り得ないとする。他方、弱い重力の火星に重力で捕獲されたと思われる衛星が二つ、火星の自転よりも速くに回るフォボスと、遅く回るダイモス、半径は共に約一〇kmほど、それは太陽系小天体の段で再び取り上げるようになる。

さて霊言マ行のミであるが、い(yi)はヤ行のイ段、くはカ行のウ段、ぐはカ行のウ段クの濁り音で詳しくは後述とし、ひはハ行のイ段、つまり神名いくぐひ音字が霊言マ行のミに適合する事由も含め後述で明らかにする。さて、前記の地球型惑星に適合するイ段の音字としては、仮にタ行、ヤ行、カ行、マ行の順としているが、それら事由も後述で明らかにする。

## ●木星おほとのが靈言サ行のシ

全惑星中で最大とされ、直径一四万三〇〇〇kmは地球の約一・二倍、質量は同三一八倍にも達するが、密度は一立方センチメートル当たり約一・三グラムのスカスカとされる。その理由は水素とヘリウムが主成分のためで、太陽との比較においては、大きさ約一〇分の一質量一〇〇〇分の一程度とされ、質量が一〇分の一未満だったら恒星になれたという珍説が知られる。木星型惑星は一般的に大気圧一パール $\parallel$ 〇・九八六九二三気圧の場を表面と定めており、その近傍にはヘリウムやアンモニアで成る雲が見られ、可視光の場合は、目標の形を肉眼で確かめられる最大深度に大凡一致した相とされる。木星の表層は、およそ水素八九%・ヘリウム一%で成るとの見方もあり、厚さ約一〇〇〇kmの大気層があるとされている。

少し脇道へ逸れ、木星もしかしたら恒星になれたかも論に触れておきたい。それは木星の内部構造モデルとも呼ばれるが、大気層は水素とヘリウムで成り、その内側は液体分子水素で成ると云い、更なる内側は液体金属水素で成ると云い、コア $\parallel$ 核は氷と岩石と鉄で成ると云い、まずは大気層から二万km程の範囲に液体分子水素の層があるとし、水素原子は数十万気圧に押し潰され、間隔を狭められ、それは液体へ転じて温度は数千 $^{\circ}$ Cへ達するという。また更なる内部は三〇〇万気圧を超える圧縮の層とされ、水素の原子間距離が縮められた結果として、各電子が特定の核を離れ自由電子へ変身することになり、その状態を液体金属水素と呼ぶことにし、圧力四〇〇〇万気圧レベル・温度は大凡一 $^{\circ}$ Cへ達するという。そして中心部のコアは外核と内核の二層があり、外核は水とメタンとアンモニアの水が多く含まれて、内核は岩石や鉄で成り、質量は地球の一〇倍以下で大きさは二倍ほど、核内部は圧力が約五〇〇〇万気圧・温度は約二 $^{\circ}$ Cどまりゆえ、核融合の条件 $\parallel$ 温度一〇〇〇 $^{\circ}$ C以上を満たせず恒星に成り損ねたと説かれる。

次は太陽系誕生のそもそも論にも触れておきたい。まず星間分子雲と呼ぶ領域があり、そこはガス状の水素やヘリウムはじめ、固体微粒子の塵が集まる場とされ、その中でも特に密度が濃い場は分子雲核と呼ばれる。その密度と質量が高まるにつれ、核の収縮が始まり、原始太陽と呼ぶ種が生まれ、その成長に伴い核内の高温高圧は外へ外へと広がっていき、その分身のガスや塵も円盤体を形成していき、それは原始惑星系円盤と呼ばれる。円盤内にある塵は、原始太陽の引力と回転で起きる遠心力の合力に巻き込まれ、その合力が向かう円盤面の中心へ一緒になつて集まってい。その塵は中心面で衝突と合体を繰り返し、直径数キロメートル程に達した形態を微惑星と呼んでいる。そして微惑星の間には引力や周辺ガスの抵抗力が働くため、軌道の乱れに起きる衝突や合体が再び繰り返され、地球型惑星の軌道レベルでは、鉱物系を多く含んだ密度が濃い原始惑星が形成され、その反動で周辺ガスを寄せ付けなくなつたとする。

他方、原始太陽が放つエネルギーで高熱だつた円盤も、太陽から遠ざかるにつれ、表面温度は極低温に冷やされていき、木星型惑星の軌道レベルに達すると、水やメタンやアンモニアなどの揮発性成分が固体化されて巨大となり、その巨大な引力で周辺ガスを大量に引きつけ、地球型と全く異なる原始惑星に成長し、太陽系天体は現在のようになったのだという。これら仮説は政官業言が認めるところ、太陽系形成の標準モデルとされ、太陽系形成論とか惑星系形成論とか呼ぶ研究分野の常識とされている。然るに異論は詮ない仕儀になるだけだ。

結果的に、太陽系形成論も惑星系形成論も自ら撚り出した常識に打ちのめされる。その現実はいがいがわくせい系外惑星Ⅱホットジュピターの観測に顕われ、ホットは文字通り熱いこと、ジュピターは木星の別称だから、前記形成論では、太陽系以外の惑星で木星と同じような天体が、自分の恒星に近い軌道を回るため太陽の如く熱くなる、と解釈されるが、そんな理屈は現実の前に木っ端みじんと

打ち砕かれてしまった。つまり、系外惑星の移動の大きさや相が解明されると、木星との違いは軌道半径や表面温度に限られないと判明してしまう。全惑星中四番目に大きいという木星軌道の離心率は $0.0485$ 、系外惑星は離心率ゼロに近いものから、彗星の如きものになると $0.8$ 、 $0.9$ に達し、質量こそはジュピターに相応しいが、軌道半径だと木星の $5.2$  AUよりも一桁以上も小さかったり、木星の表面温度マイナス $150^{\circ}\text{C}$ に比べ、非常に高い温度を維持したまま実在していることが認められている。この現実には前記形成論の万般へ波及するため、発見された系外惑星が観測条件の制約から偏っているとか、または太陽系惑星が特別かも知れないと、常に枝葉末節を好む物証論は言先立ち良はず、土台の抑も論など語る資質も備わらない。

本題へ移ろう。公転周期一一・八六二二年、自転周期 $0.414$ 日（九時間五六分）、衛星の数は二〇〇六年時点で六二個といわれる。木星表面の特徴としては、東西方向へ延びる縞模様や大きな渦巻状の模様が知られ、縞模様はアンモニアや硫化水素アンモニアウムの反射率で変わるが、反射率が高い部分は白色の帯となり、低い部分は赤茶色の縞となり、南半球に認められる大きな渦巻状は大赤斑と呼ばれている。両極から観ると、高気圧は白色の帯また低気圧は赤茶色の縞で模様をつくり、同心円状に並ぶような格好を見せている。赤道部は毎秒 $100$ メートルに達する高速の西風が吹いており、極側では東風となり、その強風が時々刻々と移り変わる表面の模様を生みだしている。大赤斑は白色の帯の中に出る高気圧性の渦を指し、毎秒 $100$ メートルに及ぶ強風と共に反時計回りで回転するが、小さな渦も多くあり、東向きと西向きの気流が接する帯と縞の境では擾乱が生じるため、その場に出る表情は様々に移り変わってゆく。大気も激しく動き続けており、上層の厚い雲は白く映え、上層の薄い雲は青く、低層の厚い雲は赤茶に映え、渦は白色楕円形や干渉し合うもの、斑点も明暗あつて擾乱も頻繁に起きるとされる。

さて衛星については、別格四つの衛星に発見者ガリレオ衛星の別称も付され、木星の赤道面と平行に近い軌道面を持つもの、離心率が小さいものは規則衛星、それ以外は不規則衛星と呼ばれ仕分けされる。ガリレオ・ガリレイの個人情報には他に委ねて省くとしたい。別格四つは公式名で大きい順にガニメデ・カリスト・イオ・エウロパとされ、木星に最も近いイオは大きさも密度も月の値と大して違わないが、過去一〇億年以上も前に火山活動を終えた月に対し、イオは未だに激しい火山活動を繰り返し返しており、その伸縮は潮汐力の働きで内部が高温のためという説が支持多数を得ている。イオの次に近い軌道を回るエウロパは、月よりも直径が約二一%小さいとされ、氷に覆われた表面にクレーターはなく、氷層の厚みは一〇〇kmに及ぶとされ、無数の筋状の模様は幅が数km〜数十kmほど、長さが数千kmにも及ぶとされ、核との中間層に水の液相があるという説も伝わっている。最大ガニメデは惑星の水星より大きい衛星であるが、質量は半分ほど密度の薄さから、氷層の内部も氷のマントルで成り、核も珪酸塩が主成分ではないかと思われる。また四番目カリストは大きさが水星レベルと見られるが、質量は三分の一ほど、表面が氷層とされる場に密接して並ぶクレーターが認められ、八つのチェンクレーターと呼ばれている。

衛星とは一線を画すものとして、木星と同じ軌道半径を有し、経度方向で木星の六〇度前方と六〇度後方の位置に、トロヤ群と呼ばれる多数の小惑星が発見されている。ギリシア神話『トリア戦争』からの引用とされ、古代ギリシア側に見立てた六〇度前方の小惑星に対し、もう一つ六〇度後方に位置する小惑星はトロイ（トロヤ）側とされ、その数は確定番号を付すものだけで前方六九五個・後方六六八個もあるという。次は少し小賢しい説になるが、西紀前のシャーマン史家ホメロスの叙事詩に鑑みれば、小惑星と彗星の軌道に係る問題提起も重要であり、この木星項に見合うことから、新たに次の説と真面目に向き合い書き加えておきたい。

天体の中心に天体全部の質量を集めたと仮定し、それ以外の属性は一切なし、ただ質量だけの点これを質点とみなし、力学上の質点における二つの天体について、万有引力下で起こる運動を問う際それを二体問題と呼んでいる。二体問題の解は厳密かつ完全に得られる。たとえば、仮に定めた時刻における位置と速度の値は正確な解とされる。しかし、天体一つを増やし、その質量ゼロと仮定し、天体二つの重力下で増やした天体が運動する解を求めると、その解を得ることは不可能になつてしまふ。つまり、天体を三つにした三体問題の解が得られないため、質量ゼロと簡略化した制限三体問題へ設定を変えてみたが、二体問題で得られた解が再び得られない難所へ迷い込んでしまった。それは円制限三体問題を設けても、楕円制限三体問題を設けても、彷徨う迷路の脱出は諦めるほかなくなつた。ここに発想の転換を試みられる。

まず天体三つへ特別な初期値を与えると、解が二つ得られ平衡解と呼ぶことになつた。一つは天体三つの初期位置を正三角形の頂点へ設けた場合で正三角形解の呼び名が決まり、もう一つの設定は初期位置を一直線上に置く場合で直線解と呼ばれることになる。久しくも平衡解は単なる数学的な産物と思われてきたが、太陽系から正三角形解に位置した天体が発見された。その初期位置に陣を敷く天体こそが小惑星トロヤ群というわけだ。

太陽・木星・小惑星の天体三つの初期位置が正三角形の頂点にあつて、質量が巨大なる太陽と木星の天体二つが円運動を行なつている。円制限三体問題へこじつけ考えると、太陽や木星より遙かに小さい小惑星トロヤ群は仮に質量ゼロへ置き換えられ、木星と同じ軌道を持ち木星の前方六〇度と後方六〇度の位置に当たると正三角形とも符合するというわけだ。神話トロイ戦争の英雄アキレスの名が付される小惑星が発見されたのは一九〇六年のこと、それ以降の問題提起に急浮上してくる彗星軌道の二次曲線にも平衡解は重宝されている。

太陽を焦点に描く二次曲線は、水星を除く惑星七つと準惑星ケレスの離心率が小さく、円また円に近い楕円軌道を有し、水星と準惑星の冥王星は離心率が大きいため、少し潰れて歪んだ楕円軌道をしている。母惑星を焦点に楕円軌道を描く衛星は、木星系ガリレオや海王星系トリトンの離心率○ないし極小から、海王星系ネレイドの○・七五まで差違は特段に大きくなる。太陽系で最もバラエティーに富む軌道を描くのは彗星とされている。木星と土星の間で○・○四五と円に近い離心率で公転するもの、ハレー彗星の離心率○・九六七に至っては、近日点距離にしたとき水星と金星の間に位置しながら、遠日点距離では海王星と冥王星の間にまで及ぶ途方もない公転軌道を描いている。彗星の公転周期は長短その差が著しいことから、短周期彗星と、長周期彗星に大別され、短周期登録数は既に四〇〇を越えるとされる。

長周期彗星の中には、離心率一と限りなく近い楕円軌道のものがあり、それらは仮定の放物線軌道で考えられることが多いという。天文家オールトは、長周期一九個の軌道分布を調べ、その軌道半径が数万天文単位に集中することから、太陽から数万AU相当に「彗星の巣」が存在すると見立てたという。彗星の巣は後にオールトの雲と呼ばれるが、長周期彗星は太陽系の近辺を通り過ぎる恒星があるとき摂動（引力の影響）や非重力効果（核放出のジェット効果）により、また太陽系の軌道を横切る際の摂動や非重力効果により、太陽系の内側まで送り込まれるとの論考を発表している。どうあれ、現行解釈だと、短周期彗星の起源としては、惑星軌道の外側に広がる軌道傾斜角の小さな外縁天体という結論があり、長周期彗星の起源としては、太陽系を球殻状に包む半径数万AUのオールトの雲が結論だとされている。また彗星は核が分裂すること、核の分裂後は一列に並ぶこと、それは木星の巨大な潮汐力に支配されながら、衛星カリストに八個と衛星ガニメデに四個の痕跡を遺したチエーンクレーターが証明するところとなる。



★閑話休題（それはさておき）

二〇〇六年、国際天文学連合（IAU）は太陽系の構成メンバーとして、恒星一個（太陽）と惑星八個（今後増減の可能性は低い）、準惑星五個（今後増減の可能性が有り）、衛星一七〇個超のほかに、小惑星、太陽系外縁天体、彗星など、無限の太陽系小天体を分類のうえ、全体的な定義を設ける段に達したことを明らかにした。準惑星とは、ケレス（セレス）、冥王星、エリス、マケマケ、ハウメアを指し、ケレスは火星と木星の間に位置するが、他の四つは総て太陽系外縁部で今後増える可能性ありとされる。天王星は一七八一年の発見とされ、海王星は一八四六年に計算で見つけられ、冥王星は一九三〇年に写真で見つけたという。二〇〇六年までの冥王星は惑星と扱われ、準惑星はケレスとエリスだけ、冥王星が準惑星へ格下げされ、マケマケが準惑星入りするのは二〇〇八年七月、同年九月にはハウメアも加えられた。一八〇一年の発見とされるケレスは、初め第五惑星とされたが、のち小惑星一番という戸籍に編入され、今回IAUの公証制度の施行により、公式で正当な本籍は準惑星と決せられた。

また小惑星登録制度については、大きく三つの本籍が設けられ、第一は地球近傍小惑星と呼ぶ編成区域が定められ、第二は火星と木星の間を小惑星帯とし、第三は小惑星帯と外縁天体の間をケンタウルス族と呼ぶようにされた。つまり、軌道タイプ別の割当だから、太陽および各惑星の重力に主体性が置かれ、細分化も当然その影響力に左右されるが、陽光反射で色の違いを見せる小惑星をスペクトルで仕分けし、S型とかC型とか呼ぶ分光形式の基本台帳もつくられ、発見が現在進行形の小惑星は一〇〇万を越え、登録数も四〇万は越えたとされている。さて問題は公証制度に見え隠れして、例えば地球のコンパニオンと呼ばれる小惑星に潜む凶相に鑑みると、常に国際社会を揺るがす移民政策と同じ発ガン性が透けてくる。（詳述ここでは省く）

以下ケレスと小惑星ベスタと同イトカワに係る仮説を検証しておきたい。赤道が少し膨らんだ球形ケレスの直径は約九七五kmとされ、ベスタは約五三〇kmとされ、探査機はやぶさ号で脚光を浴びるジャガイモ型イトカワは最大の直径部でも約〇・五kmにしか達しない。つまり、ベスタはイトカワの一〇〇〇倍以上の直径でありながら、両者とも小惑星という括られ方に甘んじるのが実際であり、その比率を他に照らすと、木星は地球の約一倍、太陽は地球の約一〇九倍、全く比較にならない桁違いであるが、天体調査のバカ騒ぎはイトカワが圧倒している。

まずケレスは小惑星帯総質量の占有率が四分の一とされ、自転速度に合わせた全周観測と分光観測による表面物質の推定が精力的に行なわれ、地殻はレゴリスと呼ばれる細かい砂に覆われた薄い層状構造で成り、内部に厚さ六〇〜一二〇kmの水氷マンテル層があり、核は岩石質で成ると說かれている。ベスタは地球型惑星や月と同様に、成長過程で一旦は高温どろどろに溶けた分化天体と考えられている。分化天体とは、自ら持つ重力で球形に成長できる固体を指し、ベスタも同じ成長過程を踏まえていたが、大凡一億年を経たころ、急激な冷え込みに襲われ成長に要する条件を封じられ、以後それ以上の大きさになれないまま今に至っている。つまり、ベスタは同じ小惑星でも地球型惑星として生まれ、水蛭子や淡嶋の如く子の例には入らず運命のまま、現在に至ると考えられており、それが本当だとするなら、古事記の発祥地が為すべきことは明々白々の理に立つべきだ。さてイトカワであるが、表面八〇%は大きな岩に覆われており、その間に数cmレベルの砂利が敷き詰められ、平坦な領域が混在し、大凡レゴリスは見られないという。クレーターは少なく、衝突型クレーターに比べると、非常に浅く円形でないものが多く、重力の方向へ沿って地滑りや土砂崩れの跡のような地形が幾つも見られている。母天体の破片が重力で再び寄せ集まった始原天体であれば、ベスタとの探索ランデブーは必然をまぬがれまい。

少し外縁天体についても触れておきたい。一般的に外縁天体は氷と岩石で出来た天体といわれ、発見された数は一二〇〇個を越えたとされている。それは発見するにしても、直径が数十km超のレベルに達しないと、検出も難しいために、準惑星レベルの直径一〇〇〇km〜二〇〇〇km超など除けば、他の天体は全般的に数百kmレベルまでとされる。

冥王星（直径二三二二km）が発見されてから、太陽系外縁へ向ける関心が高まり、写真乾板と電荷結合素子（CCD）の技術革新が急速に進められた。CCDは今デジタルカメラなどの端末機器に利用されているが、望遠鏡に取り付けられた高感度CCDカメラは、縦四〇〇〇画素・横二〇〇〇画素を一〇枚ならべた八千万画素のモザイクを使っており、次世代型としてはCCDを一一六枚も並べる計画が実行されている。むしろ探査機も打ち上げられている。太陽系形成論は原始太陽系円盤の中で微惑星が生まれたといい、それが衝突と合体を繰り返したのちに、太陽系惑星が出来たとするのだから、成長が遅くなる外縁部で大きくなれなかった微惑星は外縁天体の起源となりえよう。ということであれば、その外縁たる延長を追い続けるとき、太陽から数百AUレベルまたは無限の果てに微惑星が存在してもよし、実際に系外惑星の発見も間違いなし、でも外縁天体と認められたものは、黄道面へ投影すると分布が五〇AUで途絶えてしまう。現行CCDカメラ付き望遠鏡は、直径数百kmの天体なら一〇〇AUの彼方も発見可能となり、離心率が大きい天体を除くと、外縁天体は五〇AUよりも近い場で発見され、現在は五〇天文単位問題と呼ばれて以遠に外縁天体は存在しないとされている。

外縁天体を三つのグループに分ける通説に従うと、第一は古典的天体と呼ばれ、移動半径四二AU〜四八AUの範囲に存在し、近日点距離は三五AUよりも大きく離心率が小さいものとする。また古典的天体は軌道傾斜角の大きさを二種類に分類され、角度が小さく力学的に冷たい種は天体の

サイズも小さく表面が赤色とされ、角度が大きく力学的に熱い種は大きいサイズで赤から灰まで表面の色は種々とされる。第二は散乱天体と呼ばれ、離心率が大きく軌道が細長い楕円形をした天体が見つかり、過去には離心率の小さな軌道を描いたが、天体どうしの接近や海王星との共鳴関係で軌道が大きく散乱させられたという。第三は共鳴天体と呼ばれ、海王星と平均運動共鳴の関係にある天体を指し、冥王星も海王星と二対三の平均運動共鳴しているため、海王星との接近回避を可能にしているのだと考えられている。

以上、小惑星も外縁天体も公転する点では共通しているが、軌道長半径は大きく異なり、最大多数の小惑星帯は火星と木星の間にあり、その軌道長半径は二〜三AUとされ、外縁天体になると分布は約三〇AUの海王星の軌道外縁から約五〇AUまで続くとされる。

最後に再び火星と衛星について触れておきたい。地球と月の距離よりも近い距離で成る火星と衛星との関係は、フォボスとダイモスの未来を正反対の方向へ導こうとしている。火星との潮汐作用でフォボスは火星へ接近しており、そのまま火星へ落下してしまうか、潮汐力で破壊される運命に終わるか、一方のダイモスは火星から離れつつあり、いずれ火星の重力圏を脱け出るとの想定が現在進行形にあるからだ。熱球だった頃の火星は地球と同じ固有磁場を有したが、現在は南半球の経度一八〇度付近に残留磁場を見るだけ、向きが南北方向で交互に反転さらに縞の如く見える大規模な構造は、地球の大西洋中央海嶺などのマントル層のマグマが造成するプレートに相当しているため、プレートテクトニクスに係る重大な史料となりえる。

さて木星おほとど霊言サ行のシであるが、おはア行の才段、ほは八行の才段、とは夕行の才段、のはナ行の才段、ぢ（じ）は夕行のイ段チの濁り音（サ行のイ段シの濁り音）、つまり神名おほとど音字が霊言シまた適合の原子番号が何かも後述で明らかにする。

## ●土星をほとんどの霊言ラ行のり

木星に次ぐ大きさの土星データは、公転周期二九・四五七八年、自転周期〇・四四四日（一〇時間三九分）、太陽からの距離九・五五四九AU、赤道半径六万二六八km、質量は地球の九五・一六倍、衛星数六一個、実視等級マイナス〇・五とされる。木星との距離四・三五二三AUは木星が太陽からの距離五・二〇二六AUにあり、また火星との距離三・六七八九AUにあり、衛星数も近似六二個という数値にあることから、筆者に閃く問題提起は靈数の妙といふことにつきる。直径は地球の九・四倍、密度は一立方センチメートル当たり〇・六九グラム、密度に限れば水に浮かぶ数値しか表われないが、成分は水素九六%とヘリウム四%で木星と変わらない。

大気層は木星よりも薄いとされ、その下は水素が押し潰され、液体分子水素という何とも解し難い層が三万kmほど続き、更なる内部は三〇〇万気圧以上の圧力となり、ヘリウムが混じる液体金属水素で温度は一万℃まで上昇し、中心部は地球の一〇〇倍ほどの岩石や鉄・水・アンモニアの氷・メタンで成る固体の核すなわち木星と何ら変わらず、温度は一万℃・気圧は二〇〇〇万に達するとされる。直径は木星が約一四万km・土星が約一二万kmで大差はないが、質量を地球比で計ると木星が約三一八倍・土星が約九五倍と圧倒的な差が表われる。液体金属水素も何とも解り難いが、筆者は抑もイオンや自由電子と呼ぶ苦し紛れの詐称因子を認めないし、木星の液体分子水素は約二万kmほどまで、土星は約三万kmほどまで続くとするなどは、如何にも政官業言が好む「グレー」としか解しようがない。（詳述は共振波論で説く）

同じ木星型とされ、土星の外側を回る天王星と海王星も成分は同じとされるが、構造が異なる作りゆえ氷玉になったと説かれる。つまり天王星の質量は地球の約一五倍・海王星は約一七倍と小さいため、液体分子水素は出来ても液体金属水素が作れないまま、円盤内のガスによる原始の

惑星造形が早くに終わってしまつたというわけだ。どうあれ、太陽系形成論は天体説の支柱たる地位を堅持しているが、その遠因は惑星の名称由来にも結びついており、甲骨文とかキリスト教イエズス会の靈操に憑依され、知的な呪縛を脱せられない政治的コントロール下の化石が未だに息づいてる。辰星 $\parallel$ 水星・太白 $\parallel$ 金星・ケイ惑 $\parallel$ 火星・歳星 $\parallel$ 木星・鎮星 $\parallel$ 土星とか、支那流の黄道一二等分 $\parallel$ 一二司が西洋流の黄道一二宮に相当したり、木星の公転周期が約一二年を要する事由から歳星と呼ばれ、土星は遙か遠方で動きが遅く見えることから鎮星と呼ばれるなど、文献資料の時代考証も怪しいまま、現代ジャーナリズムの認知症は限度を失っている。

さて、土星の美しリングに触れたい。リングは土星に近いほうから、DCBA・FGEと呼ぶ順で七つが並ぶとされる。ABCは比較的に明るく、Eは土星半径の約三倍 $\parallel$ 約一八万kmの場 $\hookrightarrow$ 約八倍 $\parallel$ 約四八万kmの場に及ぶ幅の広い外縁リングとされるが、厚みは数十m $\hookrightarrow$ 数百mしかない層を形成しているという。つまり、リングの広がりには、濃さも薄さも一様にあらず、黒く見える空隙など、粒子の構成で変わるスペクトルは単純に仕分けられない。たとえば、Aリング内側の黒い部分は軌道研究家エンケのギャップ、AリングとBリングの間は天文家カッシーニの空隙と呼ばれ、粒子が少ないために暗く見えるのが原因とされている。画像で見ると、5cmより僅かに大きな粒子が集まるリングの帯は紫色に、5cm程度の粒子が集まるリングの帯は緑色に、 $\sim$ 1cmレベルが集まるリングの帯は青色に見えたりする。また粒子の密度が濃くなると、広い幅を持つ白色の帯にリングは染められるが、粒子の大きさを特定するには、探査機カッシーニが地球から見てリングの向こう側を飛行するときに、放たれた電波を地球でキャッチその画像解析で決したデータとされる。粒子については、土星の周辺を飛来した小天体が衛星と衝突し、飛び散る塵が小さな粒子となつてリングを形成したという説が広まっている。

リングの近くを回つて塵を引きついたり、ギャップや空隙を作つた五つの群れは羊飼いの衛星と呼ばれ、重力的作用の結果により、リングを捻れたような形状にするとも見られている。青白い土星に写つた黒い線が陽光照射によるリングの影と分かるのは、二〇〇五年に撮影した画像から判明し、北半球を横切る衛星ミマスも写つたが、当時は北半球に雲がなく太陽も斜めから照らす位置関係にあつたため、地球の青空のように土星の大气も青色だつたとされる。またFリングの内外に写る二つの羊飼いの衛星は、形が歪でクレーターが確認され、北半球を背景に写された衛星ディオネは表面が白黒系の色であり、土星本体にはCリングとBリングが描く曲線が細い影を何本も落とすとされる。つまり、今や探査機から送信される画像は、土星も衛星もリングも同じ画面へ収められ、そのスペクトルに至つては真贋その判定も難しくなつてゐる。

衛星タイタン（直径 $\parallel$ 約五五一一km）は木星系ガニメデ（同五二六二km）に次ぐ大きさ、土星本体から二一番目に位置しており、厚い窒素の大气に覆われて、液体エタンやメタンの湖らしき地形も発見されている。土星の主なリングは地球と月の間の距離より近くにあり、小さな羊飼いの衛星はリングの近傍を公転し、Eリングの外側二〇番目は大きさでタイタンに次ぐレアの公転が見られるも、大きさはタイタンの三〇%にも満たない差をもつとされる。直径が約一五三四kmのレアの軌道長半径は約五三万kmとされるが、タイタンの軌道長半径は一二二万km超だから、間隔距離は遠く離れており、地表は氷が主で大小のクレーターに覆われているという。

土星へ接近した探査機は四つを数えるが、一九七九年九月一日、二万一〇〇〇kmまで近づいた際の熱気は、土星とリングを目の当たりとした興奮にあり、次に軌道長半径一四五万kmの辺では太陽風との衝撃波面を発見しており、土星の磁気圏の存在を確実なものにしたという。探査機の飛行は以後も続けられ、多数の撮影画像はもとより、土星の周回軌道へ送り込んだオービター $\parallel$

周回機とプローブⅡ突入用探査機の成果は甚大だったとされている。抑も衛星タイタンの発見は一六五五年に始まり、一九四四年に太陽系で大気を持つ唯一の衛星と認められた。一九八〇年の接近探査は基本的な大気の構造や組成を明らかにし、メタン数%を含むが窒素九〇%を主成分に成る大気の中身は地球以外だとタイタンのみと仮定された。ただし、この大気は太陽の紫外線を受け光化学反応から、タイタンソリンⅡオレンジ色の高分子有機化合物をつくり、視界を封じるスモッグの広がりと同じため、地表を可視光で見るとは適わなかった。この難問を解いたのがオービターとプローブのセパレーツとされ、赤外線で大気を透過、撮影のほか多数試料の採取と回収に成功し、地表にクレーターがないことから、過去は小天体の衝突で存在したクレーターも後に浸食作用や地殻変動が盛んになり、現在は消失してしまつたと推定されている。

衛星タイタンの北極付近にメタンやエタンで成る湖があることは、二〇年以上も前にレーダー観測されていたが、その正解を裏付けたのもオービターとされ、オービターから切り離され着陸成功したのがプローブとされる。プローブはパラシュートで降下しつ、大気中の観測データを地球へ送り、着陸後のデータも価値ある資料を多く送つたという。大気中にはメタンで成る雲が発見されており、メタンが雨となつて地表を流れたと思える川のような地形もあれば、緯度七九度付近の湖には島も発見され、表面気圧が一・五に達したり、温度がマイナス一七九℃に冷えるデータなど、木星と土星に係る天体は主客転倒に陥る危険も多く盛り込まれている。

さて土星をほとんどの霊言ラ行のりであるが、をはワ行の才段、ほはハ行の才段、とはタ行の才段、のはナ行の才段、べはハ行工段への濁り音、つまり神名をほとんどのべ音字を霊言ラ行りに置き換えつつ、適合する元素番号はいくつか前記と同じく後述で明らかにする。惑星あと二つの説を残すだけとなつたが、霊言イ段も残るはハ行のヒ及びナ行のニのみとなつている。



## ●天王星おもだる靈言八行のヒ

公転周期八四・〇二二三年、自転周期〇・七一八日（一七時間一四分）、太陽からの平均距離一九・二一八四AU（二八億七五〇〇万km）、赤道半径二万五五九km、質量は地球の一四・五四倍、実視等級プラス五・三、衛星数二七個というデータがある。自転軸の傾きが横倒し状態とは前記しているが、それは惑星や準惑星が形成された頃に天体衝突が起こったと考えられ、金星の約一七七度（時計回り）あるいは冥王星の約一二〇度とともに例外とされている。ところが軌道傾斜角は約〇・八度と最小で地球の軌道面と等しい状況にあるとされる。自転軸の傾きは季節と関係し、仮に地球が水星のように傾きゼロだったとしたら、季節は緯度に応じた気候が続くだけ何も変わらないとされる。天王星の場合は、公転周期の半分〓約四二年もの間を北半球は夏・南半球は冬となり、残り約四二年間は逆に北半球が冬・南半球が夏ということになる。

前項で触れたリングは、原始太陽系の塵〓珪酸塩ないし炭素質化合物の微粒子で成り、代表的リングは土星系に象徴されるが、木星系は三つに仕分けられ、木星の近くに広がるのはハローと呼べれ、次に数十kmの厚さで成るリングをメインと呼び、その外側で少し違って見える二種類はゴサマー〓希薄と呼ばれる。因みに、リングの近傍を回る衛星は総て羊飼いの衛星と呼ばれ、永くリングが安定し得る要因は衛星の重力的作用と考えられている。天王星のリングは一三本という見方が一般的とされ、粒子の大きさは、最大クラス数mレベルで土星と類似するが、違いは数cm〓数mmレベルの粒子が少ない点だとされている。探査機は一九七七年に放たれ、天王星の上空の約八万一〇〇〇kmを通過し、大気中のメタンが陽光の赤色を吸収するため、可視光では青緑色に見えること、自転周期は天王星が放つ電波の観測で決せられ、細いリングや衛星の新たな発見が以前の数に加えられ、自転軸に六〇度も傾き中心からズレる磁気軸も明らかにされた。

天王星も大気層は水素・ヘリウム・メタンで成り、マントルの層はアンモニア・水・メタンが混じる氷で成り、核は岩石と氷で成るとされる。五大衛星と呼ばれる衛星は、軌道長半径の短い順その大凡の直径を付記しておく、ミランダ $\parallel$ 四八〇km、エリエル $\parallel$ 一一六二km、ウンブリエル $\parallel$ 一一六九km、テイタニア $\parallel$ 一五七七km、オベロン $\parallel$ 一五二二km、とされている。それぞれ反射率が高ければ明るくなるが、反射率の高低は様々あり、クレーターの多少も様々あり、テイタニアは太陽系の衛星中八番目に大きいとされる。

天体ショーを観測するとき、最大の難関は大気の揺らぎとされてきたが、最近では望遠鏡に波面補償光学装置を取り付けることにより、鮮明な観測が可能になったといわれている。それは特に天王星や海王星の観測とともに、急速な発展を遂げつつあるが、むしろ天体探査へ直行して取材資料を送る機能には及びようもないし、如何なるメカニズムも最終的解明の責任は人が負うしか法は定まらない。問題は天体ショーのイロハも心得ない認知症が政官業言を埋め尽くし、大気の揺らぎを演じる勢力に操られる危険が去らないことにある。つまり、揺らぎの先に朦朧と見える事象は幻想にすぎないが、人は事実と見間違え幻想を真相へ置き換えようとし、傲慢この上なき勢力が演じる大気の揺らぎの中へ沈んでいくのが政官業言なのである。この危険へ対応するには畏怖の心を養うことにあり、それはアニミズムやシャーマニズムに根付いており、かつては家庭教育や社会教育の中で習得されたが、政官業言の増長により、いつしか畏怖は月光の化身として虚飾された電光文明の中へ身を隠したまひき存在となつてしまつたのだ。

さて霊言八行のヒであるが、おはア行の才段、もはマ行の才段、だはタ行のア段タの濁り音であるはウ行のウ段、神名おもだる音字が霊言八行のヒに適合する事由とともに、原子番号では何に相当しえるかは後述で明らかにする。

## ●海王星あやかしこね靈言ナ行の二

公転周期一六四・七七四年、自転周期〇・六七一年（一六時間六分）、太陽からの平均距離三〇・一一〇四AU（四五億四〇〇万km）、赤道半径二万四七六四km、質量は地球の一七・一五倍、実視等級プラス七・八、衛星数一三個というデータがある。海王星のつくりは、大気層やマントル層さらに核も天王星と同じ構成とされる。天王星より僅かに小さいが、質量は約一・二倍で密度は木星型の中で最も大きい値を示し、離心率も金星に次いで惑星中二番目とされている。自転軸が横倒し状態九八度の天王星は、磁気軸も自転軸に対し六〇度も傾いており、磁気軸が通っている位置は本体中心から半径の三分の一近くズレるとされる。海王星は自転軸の傾き二八度、それに対する磁気軸の傾きは四六・八度、ズレは中心から半径の二分の一強とされている。

天王星へ放たれた探査機は一二年後に海王星まで約五〇〇〇kmの距離へ接近、そこで以前から観測上の指摘とされていた希薄な五本のリングを確認したという。それは海王星が背景の恒星を隠す地球から見た場合の掩蔽を裏付けるものでり、天王星のように本体と比べ暗い粒子が集まるリングを内側とし、次に明るく暗のリング、最も外側のアーク＝円弧状は少し明るめ、内からガレ、ルベリエ、ラッセル、アラゴ、アダムスの呼び名が付されている。また海王星の表面に見られる変化は太陽から届く熱量の違いと考えられ、大黒斑や、その傍にある高層の白雲とか、中に白い雲を含む小黒斑や、スクーターと呼ぶ白雲など、それぞれ異なる速度で表面を移動していく相が確認できているとされる。それは赤道付近で吹く風と関係しており、西向きの強風は秒速四〇〇メートルに達し、土星の赤道付近とは逆方向だとされ、表面を覆う大気の動きも活発、公転との連関が経年変化の事由とされている。海王星を青緑色に見せるのは、メタンを含む大気すなわち天王星と同じ事由によるが、大きな違いは自転軸と磁気軸が異なる点とされる。

次は海王星と冥王星の違いに触れたい。海王星の離心率は約 $0.01$ 、冥王星は約 $0.25$ と大きな差を有し、軌道長半径は約 $30.1$  AUと約 $39.5$  AU、近日点距離は約 $29.8$  AUと約 $29.6$  AU、遠日点距離は約 $30.4$  AUと約 $49.3$  AUというデータが示される。であれば双方の数値を対比したとき、海王星の遠日点距離は冥王星の近日点距離よりも短いがために、双方とも交叉は必然その衝突は免れまいと思うが、実際の軌道交叉は次の如き事由で起こりえない。まず軌道傾斜角として、海王星の $1.77$ 度に対し、冥王星は $17.1$ 度と大差を有し、次に近日点引数また昇交点経度という軌道要素に相異が生じるからだ。因みに、近日点引数とは昇交点から測った近日点の角度で軌道の向きを定めること、後者は春分点から測った昇交点の経度を指して使う専門用語とされる。ところが頭の体操には限らない世界が待ち受けている。

右の如き三次元的な捉え方に対して、太陽系の年齢を推し量つては、鶴は千年・亀は万年いま何年目というように、交叉×デーの危険が拭えないため、現在は学校教育の中に次のような説が唱えられる。それは水星の項で尽数関係あるいは共鳴と前記しているが、海王星と冥王星の公転周期の比は二対三だから、双方は接近が起らない配置にあり、その整数比で表わされる場合は平均運動共鳴という呼び方もあるとされる。つまり、平均運動共鳴にあると、天体は互いに回る公転軌道上の位置が接近しないよう安定されるというわけだ。

衛星では太陽系七番目の大きさトリトンが知られ、離心率ゼロの円軌道その軌道傾斜角は一五六・九度の逆行衛星とされ、その外側に歪な楕円を描くネレイドが回るとされる。

さて霊言十行の二であるが、あはア行のア段、やはヤ行のヤ段、かはカ行のカ段、しはシ行のイ段、こは力行の才段、ねはナ行の工段、神名あやかしこね音字が霊言十行の二に適合する事由とともに、原子番号では何に相当しえるかは後述で明らかにする。

● 霊言八神四対一覧表

	アの段		オの段		ウの段		エの段		イの段		
ア行	①	①	①	①							神名一〇柱五対
タ行		③ ③	①						③ ③ ⑤		宇比地邇神
ヤ行	②								①		須比智邇神
カ行	③	⑤	②	③ ③							角杙神
マ行		②									生杙神
サ行			①						③ ③ ④ ⑤		大斗能地神
ラ行		④									大戸乃辨神
ハ行		②	②	⑤					② ② ④ ④		淤母陀琉神
ナ行		④ ④		⑥					④ ④		阿夜訶志古泥神
ワ行		①	②								伊邪那美神
ダ行		③							③ ③ ⑤		濁り音
ガ行			③						③ ③ ⑤		濁り音
ザ行									③ ③ ⑤		濁り音
バ行				⑤							濁り音

水星うひぢ(じ)に霊言タ行のチ

地球つぬぐひ霊言カ行のキ

木星おほとのぢ(じ) 霊言サ行のシ

天王星おもだる霊言ハ行のヒ

金星すひぢ(じ)に霊言ヤ行のyi(い)

火星いくぐひ霊言マ行のミ

土星をほとのべ霊言ラ行のリ

海王星あやかしこね霊言ナ行のニ

●元素周期表色別（屬種系列）一覽

	1A	2A	3A	4A	5A	6A	7A	VIII			1B	2B	3B	4B	5B	6B	7B	0
1	1	←						原子番号			→						2	
	H	←						原子記号			→						He	
	1	←						原子質量			→						4	
2	3 Le	4 Be											5 B	6 C	7 N	8 O	9 F	10 Ne
	7	9											11	12	14	16	19	20
3	11 Na	12 Mg											13 Al	14 Si	15 P	16 S	17 Cl	18 Ar
	22												27	28	31	32	35	40
4	19 K	20 Ca	21 Sc	22 Ti	23 V	24 Cr	25 Mn	26 Fe	27 Co	28 Ni	29 Cu	30 Zn	31 Ga	32 Ge	33 As	34 Se	35 Br	36 Kr
	39	40	45	48	51	52	55	56	59	59	64	65	70	73	75	79	80	84
5	37 Rb	38 Sr	39 Y	40 Zr	41 Nb	42 Mo	43 Tc	44 Ru	45 Rh	46 Pd	47 Ag	48 Cd	49 In	50 Sn	51 Sb	52 Te	53 I	54 Xe
	85	88	89	91	93	96	99	101	103	106	108	112	115	119	122	128	127	131
6	55 Cs	56 Ba	57 La	58 Ce	59 Pr	60 Nd	61 Pm	62 Sm	63 Eu	64 Gd	65 Tb	66 Dy	67 Ho	68 Er	69 Tm	70 Yb	71 Lu	
	133	137	139	140	141	144	145	150	152	157	159	163	165	167	169	173	175	
				72 Hf	73 Ta	74 W	75 Re	76 Os	77 Ir	78 Pt	79 Au	80 Hg	81 Tl	82 Pb	83 Bi	84 Po	85 At	86 Rn
			179	181	184	186	190	192	195	197	201	204	207	209	210	210	222	
7	87 Fr	88 Ra	89 Ac	90 Th	91 Pa	92 U	93 Np	94 Pu	95 Am	96 Cm	97 Bk	98 Cf	99 Es	100 Fm	101 Md	102 No	103 Lr	
	223	226	227	232	231	238	237	239	243	247	247	252	252	257	256	259	260	
			104 Rf	105 Db	106 Sg	107 Bh	108 Hs	109 Mt										

## ●水素とヘリウム＋アルカリ金属

全元素中に占める水素の質量比は七五%とされ、無色の水素ガスも宇宙空間で大量に集結した場合には、天体の光を吸収し、ワシ星雲のように壮麗な光景を作り出している。他の基本元素と結合その分子化による多様性に関しても、水素の役割は太陽のように別格な存在ゆえ、周期律も単純な枠組みで括することはできない。当然ヘリウムも水素に準じるため、その発見は天体観測に始まり、前記した通り、木星型惑星の主成分として君臨しているが、地球では地下から湧きだす天然ガスに含まれる同位体を抽出している。むしろ地中へリウムは地球が原始惑星だった頃から存在していたわけではなく、悠久の時空を経るうち、放射性元素ウランやトリウムの放射壊変で生成され、今アルファ粒子と呼ばれているが、それ以前は大きな放射性元素の原子核を構成する陽子や中性子だったわけである。純粋ヘリウムは無色透明の不活性ガスであるが、電流が通ればクリーム色がかかる薄ピンク色の光を放つことになる。

番号3リチウムはアルカリ金属に分類され、水に浮かぶ同属はナトリウムだけ、非常に柔軟で水との反応は比較的に緩やか、ナトリウム以降のような爆発が起こらない。現在リチウムが取り出し易い形で埋蔵量が多いとされるのは、南米アンデス山脈の東ボリビアが一等地とされ、欲に固まる国益合戦に山師の参集は止むことがない。産業革命に不可欠の潤滑油グリースにはステアリン酸リチウムが含まれ、多種多様な電子機器の電源に使う電池ほか、双極性障害（躁鬱病）の安定に用いる炭酸リチウムなど、文明生活へ融け込む一面性に歯止めは掛かりそうにない。縦列11ナトリウムはアルカリ金属の中で最も爆発性が高く、水中へ投げ込むと急激に水素ガスが発生、数秒後には発火と大爆発が起こり、炎熱ナトリウムの欠片が四方八方へ飛び散っていく。それが塩化ナトリウムに変わると、サ行のシすなわち食塩となり、減塩タイプ塩化ナトリウムのほか塩化

ルビジウムや塩化セシウムの味をしのぎ、うま味は比べる要もなし、塩化リチウムは舌が焼ける後味のため論外であり、放射性フランシウムもまた論外はいうまでもなからう。何れも添加物の類だから、天然塩に比べるべくもないが、純粋ナトリウム金属は化学工業で還元剤として大量に使われているため、実質ナトリウムの付加価値は化学特性にこそあるといえよう。

縦列19カリウムにはナトリウムより反応性が高いものがあり、水に触れた瞬間に鮮やかな紫の炎が強い爆発力で四方八方へ広がっていく。カリウムは人体内で神経伝達を担っており、濃度が低すぎると、指先がこわばり、それが心臓へ達したら死に至るため、カリウムが豊富に含まれるバナナを普段から食べる習慣が広まっている。同37ルビジウムは用途が限られており、時を刻む正確さはセシウムに劣るものの、小型で安価ゆえに精度の高い時刻と周波数の基準が求められる場においては、セシウム時計より普及度が高く原子時計として使われている。次の55セシウムは世界的標準計時と放射性元素の段で詳しく触れたが、アルカリ金属の中で最も反応が早く、水を入れた容器へ一欠片を投げ込むと、一瞬で爆発その水が一面へ飛び散ることになる。次87フランシウムの呼び名は、一九三九年フランスにおける発見に由来あり、天然の生成元素としては最も不安定で半減期二三分の短さが証をたてる。フランシウムの放射能は半減期が短いため、放射性同位元素を幅広く使う医療分野でも、さすがに扱いきれず、実験室以外では使い道がないとされ市場に一回っていない。以上の縦列六種はアルカリ金属の所属とされる。

なお中性子の数は原子質量から原子番号の数を差し引いた残り数とされる。また電子の配置は

▼番号3と▼同11は順に軌道を満たし、▼同19は1sく3p満席・3d空席・4s一個、▼同37は1sく4p満席・4dと4f空席・5s一個、▼同55は1sく4d満席・4f空席・5sと5p満席・5dと5f空席・6s一個、▼同87は1sく5d満席・5f空席・6sと6p満席・6d空席・7s一個とされている



## ●軽金属ベリリウムほか縦列六種

原子番号4ベリリウムは同13アルミニウムより低密度であるが、リチウムの三・五倍で融点も強度も高いこと、腐食しにくいこと、高価で毒性があるなどの性質により、特殊な分野たとえばミサイルやロケットの部材として利用されている。またエックス線が透視できるため、X線管の窓部に使われるが、内部を完全真空に保つ強度は薄い加工も可能とし、微弱なX線も透視できる高度な技術に貢献したともされる。同29銅とベリリウム数%で成る合金は、叩けど火花も出ない硬い強度を有するため、油田や可燃性ガスの関連産業が工具用素材に用いている。ベリルII緑柱石とはベリリウム・アルミニウム・シクロ珪酸塩のこと、そのうちエメラルドやアクアマリンが宝飾品に使われたりする。即ちベリリウムは精製された純粋な結晶に特性が顕われる。

同12マグネシウムは微粉末の可燃性だと爆発が起こり、一昔前の写真撮影でフラッシュとして使われたり、映画やテレビで見える爆発シーンでは火薬の代わりもしている。しかし、大きな塊は表面の放熱が素早く簡単に着火せずに、軽くて強い・加工が簡単また価格が手ごろのため、レーシングカーや航空機などの部材に使われるが、合金製マグホイールの紛い物もあり価格の高騰が心配されている。同20カルシウムは銀白色の硬い金属を純粋元素とするが、不安定な性質は水や酸に反応すぐ水酸化カルシウムや炭酸カルシウムに変化するため、その正体が一般的に知られる機会は容易に訪れないとされる。反応はアルカリ金属と同じ水素を発生させるといだが、緩慢な速度で反応するため、少量の水素を得たいときに役立つとされている。関心は骨とカルシウムに集約されるが、哺乳類の骨は燐酸カルシウム水和物の一種ヒドロキシアパタイトが硬い多孔質へ変化したものだから、石灰化する骨の主要成分はカルシウムに違いはない。そして、生命を保つカルシウムは多めの摂取が必要とされ、その諸説も少なくないが、筆者は共振電磁波論あるため

後述で明らかにする。同38ストロンチウムは同位体<sup>90</sup>Srの濡れ衣を着せられ、死の灰を降らせた人工文明最大の被害を被っている。発光塗料アルミン酸ストロンチウムの固有性は、周囲の光を効率よく吸収し、その後しばらく時間をかけてから放出するため、放射壊変で光を放つラジウム入り塗料とは確実に一線を画している。また製造用に広く使われるアルミニウム珪素合金は長く脆さを指摘されてきたが、ごく少量のストロンチウムが添加され欠陥は解消されている。さらに同属カルシウム・ブームに刺激されてか、骨の成長促進という触れ込みにより、サプリメントの市場参入へ向かう商業ありきの研究もストロンチウムに託されている。

同56バリウムはギリシア語バリスⅡ重いに因むとされるが、純正は軽量22チタンより低密度で重いととは思われないが、化合物の大半は重量級に入るという特性を有している。用途は化合物の懸濁液の密度を利用することが多いとされ、たとえば、油井はドリルで掘削しながら、硫酸バリウム溶液を穴へ注入し、破碎した岩石屑を浮かせ取り出している。硫酸バリウムはX線の透過を遮るため、診断医療の造影剤に使われ、消化器の括れや曲がりの撮影に用いられている。純粋なバリウムは同8酸素と反応が急なため使い物にならないが、逆利用としては、酸素を消滅させる場合に打って付けの役を果たしている。昔の真空管ブームにあつては、ガラス管の内側へ銀色系バリウムが蒸着され、真空管の製造時管内に残る酸素・水蒸気・二酸化炭素・窒素にバリウムが反応それらを除き去してしまう。それはガラスの接合部から潜り込む塵にも反応しており、これら機能はバリウムゲッターと呼ばれ重宝がられていた。(※超伝導性は後述する)

同88ラジウムは二〇世紀初頭に錬金術の世界を狂喜乱舞させた花形スターであり、ラジウムと全く無縁であつても、無理を承知のインチキ・ラジウムが日常生活へ溶け込んでいった。それは今世紀のナノ・スケールブームを仕掛けるインチキ・ゲームに通じるが、錬金術の小手先を知る

機会でもあるので少し紙幅を費やすことにする。水素は一七六六年の発見とされ、以下その発見年次を追っていくと、酸素一七七二年、塩素一七七四年、モリブデン一七七八年、タンダステン一七八一年、テルル一七八二年、セレン一八一七年、ジルコニウム一八二四年、タンタル一八二八年、セシウム一八六〇年、ルビジウム一八六一年とされるが、一八六九年前ころ元素と周期律に關しての概念が提唱されるようになる。電気素量をエレクトロンと呼ぶ公認は一八九一年の國際會議で決せられたが、僅か六年後の一八九七年エレクトロンは陰極線へ登記変更され、電磁波の発見者ヘルツの死去は一八九四年とされている。一八九四年アルゴンを発見し、一八九八年には世界中が変革序章の段へ突入するが、同年中に発見された原子はラジウムのほかネオン、クリプトン、キセノン、ポロニウムとされている。

発見者キュリー夫妻の個人情報は省略するが、放射性元素ラジウムの発見は、大氣の揺らぎを演じる歴史的な勢力すなわち錬金術を生涯の糧に歴史を継ぐ勢力にとり、不老長寿を手にしたも同然の大願成就へ通じるものがあつた。軽金属Ⅱアルカリ土類金属ラジウムは、質量二二六・〇二五四で同位体に $^{224}\text{Ra}$ と $^{228}\text{Ra}$ の計三種あり、何れも発ガン性あり、放射線源に用いた医療分野も慌てふためき同 $^{27}\text{Co}$ 同位体の $^{60}\text{Co}$ へ代えている。それはさておき、錬金術が狂喜乱舞した事由とは、ラジウムの放射壊変にあり、自爆後ラジウムは同 $^{86}\text{Ra}$ 同位体Ⅱ質量二二二・〇一七六へ変身その事実を認めると、彼ら錬金術勢力は金本位制に絶対的な確信を得ることになる。彼らは歴史を継ぐコスモポリタンゆえ、ナシヨナリズムなんてどうでもよし、マーケットの運営形態が何だろうと、文明圏すべてを金本位制へ誘い込めば、以後の基軸通貨が何になろうと、如何なる大國が出現しようもはや國際政治は彼らの手に落ちたも同然となりえる。第一次世界大戰に雪崩れ込む以後の歴史は改めて述べる必要もあるまい。

さて通積の放射壊変に触れておこう。軽金属ラジウムの質量四つが欠けると、属違いラドンの質量と同じになるが、ヘリウムの質量は四その核子は陽子二個・中性子二個で成るとされ、ヘリウムは希ガス中で最も軽いとされ、ラドンは最も重い希ガスとされている。ヘリウムは絶対温度ケルビン〇度以下に置かれても液相しか見られず、固相になるのは太陽内の超高压下へ置かれる以外ありえないとされる。ラジウムは安定同位体が存在しないとされ、放射壊変によって減じた質量四つを物理はアルファ粒子と呼ぶことにした。そのアルファ粒子は核内で働くエネルギーを振り切るほどの力を持たないため、崩壊はトンネル効果により、核エネルギーの壁を通り抜けて核外へ飛びだし、核内との間には電磁の斥力が働いたため、そのままアルファ粒子は原子外へ飛び抜けていくというわけだ。トンネル効果とは、極微な空間に在る粒子が、通り抜け厳しい難関も量子効果で通り抜けることだという。笑止の沙汰ではあるが言い争いはしない。もう一つは元素周期表の番号52と同53の質量数に着目すること、順位が前後しており、その括り方を決したのは一九一三年でX線回析スペクトルを理屈に講じられている。第一次世界大戦一年前の決着が何を意味するか、ここでは触れないが、文明の放射壊変もラジウムと軌を一にしている。

以下、縦列六種が描く確率の雲に見合う電子軌道について、その配置される電子の数を通積に従い前記と同じように記しておきたい。▼番号4と▼同12は順に軌道を満たし、▼同20は1sく3p満席・3d空席・4s二個、▼同38は1sく4p満席・4dと4f空席・5s二個、▼同56は1sく4d満席・4f空席・5sと5p満席・5dと5f空席・6s二個、▼同88は1sく5d満席・5f空席・6sと6p満席・6d空席・7s二個とされている。少し補足を加えておきたい。半減期一六〇二年のラジウムの用途は文字盤や針が夜光塗料で光る時計を普及させたが、その塗り仕事は女工を放射能で死に至らしめ、現行の労働法も危険物取扱法も、その被災が原因で法施行が始まったとされている。

## ●半金属ホウ素ほか同属七種

金属に似て非なるメタロイドⅡ半金属、番号5硼素は同7窒素と化合したとき、そこに出来る結晶は同6炭素と似た相を顕わし、立方晶窒化硼素はダイヤモンドに近い結晶を顕わし、安価で硬度も耐熱性もダイヤに劣らないため、鋼鉄製品の研磨剤として広く使われている。むろん目の洗浄からゴキブリの駆除まで硼素は多分野に用いられるが、戦略上の関心は硬度でダイヤを凌ぐ単結晶を造れるか否かに集約されている。繊維状をした褐黒色の繊維亜鉛鉱はウルツ鉱と呼ばれ、六方晶系に属し、硬度三・五〜四、比重三・九八〜四・〇八、柱状劈開の相あり、温度一一八五℃で窒素中に昇華するが、この鉱物と同じ型で窒化硼素の単結晶が造れば、ダイヤモンドより硬い世界一の人工石を作れるという計算も説かれている。炭化硼素も硬いことで知られ、スパイ映画では顆粒を内燃エンジンに投入し、シリンドー壁を傷つけ、エンジンを壊し、科学的な粋を盛り込んだりするが、戦略オタクの発想は近年のブームになっている。

同14珪素はシリコンとしても知られ、SF化学が好む点では硼素を上まわり、炭素に最も好く似た点を唱い、半導体ブーム以降その首座は完全に独壇場となっている。コンピュータチップは二酸化珪素からスタートし、今は超高純度の単結晶で成る珪素も出回っており、そこへ解像度が可視光以上の精密回路を刻むなど、演算能力も天文単位を弾き出すまでに達している。また珪酸塩鉱物とは、珪素と酸素との結合体にアルミニウム・カルシウム・同26鉄その他が加わったもの、即ち地球の骨格たる岩石・砂・粘土・土壤などの主成分を意味するが、地殻構成物質では酸素に次いで主役レベルの存在感を明らかにしている。さて、ここで問題になるのは、歴史認識を司る文明首座であるが、人脳コンピュータはDNAを回路とし、電脳コンピュータは珪素を回路とし、前者の骨格は燐酸カルシウムで成り、後者の骨格は珪酸塩鉱物で成るところである。この問題を

と解くことは、本書の骨格でもあるため、ここでは問題提起に止めるとし、まずは原子についての質性鑑識を優先しておきたい。同32ゲルマニウムもゲルマンドイツに由来あり、前記フランシウム、同84ポロニウム（発見者マリー・キュリーの祖国ポーランドに因む）、同95アメリカなど、国名に因む原子四つの中の一つとされる。ゲルマニウム以外の三つは放射性で発見された時期も遅いこと、自然界にも検知できるほどの割合で存在しないとされる。半導体はゲルマニウムを首座に始まっており、シリコン製トランジスタの出現までは、ダイオードを含む半導体は総てゲルマニウムの支配下に置かれていた。現在でも光ファイバーや赤外線光学関連に使われ、たとえば、ゲルマニウム製レンズは可視光は通さないが、赤外線を通すという特殊性が諸分野に活かされている。その戦略性をドイツが如何に活かしたかは触れない。

同33砒素は毒性を強調されるが、食用ニワトリの餌に配合され、有機砒素化合物に使われる場合は純粋な砒素ほど毒性がないとされ、鶏の成長を促し助けるとされている。パリスグリーンⅡアセト亜砒素酸銅は画材の顔料に使われたり、ネズミ駆除用には毒性を活かしたり、古来その毒と葉の使い分けも人が決するところ、同31ガリウム砒素半導体のマイクロ波増幅器など総ては人が責を負うしかあるまい。同51アンチモンも錬金術が好むところで、印刷や銃器の付加価値を高めたり、自ら美しい音色を響かせるなど、その高い結晶性は錬金術が自らのマークとして掲げ悦に入るほど親しまれている。つまり、アルミニウム・鉛・錫などの普通金属より脆いが、鉛にアンチモンを加えると、鉛だけが原子の時より硬くなる特性が分かり、次に錫を加え三種の割合が違う合金を作ろうとし、溶融時と固形後をチェックすると、固体は僅かに膨張するという特性に気づかされ、活版印刷の創始者グーテンベルクの印字判が生まれている。それは硬い合金銃弾のほか、銃器の新型化も促し、一般向け自動車用鉛蓄電池にも使うが、アンチモンの本領と

好まれるのは、融かした塊が冷えて再び固形化していく過程にあつて、内部の結晶が壊れ弾ける音とか、横滑り弾ける音など、その合奏の妙もさることながら、星形のアンチモンの結晶こそが錬金術を象徴するマークに利用されている。

同52テルルの語源はラテン語テルス（地球）にあるとされ、微量でも人体内へ入ると、腐つたニンニクの臭いが数週間は抜けないといわれる。テルルの結晶も美しいとされ、流通も純正品の形で出回るとされるが、産出はレアメタルの部類に属し、CD-RWやDVD-RWの書き換え型ブルーレイディスクの記録層には、化合物として使われており、レーザー熱で反射状態を切り替え書き込みと消去が出来る仕組みになつてゐる。電子化社会の過渡期にあるいま、レアメタル問題は大气の揺らぎにも通じており、錬金術パターンの一端を窺わせるが、稀少価値を売り物に価値観を煽るのは、金本位制が結果的に招来した世界大戦の前触れと似通うものがある。それが単なる杞憂に終わるか否かは、元素周期表を完全に読み切るとともに、その質性鑑識を登竜門と心得ないかぎり、如何なる現実が生じるか解けるはずあるまい。現代ジャーナリズムの尖兵たるテレビの質性も解けないまま、電磁波を不当に操る勢力の支配下に置かれ、共振それ津波の如き荒れ狂う状は放射線そのものというほかない。

同84ポロニウムは天然だとウラン鉱の中に存在し、近年の代替物としては、静電気除去ブラシ用ポロニウムが生成されている。それは毛の裏にポロニウムを含む金色の細長い金属薄片が付くブラシで広く知られるが、薄片は同47銀に同83ビスマスをもツキ、そこへ同79金のメツキを施し、薄片の完成後に強い中性子ビームを放つと、ビスマスの一部がポロニウムに変わるといふ。ポロニウムは致死量が一〇ナノグラム（一億分の一）とされるため、空気に触れない作り方は巧妙も極まると絶賛されている。ただしブラシ用ポロニウムは半減期が一三八日のため、用途の寿命が

短く価格に見合うか否かは使い方しだいとなろう。それはさておき、問題はポロニウムを使った  
要人殺害の表面化にあり、二〇〇六年ロンドンで発生した事件であるが、元ソ連国家保安委員会  
職員が約一〇マイクログラム（一〇万分の一）のポロニウムを盛られて殺害されている。ロシア  
政府はポロニウムの供給に大きな影響力を有しており、これだけ多くのポロニウムを扱えるのは  
核兵器製造国でなければ入手は不可能であり、殺害された要人はロシア政府にとって、反逆的な  
存在だったことから、現代ジャーナリズムの詮議は国際社会に行きわたった。筆者の関心は殺し  
合う事件に興味はないが、これまで闇から闇へと葬ることが出来た人の力が及ばなくなり、その  
事案の如何に関わらず表面化を免れない日々の到来は何を意味するかだ。

諸行無常の天体ショーに順えば、古事記に宿るシャーマニズムも宜なるかな、これまで熱心に  
省みなかつた科学へ思いやりを深めること、その導きに順うとき、神々の降臨と神通力に新たな  
光が灯されている。それは次の非金属六種に託されており、その認識を深めることこそ次世代が  
得るべき養分の補給にあたるため、筆者も心して認識の気合を深めるようにしたい。

さて、半金属七種の電子軌道と配置数も前記に倣い記しておく。▼番号5は1s二個・2s二個・  
2p一個、▼同14は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・3p二個、▼同32は1s二個・2s二個・2p六個  
・3s二個・3p六個・3d一個・4s二個・4p二個、▼同33は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・3p  
六個・3d一個・4s二個・4p三個、▼同51は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・3p六個・3d一〇  
個・4s二個・4p六個・4d一個・4f空席・5s二個・5p三個、▼同52は1s二個・2s二個・2p六個・  
3s二個・3p六個・3d一個・4s二個・4p六個・4d一個・4f空席・5s二個・5p四個、▼同84は1s  
二個・2s二個・2p六個・3s二個・3p六個・3d一個・4s二個・4p六個・4d一個・4f一四個・5s  
二個・5p六個・5d一個・5f空席・6s二個・6p四個とされている。



## ●非金属六種（電気絶縁体）

番号6炭素、同7窒素、同8酸素は水素に次ぐ基本元素とされ、非金属に分類され、同属には同15リン、同16硫黄、同34セレンもあり、何れも電気絶縁体その特異な相も重大とされる。まず同6炭素の特性で挙げられるのは、DNA||デオキシリボ核酸（遺伝子の本体）の骨格たる螺旋構造に始まり、ステロイド（複合構造で成る種々の化合物群）やタンパク質、何れも生命活動に不可欠な要素に係る中心的存在ということである。炭素を含む混成物質を総て有機化合物と呼ぶ定め方からして、炭素が如何に重要な役割かつ大量に存するかは明らかだろう。礬素を説く中で触れたダイヤモンドも炭素で出来ているため、ダイヤモンドは稀少でもなければ、その美しさも永遠も怪しい契約の決め事にすぎない。ダイヤモンドと美を競うだけなら、キュービックスズルコニアとか結晶シリコンも同等レベル、今やダイヤモンドを二酸化炭素へ変えるのも難しくはない。錬金術のデビアス商会が作る神話の投資ダイヤモンドは、売価が原価の一〇倍を超えて、模造の賞味期限も次々に消える傾向にあり、今世紀ダイヤモンドの余命も長くはあるまい。（※余談この程度に…）

炭素は蜂の巣状に連なるシートを編むと、シートを積み重ねる形で黒鉛が成り、その大鉱脈は一六世紀イギリス湖水地方のポローデルで発見され、今でも純正黒鉛の最大産地とされ、昔も今も英国王室を支える資源に成りえている。また蜂の巣状シートを筒状にすると、近年ブームの素材カーボンナノチューブとなり、コンピュータ・グラフィック・モデルの球形C<sub>60</sub>は設計者名に因みフラーレンとかバッキーボールとか呼ばれている。いずれにしろ、炭素と地球生命の関係を歴史的にとらえ、二酸化炭素を事例に推移を探ってみると、恐竜時代の生命すべてが取り込み蓄積した二酸化炭素の量に対し、現代の文明は僅かな期間のうちに、その数十万倍の量を地球圏空域へ吐き出している。とても政治家なんかの手に負える問題ではないだろう。

次7窒素は空气中成分の七八%を占めるとされるが、分子N<sub>2</sub>の状態では不活性ゆえ目立つほど存在感をあらわにしない。ところが、水素三つと化合アンモニアになると、強い反応性で優れた肥料となり、植物の繁殖に役立ち二酸化炭素の吸収を助けている。自然界では豆科の植物の根に根粒菌という微生物が共生しており、菌が空气中の窒素を捕獲それが養分となり、豊かな土壌の中に植物が育つというサイクルを刻んでいた。第一次世界大戦の少し前、人類史上屈指の文明的成果とされたアンモニア肥料は、今や国際市場に三分の一というシェアをもつが、発明当業者は戦時中に同17塩素で毒ガスを作らされ、結局その生涯は人類史上屈指の悪人とされている。さて液体窒素であるが、沸点マイナス一九六℃は安価で使い易く何でも凍らせるために、生命体サンプルの保存を簡略化し、その用途に伴う利便性は多忙な文明を支えてやまない。

次8酸素は炭素が生命の要素であれば、要素へ息を吹き込む糧となり、窒素が空気の圧倒的な多数派であれば、その多数派を育む養分が酸素といえよう。有機化合物の大半と反応する酸素は生命プロセスを促しており、酸化という働きは燃料を意味することになる。空气中の発火現象を検証すれば、含有率二一%の酸素に起因があり、酸化作用という強い反応エネルギーは、酸化の同義として燃料という言い方をしても不自然ではない。例えば規格が同等レベルのジェット機とロケットを比べると、ジェット機が飛ぶ空間は酸素すなわち燃料に不足なし、ロケットが飛ぶ空間は燃料分以外に酸素を積み込む必要あり、同じ距離を飛ぶにはロケットが負うべきハンディキャップは決して小さくはない。酸素は地殻質量の半分近く、海水質量の八六%を占めるとされ、高圧で液化すると、生命を脅かすほどの猛烈なエネルギーを放出している。マイナス一八三℃で美しい薄青色の液体になる酸素は、地殻や海水に在る時は化合物の状態にあり、化合の際に放つエネルギーも消費量が少なくないため、液体は気体の時よりも安定を保つことになる。

次15リン（**燐**）は同位体の白リンが一六六九年ハンブルグ（現ドイツ）で発見され、一九四三年ハンブルグに空襲があったとき、建物は焼夷弾（マグネシウム）に破壊され、逃げ惑う生命は白リンに焼き殺され、今も砲弾へ充填される白リンは戦場を飛び交うため、他の同位体へ迷惑を及ぼす悪役のイメージがあるが、それは人の為せる業で白リンの責任ではなからう。比較的安定同位体の赤リンは、発火剤たるマツチで一般に知られるが、暗い倉に保管される猛毒の白リンも陽光にあたると赤リンに変わっていく。最も安定した黒リンは作るのが難しいため、用途も特に周知されていないが、珍しい紫リンは赤リンと黒リンの混合物とされている。一九世紀の中ごろ燐鉱石から肥料を作る方法が講ぜられると、燐の不足に技術的な対策効果が示され、人口急増の遠心力に起爆剤が加わり、燐の本領ここに極まる次の如き事由が説かれている。燐酸塩の歴史と関わる時、古来その生活習慣は燐の重大性に気づいており、たとえば、土壤中に含まれる天然化石肥料や骨粉など不足すると、農作物が不作となり、大飢饉に見舞われるなど、実体験で得る農作物生育のキーは燐の存在にあると会得されていたのである。

次16硫黄は地獄の業火という古名が伝わるように、硝石や木炭と混合すなわち黒色火薬と呼ぶ成分の一つとされ、摩擦や衝撃で容易に発火し、急速に燃焼して大量の煙を吐き出すが、独特の臭気を放つ役は硫黄の独壇場とされる。都会のスモッグは、石炭や石油などの燃焼で排気される硫黄化合物が原因とされ、その成分除去は工場や自動車などに義務付けられ、何かに付け硫黄が放つ臭気は芳しく思われていない。ところが、硫黄は大量の生産と消費が約束され、硫酸は主力製品として、種々な製造または加工の分野に利用されている。さらに硫黄粉末になると、園芸に用いられる土壌のpH調整用に使われ、同じ化合物と何ら違わないのに、その名は有機物質と呼ぶ変名で大ヒットし、同じ臭いがニンニクやタマネギに含まれても食されている。

次34セレンの濃度は薬と毒の境目に直接かわる特性とされる。むろん薬にも毒にもなる物質は多数あるが、セレンは少量なら必須栄養素となり、多すぎれば毒となり、土壤に含まれるセレンの濃度は生命すべての死活に影響するという。例えば北米の豆科植物のロコ草はセレンの濃度が高い地域に繁茂し、家畜には危険な地域とされているが、セレンの毒性がロコ草の毒性が双方相乗の毒性かは不詳としても、高い濃度が生命に危険なことは確かとされている。もう一つ電気絶縁体としてのセレンに触れておきたい。それは濃度に係る問題も含むが、現行コピー機やレーザープリンターまたデジタルカメラなど時代のヒーローを生みだし、そのヒーローを生んだ元素こそセレンにあるとする奇怪な説法が講じられている。

現行コピー機などに内蔵される感光ドラムは、セレン系コーティングが施され、暗い処は電気絶縁体でも、光が射す処は光電効果すなわち電気が通る性質になるとされる。そのメカニズムは次の通りとされる。感光ドラム全体は静電気が蓄積され、被写体の原稿へ露光が射すと、明るい部分は感光体の導電性が働いたため静電気が失われ、暗い部分は静電気が残り、ドラム上にトナー微粒子粉末が接触して、静電気が残る部分にトナーが付着され、最後に熱せられたローラーがトナーを溶解ドラムとコピー用紙が接触してトナーが付着され、最後に熱せられたローラーがトナーを溶解転写して写し作業が完了するというわけだ。

またデジタルカメラの普及は露出計を無用のものとした。かつてセレン露出計はカメラマンの必需品とされたが、数百万個のピクセルの個別露出計を備えたと同じ形式がデジタルカメラで、全体的画像是個々の個別露出計の露出効果で表示されるため、光の具合の良し悪しまで見分けるといふ説法が行きわたっている。筆者の持論は後述で明らかにするが、非金属六種の電子軌道は何れも順に軌道を満たし、同34は1s二個2s二個2p六個3s二個3p六個3d一〇個4s二個4p四個とされる。

## ●縦列ハロゲン同属六種

番号9フッ素、同17塩素、同35臭素、同53沃素、同85アスタチン、同117ウンウンセプチウムは化学的に活発とくに金属と塩をつくりやすく、その特性をハロゲンといっている。因みに、ハロゲンとは、付加反応あるいは置換反応によって有機化合物中にハロゲンを導入する反応のこと、ハロゲン化銀とは写真の感光材料に利用する塩化銀などのこと、またハロゲン電球とは白熱球の一種でアルゴンやクリプトンなどの不活性ガスを封入後そこへ微量のハロゲン元素を入れた白熱電球を指している。同9弗素は高い反応性で知られ、弗素ガスを吹き付けたとき、不活性で成るガラスも炎上は免れないが、逆に反応性は高いほど安定した化合物を作るともいわれる。それは化合の際に大量のエネルギーを放出するためで、酸素の条でも記したが、その化合物を再び分解しようとしたら、化合の際と同じ量のエネルギーを使わなければならない。問題は弗素より高い反応性を有する物質が極めて稀にしか発見されないことにある。

化学は失敗で産物を生むとされるが、弗素化合物テフロンも同じとされ、フロンⅡクロロフルオロカーボン冷媒の開発時に意図せぬ産物として発見されたという。後にフロンガスがオゾン層破壊の厄介物と分かり、その使用厳禁という運命に比べれば、現行テフロンの出世物語は文明が如何に失敗の繰り返しであるかの立証だろう。次の同17塩素の発見は第一次世界大戦で塹壕に避難した民を殺し、戦場の兵に再起不能の後遺症を負わせた過去を消せない。塩素の発見発明は毒ガスの生産と散布に追われ、他に逃げ場がない密室の民を総て殺し、戦場に並べた毒ガス入りボンベは、風向きしだい敵も身方も見境ない中毒兵を生みだし、その中毒死と後遺症が立証する史実を消すなど誰にもできない。窒素の発見で文明史上に輝く功労者と讃えた同一人を、塩素の発見で戦争史上に消し難い罪悪人とし、それを他人事とするだけで、公金に群がって貪ることを

恥じない本症が政官業言の性癖と知るべきである。その元凶は教育にあり、政官業言の間抜けは学歴のみ、未来など透けるはずなし、教養の本領は克己自立へ踏み込む以外みつかるまい。さて塩素と生活の関係になると、低濃度塩素は殺菌剤として、安価・効能性・無害性の三拍子に適う物質中の一つとされ、飲料水を賄う浄水場での滅菌や排水処理に使われており、食塩は塩化ナトリウムまた人の胃酸も塩酸が主成分とされている。他方、塩素系漂白剤は次亜塩素酸ナトリウム溶液で成り、酸性物質との混合では独特の臭気を放つ塩素ガスを発生、むしろ危険きわまりない毒ガスたるはいうまでもない。塩素は自然界に広く分布し、生命活動においては、神経伝達から消化機能まで多彩な役割をこなすが、薬と毒の表裏一対は各元素いずれにも共通している。

次35臭素は同80水銀とともに、常温下で液体かつ安定を保つ特性を有している。ただ水銀の固体化はマイナス三八・八℃以下で沸点は三五七℃ゆえ常に液相といえるが、臭素は沸点が五九℃だから高めの常温下に放置しておく、赤褐色の蒸気となり、少量だったら一分も経ないうち蒸発してしまうとされる。水銀の蒸気は有害ゆえ大騒ぎは臭素の比ではない。水泳プール殺菌に用いる塩素に対し、臭素塩は温泉などのスパに高い殺菌効果を有するとされている。化合物では有機臭素テトラブロモビスフェノールAが難燃剤として添加され、宣伝文句に防火用衣類の冠を付す商売も出ており、畜生経済下の安全性は怪しい基準のオンパレードを繰り返している。またハロゲンは化学処理剤に用いられるが、その功罪が問われるところ、塩素の発見者への憑依靈と通じるものがあり、そのジレンマを拭い去るには史実の検証が絶対条件となろう。

次53沃素はハロゲン中で最も温和とされ、獐猛フツ素・荒くれ塩素・辛くも液体の臭素そして温和な沃素ともいわれる。徐々に加熱すると一一四℃で溶解、溶けると直ちに蒸発し、鮮やかな紫色の濃密な蒸気へ変わっていく。その沃素は煙と蒸気の違いを明らかにし、煙は黒色を背景に

横から光を当てると、光を反射する微粒子の集団と分かり、撮影も難しくないが、蒸気の撮影は  
何度も失敗を繰り返すうちに、蒸気を通り抜ける光が蒸気分子に吸収される相を捕らえ、その  
条件が明るい色の背景を作ること成功したとされる。ともあれ、沃素は消毒液ヨードチンキが  
普及したことで広く知られ、沃素の摂取不足は甲状腺の疾患原因とされ、沃素を含んだ造影剤も  
心臓のCTスキャンに使われており、かつて日本に出現した森コンツェルンは沃素の採取事業に  
始まり、日本政界のトップに推された入り婿を輩出している。

次85アスタチンは同位体は総て短命で半減期八時間強が最も長寿とされるが、半減期が分や  
秒という同位体もあり、その短命ゆえに天然の生成が繰り返されても、同じアスタチンに出会う  
機会など滅多にないとされる。しかも、アスタチンは地球全体の量を集めても、二八グラムしか  
試算できないとされ、展示会などにおいては、ウランまたはトリウムを含んだ放射性鉱石を囲い  
箱の中へ置き「この中には一個か二個のアスタチンが在るかも知れない」と嘯くとされる。にも  
拘わらず、癌の放射線治療にアスタチンを利用できないかという研究があるのだから、世の中を  
単なる物証で信じる外ない政治家などに真相など透けるわけあるまい。このアスタチンと同じ少量  
元素としては、同87フランシウム、同89アクチニウム、同91プロトアクチニウム、の三つに似た  
傾向が見られるとし、より量の多い同86ラドンも傾向は同じとされている。

次117ウンウンセプチウムは原子質量も密度も半径も不明とされる。筆者が認知し得ない原子の  
データは、質量不明が同104以降の原子で、密度不明は同85・同87・同95と同99以降の原子、半径  
不明は同87と同96以降の原子、結晶構造不明は同85・同86と同99以降の原子であるが、過渡的な  
領域とされるのは同111と109といわれる。過渡的領域とは、用途がなくても可視量を有する人工  
元素と人工的な原子の種と時と場が正確に判明した元素の中に、位置付けられる原子を認めて

表記したものを指している。同109マイトネリウムまでの間には、人工的な原子が二ダースに及ぶ元素があり、原子核も我が身の大きさをもてあまし、寿命が数時間の原子も多く半減期七四日の同101メンデレビウムは最も長寿とされている。次が半減期一九時間という同104ラザホージウムで最も短命はマイトネリウムの半減期四三分とされている。何れの原子名も由来はノーベルシヨール神話に絡んでおり、皮肉にも元素周期表の提唱者ドミトリー・メンデレーエフの時代はノーベルシヨールがなく、アルフレッド・ノーベルもオーナーユえ原子に名は刻まれていない。

同111ダムスタチウムはドイツの重イオン研究所の加速器から生まれ、次112レントゲニウムはX線の発見者レントゲンに因むがX線放射はなく、次112コペルニシウムは天文家コペルニクスを讃える名付けとされる。以降の元素名は総て仮称とされ、その記号はラテン語で一を表わす uno Ⅱ ウノⅡウンウン11とギリシア語で3を表わすトリウムとの合成すなわち同113ウンウントリウムの如く原子番号を元素名とし、原子記号はUntの如くラテン語とギリシア語との合成とし、以下は同114ウンウンクアジウム、同115Unpウンウンペンチウム、同116Unhウンウンヘキシウム、同117Unsウンウンセプチウム、同118Unoウンウンオクチウム、という仮名が表記されている。

さて電子軌道の配置は次の如くで前記に倣い表記する。▼番号9は1s二個・2s二個・2p五個、▼同17は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・3p六個・3d一個・4s二個・4p五個、▼同53は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・3d一個・4s二個・4p六個・4d一個・4f空席・5s二個・5p五個、▼同85は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・4s二個・4p六個・3d一個・4s二個・4p六個・4d一個・4f一四個・5s二個・5p六個・5d一個・5f空席・6s二個・6p五個とされている。因みに、同117の電子数は一一七個だろうが軌道の配置については、筆者の持論で表記に値しないものとして省くとする。



## ●右端縦列の希ガス同属七種

番号2ヘリウム、同10ネオン、同18アルゴン、同36クリプトン、同54キセノン、同86ラドンの六種に、同118ウンウンオクチニウムを加え、右端の縦列に七種の元素が括られている。前記ヘリウムは省略するとし、その特性すなわち不活性を注視すると、現時点でキセノンは化合も合成も確認されている。つまり不活性は適性を欠くが希ガスであることに違いはない。純正の希ガスは総て無色透明であるが、放電装置を施すと、ラドンを除き色が違う発光ガスとなり、その異なる色に元素の特性が表われてくる。同10ネオンの低圧ガスを透明管内へ封入し、そこへ高圧放電を行なうと、管の中心部分に橙赤色の発光ラインが浮き上がり、橙赤色がネオンであることの決め事すなわち特性にされている。また夜景を彩るネオンサインのしくみは、ガラス管の内側に蛍光物質を塗ったものと、ネオンの他にも水銀の蒸気やクリプトンなど封入しており、その合成色が内壁コーティング層の発光と思わせている。半導体レーザーが出るまでは、商業用に使うビームレーザーはヘリウム・ネオン・レーザーが使われており、虚飾を好む電光文明のシンボルとして役立つたが、今や昔で再び欲望のシンボルと化すかは人の有り様でしかない。

同18アルゴンはギリシア語で語源が不活性を意味するため、化学反応と無関係それが名は体の如し所以とされている。高圧放電に際しては、見事なスカイブルーの発光ガスとなり、昨今ではワイン通を気取る俗物が錬金術に操られ、開栓したワインの酸化を防ぐために、アルゴンガスを注入して鮮度の保持に使っている。史上初の電球はフィラメントの酸化を防ぐために、電球内が真空となるよう工夫したが、以後は窒素とアルゴンの混合ガスを封入した白熱電球が作られ特にガラスを薄くしようと、内部の圧力も常圧へ近づくように作つてある。また小型の電球にはクリプトンやキセノンあるいはハロゲンガスなども使われている。アルゴンは空气中に重量比で一%

近く含まれているため、入手も比較的あんかに安価とされるが、実際の売り物は液体酸素と液体窒素の副産物ふくさんぶつが圧倒的あつとうてきの多数を占めている。(※電球はハロゲンの段でも触れている)

同36クリプトンの発光色は筆舌ひつぜつに表わし難いが、LED $\parallel$ 発光ダイオードが出るまでは高品質こうひんしつフラッシュとして使われていた。つまり青白色せいはくしよくの系となるが、クリプトンの経歴けいれきには前記セシウムと同じように、そのスペクトル線のうち一本が現行メートル法の祖おやともいうべき、重大かつ重要な役割を担になった過去を刻んでいる。一九八三年に決せられた現行メートルの定義は、二億九九七九万二四五八分ぶん(約三億分)の一秒いちびように光が真空中を伝わる距離とされるが、一九六〇年に始まる定義は84 Krの同位体86 Krの電磁でんじスペクトル(橙赤系輝線きせん)の真空中における波長はちようの一六五万〇七六三・七三倍に等しい距離を一メートルとしていた。前記セシウムが時間を刻む世界的な標準単位を裏付け、クリプトンが空間を刻む世界的な標準単位を裏付けるなど、原子固有の周波数は文明の時空と標準単位の裏付けゆえ、どんな情報に接しても、周期律に照らせば、裏付けの有無は歴然、政官業言じやうくわんげうごんの発信情報に規則的きそくてき周期律など全く存在していない。

同54キセノンの発光は紫色とされる。一九六二年キセノン化合物が見つかり、希ガスの不活性神話しんわが崩れると、二フッ化キセノンのように、獐猛どうもうフッ素との合成を主しゆに数十種に及ぶ化合物が発見されたとも伝えられる。熱伝導性ねつでんどうせいが低いキセノンを白熱電球に封入ふうじゆすると、フィラメントの高温化を防ぎ溶けにくいようにするため、より明るい光が放たれる助長じゆちゆうにもなるが比較的小ひかくてきに高い価格に難なんがあるという。社会一般に知られるキセノンには、自動車のヘッドランプに用いられるメタルハライドランプがあり、その眩い光は照射する側がわに有効でも、照射される側は視界しかいを失う目眩めくらましとなるため、不愉快ふゆかいも極まるが、映写機えいしやきの照射も、舞台上ぶたいじように浴びせるスポットライトも同じキセノンが用いられており、それは戦争兵器せんそうへいきが生んだ副産物ふくさんぶつともいわれている。その映写や

スポットライトの課題は平行な光線を作ることであり、現在は極微で強力な光源から生じる光をパラボラ型の鏡面に反射させる方法が使われ、パラボラの焦点に置く光源が小さくなるほど光は平行に近くなってくる。アイマックスの映写機になると、巨大スクリーンに写せる量の明るさが求められるため、キセノンシヨートアークランプも一五キロワットを使用しており、充填されるキセノンも超高压になるので、その保管は万一の破裂に備えた特殊なケースを用意したり、その取扱も防護服用という物々しい装束で行なわれている。

同86ラドンは放射性最重量の希ガスで半減期三・四日の短命とするが、ラジウムの放射壊変やウランやトリウムの崩壊系列が作る主要元素ゆえに、その生成は自然界の量産システムに乗じて絶えることがない。今やウランやトリウムも埋蔵量は多と推定されるが、大多数が花崗岩の中に含まれ、高濃度放射能が問題化したとき、米国ニューヨーク州グランドセントラル駅など、既存施設で花崗岩を大量に使った建造物は驚天動地にさらされた。地層の震裂を潜り抜け地表に相を現わした希ガスは、怪鳥ラドンに擬えた主役で映画化にも利用されたが、放射能に潜む恐怖感はその深層心理に憑依してやまない。広島と長崎の被爆が因果応報に値するかは別とし、建造物の床下に溜まるラドンが除染の対象にされ、それが核兵器製造国を脅かしたり、放射能の検出から除去までの新事業が生まれ、温泉市場が急遽ラドンを放逐したのも因果は知れている。

僅か一〇〇年前ウラン鉱床の近くに洞窟温泉を創つたり、入浴用ラジウム施設を建てラドンを吸った信仰の痕が残されている。その迷信から放射性物質の健康グッズが作られ、中毒に罹った愛好者は自分自身の骨が壊死していくことを知らないまま、希ガスを貴ガスのように受け容れる信仰もあつたとされる。ラジウム・ウラン・トリウムなど核の崩壊系列に属したラドンの侵略が本籍を穢すように、その戸籍篡奪を企む新手段の跋扈も僅か一世紀の出来事であるが、氏姓鑑識に

無縁むえんのコスモポリタンにとつては、忘我無情ぼうがむじょうの二〇世紀だつたともいえよう。新世紀しんせい九・一一と三・一一の被爆に共通している課題とはなにか、原発容認げんぱつようにんと核兵器先進国の間に横たわる因果は応報を超えており、その剖判ぼうはんは神の領域りやういきへ踏み込まない限り解かいしきれまい。

一九六七年プレートテクトニクス説と呼ぶ地球科学論が提唱ていしょうされ、既存論きぜんろんウエーゲナーの大陸移動説いどうせつに代わつて広く受け容れられている。つまり、新説と旧説の違いは、大陸が地殻上ちかくじょうを船の如く動くとした説に対し、新説は地殻と一緒に大陸が移動するとし、マントルの対流たいりゅうで移動した海洋プレートは、大陸プレートとぶつかり、その下へ潜り込んで海溝をつくり、海洋プレートの割れ目にはマントルが湧き出して中央海嶺かいれいに成るとしている。日本人にしてみれば、何を今さら当たり前のことをとるが、温泉立国ともいえよう日本列島においては、純正ラドンと崩壊系列ラドンを認識し得る環境は古事記の時代に始まっている。覇権と結ぶ科学第二世代は医学者ハンセン（一八四一〜一九一二）の発見とし、ライと呼ぶ菌の性質が判明はんめいしたといい、今やハンセン病の名で知られ、特徴は傷口に入った菌が皮膚や末梢神経を冒すため、現在はスルフオン剤など内服して完治かんちさせているという。（※後述で明らかにする）

さて前記に倣い電子軌道の配置を表記しておきたい。▼番号2は1s二個、▼同10は1s二個・2s二個・2p六個、▼同18は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・3p六個、▼同36は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・3p六個・3d一〇個・4s二個・4p六個、▼同54は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・3p六個・3d一〇個・4s二個・4p六個・4d一〇個・4f空席・5s二個・5p六個、▼同86は1s二個・2s二個・2p六個・3s二個・4s二個・4p六個・4d一〇個・4f一四個・5s二個・5p六個・5d一〇個・5f空席・6s二個・6p六個、因みに▼同118は筆者の持論に適合しないために表記の対象としないが、電子数は一一八個と推定して間違ひなからう。

